

飯尾甚太夫一騎先駈の事

附成合平左衛門が事

關ヶ原にて飯尾甚太夫安信只一騎、黒田長政の陣の前に馬を乗寄せ、大音あげて名乗けるをいざ討取んとはやりをの若者ども進みけるを、野口左介益田與介見て只一騎先駈したる志、昔をいは、一の谷の木戸口にて熊谷平山が終夜名乗つる体なり、平家の士出合ざりしも志の者を助んとなるべし、たやすう討べけれも、夫は情なし、後を見よと鎧を横たへて制しければ、飯尾度々名乗て馬を引返しけり、飯尾は豊後國宮來の垣見和泉守が兄利右衛門が子にて、五千石の祿にて秀家に奉公し居たり。

株瀬川の軍に中村の士成合平左衛門利忠牛の舌の指物にて真先かけたるを飯尾討取りけり、其後黒田家に仕へ千石の祿鐵砲預りしに、長政成合が首取たりと聞き彼成合は世にかくれなき勇士なり、其首を取りたればとて三千石増與へられしとぞ、成合も中村家の士なり、天正年中秀吉が蒲生氏郷、木村伊勢守秀俊に奥州數十萬石賜しころ、兩家ども士卒の少きに困りしかば、秀吉下知して日本國中の士主人に不足ある者共、或は主人かまひ有る面々皆兩家に行きて祿を得べし、主人咎めなば秀吉相手たらんと札に書て立られしかば、成合は和泉小

木川の一番鎗を合せ、秀吉の威狀賜りけれども、一氏わづかに三百石あたへられし故、木村が許に行きて三萬石、佐沼の城代たりしが木村が家亡びて後、復中村が家に歸りて仕へ、株瀬川にて討死したりけり。

蒲生備中父子戦死の事

蒲生備中真合は石田が内にて聞ゆる勇將なり、關ヶ原の前軍評定の時、真合明日は偏に必死と思ひ定めらるべしと云ふ、島左近明日先陣に進んで忠義を胃として打勝べき物をといへば、真合また昔より利を得るは天のたすけによるといへども、軍の正しきと法令の嚴しきとの二ツにあり、よく内に省たまへ、偏に必死と思ひ定められれば勝の半なるべし、左あらずば復御目見致さじとて坐を立ちけり、真合元より敗軍をさとりて、三成に必死を究めし詞を出したり、斯て關ヶ原にて只一騎三成が陣に乘行て何事にかいひけるに、三成うちうなづく、真合馳歸り競ひかゝる敵に向ひて散々に戦ひけるが、織田長益に合ひて昔は蒲生の家にて横山喜内、今は石田が内にて蒲生備中とて人に知れたる者なりといへば、長益神妙に候われに降参せよといひもどらぬに、こは何事ぞやとて拜み打に斬て打落す、長益の従者千賀文藏鎗を以て突通すと、其柄を握て引組たるに、文藏が弟文吉刀をとり直し、真合を刺て遂に打取りけり、真合が子の

大膳は戦ひ半に首一ツ提げて父に見すれば、功名も何にせんといふを聞き、又東に向ひて押かゝる敵にかけ合せんとせしが父討たれたりと聞き、

ましてしばし我そわたりて三ッ瀬川あさみ深みも君にしらせん
といふ歌を高らかに唱へ自害したり、大膳幼より戯を好ず、關ヶ原に出陣の時、母われ
汝が富貴を願はぬにはあらざれども、弓箭の家に生るゝ身は昔より名を重んずる習ひなり、凡
物二ツは兼がたし、身を全うして名を忘れよとは言ふべからずといひしかば、父と共に死して
母の戒にたがはざりけり。

大谷吉隆平塚爲廣最後合戦和歌贈答の事

越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆は、會津征伐に従んとて兵を出さんとせしに、石田三成より
榎原彦右衛門を使にて、しひて佐和山の城に來られよ、密に評議すべき事有りと云はせける
に、此は心得ずと思へども是非を論せずしひければ、止事を得ずして佐和山に至る、三成悦で
今度關東を討亡すべき謀を語りける、大谷驚て故太閤常に徳川殿の智勇の備りたるを崇敬
おはしましたし、今徳川家を打亡さん事思ひもよらすといひければ、三成我上杉景勝と計りて景
勝旗を揚げられたり、其約を變じて景勝一人を攻殺させん事本意に非ず、運を天命に任するの外

道なし、豊臣家の恩を厚く蒙りたる身なれば、秀頼公の御爲にかく一大事を思ひ立るぞかし、
なと豊臣家の恩をわすれられしやといへば、大谷さらば力なし、命を秀頼公に奉りて、今度の
軍に討死すべし、但しかゝる一大事を思ひ立れんには思慮すべき事二つ有り申出して見ん用ひ
らるゝやといへば、三成いかで所存を防ぐべきと悦びしかば、大谷が曰く世の人石田殿をば無
禮なりとて未々に至てもころによからすいひあへり、江戸の内府は只今日本一の貴人なれど
も、卑賤の者に至るまで禮法あつて仁愛深し、人のなつき従ふ事大方ならず是一ツ、次に大事
は智勇の二ツならではどげ得がたし、石田殿は智有りて勇足ざるかと存候、今度毛利浮田も皆
かりに同意したる人々なり、必しも頼みとすべきにあらず、水口の長束と計り、内府關東に歸
路の時、石部あたりにて旅宿の時夜討して火をかけ十死一生の軍せば勝利疑なきにあたら
を外されぬ、内府關東に歸られけるは虎を千里の野にはなつが如し、十全の勝をはかられなば
又圖をはづして悔ひども益あらむ、此上は命を秀頼公に奉るの外他の道なし、士卒は皆平塚に
下知させて候へば其志計りがたしといへども、よも別の事は候はじとて伊益の驛に至り、平塚
に告れば平塚大に驚き、三成志大なりといへども大軍を率うべき將畧なし、然にかく與せら
れしは禍をまねくといふべし、然れども既に許諾せられたればいかんともすべからずとて、
三蔵が送り來りし使者には心得候とぞ答へける、吉隆敦賀に歸りしに關東勢岐阜を攻落しける

と聞きて敦賀を打出て關が原に乗入りしが、秀詮の裏切を元より悟りければ、僅に六百餘の陣を一手になし、關ヶ原におし出し鎗を作りて秀詮に向ふ、吉隆は目を病て士卒は皆平塚に下知せさせ、練絹の小袖の上に村蝶を墨にて書たる鎧直垂を着、四方取はなしたる竹輿に乗りたるが、秀詮裏切して討てかゝられしかば、大谷齒をかみ秀詮の不義骨髓に徹せり、敵の旗本を目にかけて切て入べしと下知しければ、木下山城守、大谷大學、戸田武藏守重政、平塚因幡守爲廣けふを最後と思ひ定め、面もふらず切て入りしかば、秀詮の先陣立足もなく敗北す、されど藤堂高虎を始め、東國の軍おしかけ進み來れば、秀詮の先陣もり返して討てかゝる、されども死狂ひする鋒尖に、秀詮の先陣又追立られけり、爲廣敵あまた打とり、其首を吉隆に送り、此首自ら討取候、冥途のつとに參らせ候、日比の約束只今討死し候ひなんとて自害候て人手にかゝらざれと言遣はし、外に歌一首書添へたり。

名のためにすつる命は惜からじつひにとまらぬ浮世とおもへば

一説に秀詮の士横田半介を討取り、其首を吉隆に送るともいへり。

吉隆使に向ひて武勇といひ和歌といひ感するに餘り有り、はや自害して追付再會すべしと答へて、甥の祐玄といふ僧に返しを書せて使に渡しけり。

契りあらば六のちまたにしばしまておくれ先だつ事はありとも

かくて平塚は戦ひ勞れて、畔に腰かけ息づく處に、小川土佐守祐忠が兵權井太兵衛鎗を提げ歩み寄る、平塚立上り我は平塚因幡守なりとて散々に戦ひけるが、終に倒れながら十文字の鎗を投出し、汝が重寶にせよとて討れけり、戸田重政も思ふはど切て廻り討死したりければ、大谷が軍敗れて吉隆自害しけり、行年四十二歳とかや。岩佐五介首を羽織に包み、其邊の田の中に埋み、先手に向ひ討死しけるを、藤堂の士大將藤堂仁右衛門其首をとりて御旗本に奉りけるに、東照宮五介は聞ゆるものなり、缺唇なるべしと仰せ有りけるに、しか有りしとぞ。

瀧川内記功名の事

瀧川内記辰政は左近將監一益が末子なり、秀詮に仕へて松尾山にて秀詮の軍敗北の時、いさみかゝる敵を支へて従者に首五ツとらせ、秀詮のもとへ持せやり、其所をさらで吉隆が兵に鎗を合せ、岸より下に敵を突落したれば、山田喜内其首を取り、敵なは競ひかゝりけるを笹地兵庫と俱に散々に戦ひて首を取りたり、後池田の家に仕へて祿三千石、士大將たり、此軍の時廿四五計の年にや。

辰政其始織田上野介信包に仕へて、十六歳の時小田原の軍に、信包織田常真に對面せんとて従者を遠ざけ、辰政只一騎を具しておもむかれけるに、江川の丸より横筋かひに鐵砲を打か

くる、辰政信包の矢面に乗りふさがりしゆゑ、はるに鐵砲の玉三ツわたる、信包大に感賞して脇ざしをわたへらる、辰政此時七郎といひけり、池田家に仕へて丹波と稱し、又出雲と改む。

本多正重の事

關ヶ原の戦ひ九月十五日辰の刻過るまでは、東照宮桃配に御旗を立られつる所に、本多三彌正重来て、今少し先へ御旗をすゝめ給ひて然るべし、是は戦合遠しと申を聞き召し、口わきの黄なる男にていはれざる事と仰ければ、三彌御後の方に廻り、口わきは黄なるにもせよ、遠きは遠しとひとりごと申けり。

三彌は佐渡守正信の弟にて、若き頃武者修行して度々功名あり、長篠の後は瀧川一益のもとに有り、いづれの軍にや、諸浪人皆はたらき有りしに、三彌手にあはざりしかば、一益さしもほまれ高き人の今日の事はいかにと云ふ、此答は明日こそとて其わけの日首二つとりて、昨日の答へ是なりといへり、甚風流を好み、物敷奇いやしげなる事なく、常に身に薰物をこめたり、前田家にもしばらく有り。慶長元年伏見にて東照宮に仕へ奉りけるが、以の外に直言する人なり、或時幸若八九郎を召され、高館の舞終りて後、武藏坊辨慶は世にすぐれたる

者なり、今の世になかるべしと仰せ有りしに、三彌承りて今の時辨慶は有るべけれども判官に似たる主君の候まじと申せしとなり、大坂冬の陣の時台徳院殿に仕へ奉りけるに、東照宮三彌はよくすねる者なりとて仰られけるが、其後一萬石賜りたり。東照宮御前に召出され、いかに思慮したるや人がらをたしなみてすねざるよし聞きたりと仰せ有りければ、三彌將軍様に仕へ奉りよく候あのごとき主君にすね申すはきらがひにこそ候へと申けるを聞き召し、又持病おこりたりと笑はせ給ひけるとぞ、七十二歳元和二年病死せられけり。

梶左馬助御書と認むる事

同じ時祐筆梶左馬助かねて御書を九月十五日の日付にて、今日巳の刻御勝利と認置きけり、東照宮御成有りて十五日とさしたるは尤なり、巳の刻とはいかに、左馬助承り敵は大軍なり、巳の刻を過たらば御敗軍と存じたりと申けり。

左馬助は上田善四郎が四男にて祿四百石後千石賜はりて御使番なり。

田邊甚兵衛幼年功名の事

田中兵部大輔の士田邊甚兵衛十四歳にて關ヶ原に出で、従者敵を突伏せ田邊を馬より抱下して

首をとらせしとなり、幼少にて武功世に名高かりければ、黒田長政田邊に逢て大に感賞し、田邊をとりかひたる従者を呼出し、其事を問はるゝに馬より抱おろしたるに、刀を抽てふるひければ恥しめて首を取りたりと云ふ、長政さては勇士なり、ふるはずにかゝりたらば途方なき故といふべし、恥しめられて首を取りたるは勉めはげますによりて勇氣を致す所なりとて彌々ほめられけり。

辻小作中黒道隨が事

辻小作は福島正則に仕へしが、可兒才藏と親しみ深く、共に世に聞えたりし物なり、中黒道隨は石田の賓客の如くもてなし置けり、關ヶ原の軍敗れし時、中黒唯一騎落行兵の中に踏止り、さんくゝに戦ひけるを辻見ていざ討とらばやといへば、可兒なさけなき事をいふもの哉、たすけばやと云辻さては生どれとや、可兒に好まれて辭し難しといひすて馳行くとこゝに、中黒馬を深田に打入りて、諸鎧を合せて更に動かす、辻詞をかけ日頃のよしみに助んするよ、早く取付けとて槍の縛をさし出す、中黒かゝるきはに命助かりても何にかせんとて、すでに自害すべく見えしかば、辻何とたばかるべきや、神明にかけていつはらじといへば、とりつきたるを辻主従引あげて陣所に歸る、可兒見て大に悦びけり、さて辻は物具脱て裸になり、抑に打臥して

只今まで敵なりし中黒を物とも思はぬ有様にて物語す、中黒あまりに悔りたるよと心中にいかりけれども命を助けたりし恩を思ひて、さてやみぬと後に中黒此事を語りて笑ひしとなり、中黒後井伊直孝招きて祿二千石あたへられけり。

或説に丹羽山城、谷出羽、笹野才藏、稻葉内匠、中黒道隨、渡邊勘兵衛、辻小作、兄弟の約束して武勇を勵み、天下七兄弟と云ひしといふ。

島津義弘關原退口の事

附大坂の商賈義氣の事

關ヶ原の軍敗れし時、島津義弘眞丸に成て福島刑部少輔正武の陣の前を切抜けんといふ文字におし通る、正武十六才かけ合せんとする處を、梶田又右衛門死狂する敵に軍はせぬよとて追留めたり、東國勢おしかけしかば義弘の從子中務大輔豊久義弘の馬のかたへに乗寄せてさゝやく体なりしが、やがて大敵にかけ合せ討死す、義弘今は是までなりとて取て返されけるに、阿多長壽入道成淳義弘の馬の前に打ふさがり、大將は千騎が一騎に成候ても猶死すして謀をめぐらし候を道とこそすれ、とく打破りて引退き給へといふまゝに馬の首を引直し、島津兵庫頭最後の合戦をするぞと呼はりて、さんくゝに戦ひて討死しけり、成淳が義に勵まされふみ止り

支へ戦ひ討死する者多かりける、其ひまに義弘又士卒を集め列を整へ引退く時、松平忠吉井伊直政おますなど追かけたり、義弘が兵ども種ヶ島の鐵砲を腰に挿たるを拔出し、ひた／＼と折しきて打かけたるに、忠吉直政共に手負てそれより物わかれしたりけり。

一説に本多忠勝追かけたるが、馬を鐵砲にてうたれ、馬より落れば梶金平馳來りて、おのが馬に忠勝を乗し其間に、島津が軍隔たるといへり、又河上左京が從者柏田源藏がうちける鐵砲に直政中るともいへり、又松田某といふ朝鮮陣の時連て歸りし小兒の成長したるを組にして有りけるが、鹿の角のたて物の背こそ兵部よ打留よと下知しければ、鐵砲をさし向けたるに直政肩尖刀を横たへて馬を乗りかけられしに、彼兵松田某と名乗て打しに眉尖刀に中り、其玉腰骨にかすりて馬より落されけり、さて亂鎮りて後薩摩のもとに直政を還せられしに、直政松田を呼出し盃をさし、關ヶ原にて既に死すべかりし身の幸にながらへて今日對面する事を得たりといひて後、わが片足をなやみぬ、かゝる武功の人に少祿こそ不足に候へ、今日のもてなしに祿を増給はり候へといはれけり彼物頭後に直政の呼出されて對面に及びし時のめいわくなる、一生に覺すといひけり。

義弘近江の甲賀にかゝり、老翁一人案内者にして道しるべさせ、伊賀の山路を経て上野まで行き着かれたり、爰は筒井伊賀守定次の城なり、使を以て島津義弘唯今打過候と云ひ送りて行處

に、野武士四五百人がほゞ山の中に待かけたり、義弘物の數どもせず打破り、二人生捕て上野に立歸り、大手の棚の木にからめ付け、さてそれより奈良に出で、かの老翁には刀にさし添られし赤銅の筭をあたへ、此をしるしに必薩摩に來れ、今度の勢に報せんとて大坂に至り、船に乗り鹿兒島に歸られけり。

一説に左近丞と云ふ姓薩摩に有り、是は慶長の頃大坂の商にて年久しく薩摩の米をあきなひける者なり、關ヶ原破れて後義弘大坂に着れしに、士一人先達てかの商家に行きしかば彼商待わびたる体にて、君はいかにおはしまし候と問ふ、いざと討死ありしよと答へければ、商家涙を流し、年比厚恩を蒙りし事なれば、關ヶ原破れぬと聞くより必爰にわたらせられんと相計りて船を設けて待ち居たるかひもなく、口惜き事なり、せめて御供に參らんとて水中に飛入らんとせしをおし留め、今の時なれば人心のはかり難くてかくはいひしなり、實は一方打破て爰におはせしなりといへば、かく疑れしは恨なれども、それを云はんには時移るべしとて、船にのらせられん様をこそといひも終らぬに、義弘來られしかば酒樽を積み其間にかくしのせ、其身も付添ひて直に薩摩に赴し、其者の子の中一人薩摩に仕へし其子孫なりといへり。

彼老翁薩摩に行ばやとおもへども道遠ければ空しく過しに、程經て人にいざなはれ、鹿兒島に

行きて弁を出しければ、なとどく來らざりしぞとてさまぐ舞し、黄金五百枚あたへ、いざなひし人にも黄金あまた與へて人を添へておくり歸されけり。

東照宮勝鬨の儀を延給ひし事

關ヶ原の軍敗れしかば、金森法印とて勝鬨の儀式行はれ候らばやと申けるを、東照宮諸將の武功によりかく敵をば打破りたれども、諸將の妻子大坂に人じちとなりて敵の中に有り、此を事故なく歸し與へざらん間はわが心を安んぜず、勝鬨をいかで行ふべきと仰せられしを聞く人、愈感服しけるとぞ。

細川忠興の北の方義死の事

細川忠興の北の方は明智光秀が女なり、父謀反の時忠興に向ひて申されけるは、父ながらかくはだて事よくなるべしともおもはれず、瀧川柴田など申人々多ければ必軍敗れ候べし、女の淺き智慧にも口をしくこそ存候へ、男の身ならんには鎧の袖にすがりても諫め申べきを力なし、君もし與せさせ給なば世の譏いかでかのがれさせ給はんと涙に沈まれしかば、忠興光秀に同心なかりけり、其後程經て秀吉伏見に有りて諸大名の北の方を呼入れて櫻れし事のありしに、忠

興の北の方かくと聞き、女の人なきて一間に入りて他人にまみゆる事やある、われも召されんとならばとて懐に匕首を用意せられけり、此より秀吉の悪行はやみてけり、石田西國の諸將をかたらひて兵を起す時、諸大名の北の方を大阪城中に取入れんとするを、北の方聞きて傳に付られし河喜多石見稻留伊賀小笠原正齋を呼て、吾此所を出ん事思ひもよらず、城中にとりこめられんは恥辱なり、よく斷を申候へ、猶聞入れられずば是を限と思ひ定むべしと語られしかば正齋殿東國に向はせ給ひし時、おもひかけざる事のあらんには、正齋はからひて武將の恥なさらしごと仰せ置れ候ひき、敵奪ひとらんとするならば其時思召切らせ給へと申しけり、かゝる處に城中に入れよと使を以ていはせしかば、再三斷の旨を述べられども聞入れず、七月十七日の未の刻ばかりに、大阪の軍兵五百餘り玉造口の屋敷をどりまきて、とく城中に入れ申されよ、さらずは亂入りて奪取んと呼はりけり、女房はらわはてて泣き悲めども北の方はさわぐ色もなく、かくあらんとは兼ておもひ設つる事ぞとよ、正齋介錯せよ、われ生る世にまみえざりし人々に死しての後も見られんはよからじとて面に覆面打かけ、くゝり袴着て刀を抜き胸につきたてられしかば、正齋肩尖刀にて介錯し、其まゝそこに腹を切らんとせし處に、正齋が小性はしり來り、殿の北の方と同じ所に自害あらば後の誹の候べきと云ひければ、正齋あまりのいたましさにわすれたるよとて、齋子の外に走り出で、家に火を懸け、石見と共に腹切て炎の中に死し

たりけり、伊賀は光秀より附けられし身なれば、遁るべき道もなきに人にまぎれて落ちうせせり。

忠興後にさがし出して誅せんとせられたるを、松平忠吉伊賀は無双の鐵砲の妙手なれば助け置きて若ものにおしこめさせんとしひて乞れしかば、忠興力なくて止みけり、伊賀は世の交もなく髪をそり一夢といひけり、百發百中の手だれなりしかども、人多き中にては大きなるものも中らざりしとぞ。

忠興の北の方かたみとやおもはれけん、手ずさみのやうに書すて、硯の中に入れられし歌に、先たつはおなしかさりの命にもまさりてをしき契とそしれ

落出たる女房の取傳へて世に残りけるとなん、北の方はかねてかくあらんとおもはれしかば、幽齋の妹、年老て宮川殿と申せしと、忠隆の北の方長島の妹とに、吾は人じちに取られんと世の物いひの候はどに落失ばやと存るなり、同じくともなひ参らすべけれど人多くては中々うき目や見る事の候はん、とく此隣の築地一重踏えて落させ給へやとて、宮川殿は建仁寺忠隆の北の方と浮田秀家の北の方に忍び行きて此禍をのがれたりとかや、誠に義烈のみにあらず謀もゆしき人なりと語り傳へて袖をぬらさぬ人もなし。

安養寺門齋三成を生捕んとせし事

附 姉川合戦の時門齋生捕られし事

附 遠藤喜右衛門討死の事

三成兵を起す時、大津の城に入て京極高次に對面し、彌秀頼公の味方有るべしとぞ申ける。高次の士に安養寺門齋と云ひし者、黒田伊豫に向ひ、今三成城中に入る事、誠の天のあたふる處なり、からめ取りて關東に奉らんと云ふ、黒田聞て三成を生捕とも西國の諸將大軍にて攻圍むべし、いかでか防衛術のあるべきとて聞入れず、門齋あざ笑ひ、三成は譬へば亂の首なり、其餘は手足の如し、首を碎くほどならば手足何の恐の候べき、たとへおし寄候とも固く守りて戦ふべし、軍せずして三成を生どるならば、天下に名を揚げ勳功誰かならぶべき、吾年老ぬれど成をからめん事はたやすからんとて、今村掃部をも勸しかども、争論に時移りて三成城を出行きけり、門齋はもと淺井長政に仕へ、姉川の軍に生どられ、龍ヶ島の陣にて信長の前に引出し、信長の曰くけふ勝に乗て大谷を打破らんと思ふはいかに、汝が命を助けなん、此勝敗いかなるべきと問はるゝに安養寺承り、長政が父下野守小谷に有りて其兵三千計もや候ひなん、然

るに疲れたる兵を以てかろくしく攻められ候はん事然るべからずと申す、信長打うなづいて、けふ取りたる首ども出して安養寺に見せて其姓名を問はるゝ中にも、竹中久作が取りたる首を見て、遠藤喜右衛門直繼と申者にて候、いかなる有様に候ひしと問ふ、

久作はもと齋藤家の士信長に奉公しけり姉川にて淺井の士遠藤喜右衛門直繼云ひけるは、信長晝はかたく守り夜々横山の城を攻む、信長の本陣龍ヶ鼻を一夜討せば勝利疑なしといふ、長政是を用ひず、まからばかゝる圖をはづして淺井の家危き事朝夕にあり、軍敗れん時信長を討ん者は吾なりといひしが、いひつる詞にたがはず首を刀の鋒につらぬき、大將の實檢にそなへんと云て信長の旗本に來りけるを久作討取りたり、久作かねて必遠藤を吾討取るべしと人ざしたりけり、いかなる故ぞと問ふに其仔細二つ有り、われ江州にて遠藤と相知り、よく見知りたり是一つ、彼は開ゆる剛の者にて、力あくまですぐれたり、常に進むに先だちて退くに後る是二つといひしが、果して直繼が首を得たり、竹中聞て首一つ提げ殿はいづくにましますぞと云ひてちかづき進み來りしまゝ敵のまぎれ入りて、殿を切奉るならんと思ひ引組で討取りしと語りければ、夕部大依山にてもし軍破れ候ならば必生て歸らじ、信長を一太刀恨み申さんと遠藤がいひつるが、果して其詞の如くなりさといふ。

遠藤は淺井家に名有る剛の者なり、信長江州佐和山にて始めて長政に對面あり、公方昭の歸京の次に佐々木承禎を攻打べき事を議し、長政も力を合すべき由の約を定め、岐阜に歸らるゝとて江州柏原に宿せらる、淺井縫殿、中島助九郎、遠藤喜右衛門、三人馳走の爲柏原に行きしが、遠藤早馬にて小谷に歸り、信長を見るに武勇猛にして謀たくましき人なり、淺井家をくつがへすべき事疑ひなし、今日決断せられ候へ、臣信長を刺殺し申べし、其勢ひに乗て美濃に攻入り候へかすと云ふ、長政聞て一度約して變せん事本意に非ずとて聞かざれば、直繼再び柏原に赴き、信長をもてなし、信長無事に岐阜に歸られたり、直繼常に是を悔みけるゆゑ、姉川にて獨すゝんで信長を討たんとしけり。

其次に出せる首を見て、是は安養寺が弟にて彦六甚八と申者にて候、死ば一所と契りしに先だちつる事こそ口惜けれとて、首をはねられよとて其後はものもいはず、かゝる所に秀吉其比は藤吉郎と云ひしが栗毛の馬の汗かきたるに諸鎧を合せ、白沫かませて馳來り、いざ小谷へおし寄せ攻破るべきといひしに、信長いやとよ、かるゝしき軍はあふなしとて許されず、秀吉後悔あらんものを、急ぎ寄せ給へと強れども信長聞入れずしてさて止みけり、安養寺は只首をはねられ候へといひけれども、吾に奉公せよとてさまゝなだめ申されけれども降參せず、遂にゆるされて小谷に歸りけり、安養寺にたばかられて信長軍を返されしかば、淺井三年經て小谷の城落ちたり、其後安養寺淺井と京極と一族なりし故高次に仕へけり、若き時三郎左衛門とぞ

申ける。

大津城合戦京極家の士戦功の事附赤尾伊豆が事

高次は關東に素より心を寄せられしを、大阪より朽木河内守元綱を使にて、秀頼公の外戚たれども江戸大納言殿にもゆかりあれば、人の疑を散せん爲に幼息熊若丸を人じちに出され候へどなり、高次かるくしく敵の色をも立がたしとて、止事を得ず熊若丸を出して北國に軍を出されけるが、岐阜の城おちたるよしを聞て北國に向ひたる人々大垣をさして引返されしかば、高次北の庄より直に海津にかゝり、九月二日の夜半に大津に歸り、立花宗茂筑紫廣門粟津に陣せしを夜討にせんと謀られしに、黒田伊豫同心せずして止め、さらばとて關寺の門を閉ぢ城下の兵糧を取り入れ専ら防禦の支度せられけり、宗茂廣門石部より引返して勢多に陣取り輝元の陣代毛利元康等は三井寺に陣し、久留米秀包南條中務を始として三萬七千餘四方よりおし寄せたり中にも宗茂の軍兵ははげしう攻つめて、死人をふみ越て乗入らんとす、防兼て京口の旗をしぼりければ、多賀出雲守眞先かけて塀を打破り、三の丸に關を作りかけてひた／＼とおし入りけり、山田大炊、赤尾伊豆、足輕頭には井口左京、大橋肥後、安養寺門齋、使番山田三右衛門横山久内、田中茂兵衛、茨川口を固めたるに京口より敵亂入せしかば、二の丸さして引退く、

高次使を以て何とて三の丸をすて、早く二の丸へ引取るや、仕寄を付られなば防ぎがたかるべし、はやく敵を追出せと下知せられしかば、門を開て切て出る、山田大炊十文字の鎧の繒を片手に取て背の上にてふり廻し、參る／＼と呼はり懸て一番に鎧を合せ敵二人突伏たり、此を山田大炊が茨川口の鎧と世に稱しけり、赤尾は猩々緋の羽折を着て長身の鎧にて數人突伏せ、山田三右衛門も散々に戦ひけるが討死せり、二の丸に引取る時、山田と赤尾どかはる／＼六度まで返し突拂ひたる殿の振廻目を驚しけり、二の丸の門際にて赤尾山田已下ふみ止りける時、唯少齋門をたて關貫をさす、赤尾ちつともひるまず、長身の鎧をかたはらに置き敵の方へ足を投出し草鞋のひもを結び直す、其武者振を敵見て少しためらふ時、少齋門を開けば中に入る事を得たり、赤尾棄殺さんどしたるよといひしに、少齋敵追すがりて二の丸に攻入らんとする故にこそ門をさしてけれ、各を助ん爲に城の危きを忘るべきやといひければ、さばかりの伊豆も答ふるに詞なかりけり、黒田次郎兵衛、尼子宮内、安養寺長門、三田村安右衛門、今村掃部、赤尾久助、中井民部、小豆掃部、油井周防等は京口を防ぎけるが、三の丸へ攻入り敵と戦うて討死すくなからず、銚子五郎兵衛は始め關白秀次に奉公せしに、あくまで酒をすきけり、ある時朋輩に語りけるは、殿下のかたへに立置れし白熊色白く丈長し、おはれ背の上のみだしかけて軍の先がけせん物をといひしを秀次聞て、銚子を呼で是を肴に酒を呑とて彼白熊をわたへられ

しかば、銚子誠てうしまごにありがたく存候、戯れに申せし詞しろしめされて候やらん、若し此の後軍の
 わらん時先に申せし詞をいかにせんといひけるが、今日栗色のしほ革かに金の筋すぢつけたる羽折はなをりを
 着、かの白熊しろくまの雪ゆきの如くなるを胃いの上うへにみだしかけ、十文字の鎗やりを横よこたへ、尾關おせき甚右衛門しんえもんと共
 に亂みだれ入る、敵五六人突伏つきふせて胃いの鏢かたむねを傾かたむけ、一足ひとあしも引まじきぞと呼よはり討死うちじしたりけり、事つかる
 君きみは異ことなれども、賜たまひたる白熊しろくまにて敵味方てきみかたの目を驚おどす討死うちじをぞ遂つひたりける、尾關おせきはもと柴田勝
 家いへに仕へしが、後高次北國こうきくより歸かへられし時、尾關おせきを近づちかげ夜酒よさけを酌くみて密ひそかにさ、やかれたるは、
 吾石田われいしだに與ともするにあらず、歸りて大津おほつの城を守らんと思ふなり、敵の真中まんなかに小勢こせいを以て軍せん
 事尤ことなほかたき事なり、汝なが智勇ちゆうゆうを頼たのむと語かたられしに、尾關おせき涙なみだを流ながし、人々ひとびといくらも候中に何なにと思
 召しめされて斯仰候このうけぞや、此上こゝは二つなしと答こたへければ、高次たかつやん汝討死なつちすべきや、わが爲ために命いのちを捨すて
 とおもふ者多おほけれと謀まを同じくする者稀まれにこそあれ、汝偏ひなに討死うちじとのみおもへるは吾志わがこころざしに非
 ずといはれしかば、尾關おせきかく身みにあまり候御詞ごことを承りては骨ほねをさざまれ候はと堪たがたけれども
 如何いかにして此恩報このんぼうと奉たらんといひしが、其時そのとき銚子てうしと俱ともに戰死せんじせり、後高次城のちたかつやを出でられける時
 赤尾あかおと山田やまだと高次たかつやの輿こしの左右さゆうに供ごしけるを見て、寄手よせての軍兵指ぐんべいさしをさし、かの大膽者だいたんものよと云ひあ
 へり。

一説に伊豆茨川いづみいばら口の敵を追拂おひはらんとて出ける時、跡あとをば弟あにの久助くすけ内田うちだ太郎たろう左衛門ざえもん多賀孫たがひこ左衛門ざえもん

門等守りけるを、寄手よせてさびしく攻る、久助手くすけ負おて吾われは本丸ほんまるに引退ひきひれといふ、内田うちだ開ひらきあへ
 ず、昔熊谷むかしくまがやが子の直家なほいえうす手てならば討死うちじせよ、痛手いたてならば自害じがいせよといひし事弓矢取ゆみやとる身
 の詞ことばなり、爰こゝを逃にげんとは口惜くちやくき事ことよ、大剛たいたうの伊豆いづが弟あにに汝なが如ごとき人の有ありけるこそ怪あやしけ
 れと罵ののりけり、内田うちだは銀ぎんの馬櫛うまぐしを兜かぶとの立物たちものにしけるに、銀ぎんの馬櫛うまぐしよとほめけるほどの物師ものし
 なり、敵今村掃部かきいまむらが持口もちぐちを破やぶりて亂みだれ入いりしかば、伊豆いづふり返り見て三さんの丸まるはとられしとて
 引返ひきかへす、人々ひとびと敵既かきに攻入りて入るべき方かたなし、京洲きやうすの丸まるより入らばやといへども伊豆いづ少すこも
 ひるまず、初出はじめてたる所ところより入りなんこそゆゝしかるべけれどて、鎗やりを提さげて敵かきに向むかふ、伊豆いづ
 に従したがふ者四十五人、下部しもべは皆逃散みなにげちりて伊豆いづが若黨わかしやう一人平野藤兵衛ひらのふじやうと云ふ足輕あしひら一人残り留とどめり
 伊豆いづむら立たたる敵かきを物ものともせず、卿手くわて十文字じゅうもんじに追立おして、さんくゝに戰たたかひけるに、敵尙かき烈はげし
 く進すすみ來りしかば、尾關おせき甚右衛門しんえもん銚子てうし五郎兵衛ごらうべゑ二人土橋どしはしの上うへにて返し合せ、大音おほねあげて存ぞん
 る子細こさいありて討死うちじするよ、寄手よせて首くびをどれとて面おもてもふらず切死きりじをぞしたりける、其そのひまに赤あか
 尾おそこをつと行過ゆりかて城際しろぎはに至る、門かどの外うへの柵しほに簀戸すし有り赤尾あかお簀戸すしをべめよといへば、平野ひらの
 靜しずに簀戸すしをべめたり、門かどを開ひらけよといひしかば、少齋せうさい法師はうし武者むしやにて門かどを固かためて有りしが矢
 倉くらに上り、味方みかたとは知りたれど敵村かきむら入りすべし、人は輕かろく城しろは重おもし、爰こゝこそ死しすべき處
 なれ、はなやかに討死うちじせられよ、是こゝより見物みぶつせんといふ、赤尾あかお石いしによりかゝりて息いきをつき

九尺斗なる鎗を下に置き、脚半のひもを結び直す、敵竈戸を破りて押寄る處を、八十餘人の兵ども爰を限りと面もふらず突かゝる、赤尾しづかに緒を以て終りてつと立上り、赤尾伊豆とは知らずやと名乗て亂れ入る敵を念なく突退け追出す、少齋矢倉より鐵砲を嚴しく打出させければ、立花の勢も餘りに手いたう防れて引退く、かくて少齋跪て鎗の穂先を門のくゞり戸に當て、一人づゝ靜に入りてけり、かくするは無禮に候へども、門を守る法なりといふ皆入終りて伊豆と平野と二人門外に躓して残りけるが、平野は赤尾にまづ入れよといふ、赤尾は平野に汝先入れよとて終に赤尾おくれ入りけるといへり。

赤尾伊豆は美作が子なり、信長に滅れて

信長江州小谷の城を攻め、淺井長政勢盡て既に自害せんとする時、不破河内を以て縁者のよしみ降參あらば疎意あらじと云はせらるゝに、長政降參すべき志に非るを、近習の士どもよも別の子細も候まじ、城を出て運を開かれ候へといふ、さらば父下野守も共に疎意なくば降參せんとて城を出るを、信長見て長政何の面目有て今更の降參ぞと高聲に呼はらせられしかば、長政怒て赤尾美作が宅に入りて自殺せり、淺井石見赤尾美作いざ切死せんとてかけ入りけるを、多兵押隔て生取りて信長の前に出す、信長汝等長政をすゝめ朝倉にくみして吾を敵となすなれる果を見よと罵らるゝに、淺井居直り事新しき事を承候もの哉

義景を別事なく立置んどの誓文、其血もいまだかわかざるに越前に軍を出し、是によりて長政義の當る處にて義景に與したり、今日城を出る疎意あらじといつはりたる詞を押しかり、只自害と一すぢに決したりしに、若天運によりて家を立るならば、信長を斯のごとくからめんと思ひしに、かく成たり、義を知らず恥を知らざるは信長こそ、人面獸心なれといへば、信長彌怒て、汝詞にも似ず、生とられたるはいかにと罵らるゝに、年老ぬれば力に及ばず、昔より士の生捕となる事恥にあらず、武勇を以て敵を討得ず、いつはりたばかりて人の國を亡すこそ恥なれ、見られよ必下人に首を切らるべしと罵り返せば、信長杖を以て打れしに、石見打笑ひ、からめたる者にかゝるはからひ、あつばれよき大將の禮儀かな、いかほどもうてや犬坊と罵りけるが、石見も美作も終に殺されけり。

伊豆幼かりしが僧と成て多賀に匿れ居しに、十二歳の時多賀明神の鳥居のはどりにて遊びける處を、いづれの家の上に十二人打連て通りしに、行わたる士怒て小僧め無禮なりとて拳にて頭をうつ、伊豆飛かゝり其士の刀を抽て只一打に切はなし、つと走りぬけて赤尾にかくれ居たりしが後京極に仕へけり。

十時傳右衛門山田三右衛門死骸返しの事

立花宗茂使を城中にて、けふ味方計死の中に十時傳右衛門と申者あり、とりわきて不便に存るなり、骸を返し給はり候へど物具の色を書て云ひ送られしかば、やがて返しぬ、又城中よりも山田三右衛門が首を返し給はれど望れしかば、胃を添て送られけり、此を大津の死骸返しとて勇士死後のほまれとしたり。

高次大津の城を出られし事

高次大津の城を守りて固かりければ、高野の木食上人を以て和平を執行ふ、高次さらに同心なかりしにさしもの長臣黒田伊豫、寄手に心を通じければ力なく和平して城を出で、京都大佛の養源院に立寄り、それより高野に赴く。關ヶ原記に三井寺に立に、今度諸將皆大功有りし人々なるに吾城一ツ守りどげざりし身の立まじらん事口惜しどて出られず、又使を以て御物語ありたき事あり、倘出られずは我行かん年老たる身を勞せられんよりは若役にと仰出されしかば、高次辭しがたくて出られけり、東照宮此度城を攻ける敵兵大垣に到る程なれば、關ヶ原の軍危かるべきに九州の大軍を數日隔られしゆゑ、わが軍の援となりし事、大津城中の軍兵残りなく關ヶ原に來りしよりも遙にまされり、敵より乞たる和平なれば耻にわらずと仰せらる。大津にての事なれば近江にて四十萬石賜ふべしとなりしに、高次聞て

かく賞せさせ給は、關ヶ原にて大功の人には百萬石を賜はるべきか、おもひもよらずと固辭申されけり。

一説關ヶ原の軍敗れて、東照宮大津の城に入らせ給ふ、山岡道阿彌供奉しけるが、京極幸相よく持こたへ候に、今少の事にて本意を遂すと申ければ、御答な、奥平が長篠にて武田を防ぎしに戸障子に鐵砲の玉のあと鹿の子をゆひたるが如く、土も落ち板もぬけたるをむしるをはり壘を立て持こたへたりとぞ仰せける、又高次の使者多賀孫右衛門大阪に來りけるに、御前に召して京口の旗を早くしぼりし故、敵攻入りたると聞召すよし仰せ有りしかば、口惜く存候よしひて涙を流しけり、さて井伊本多に向ひ、下部の申木履に雪のつきたる如くなる御出馬にやふれ、あんのの如き城に高次なればこそ數日敵をば支へ候へといひければ、戯れながら理なりとぞ答へられしといへり。

立花家足輕鐵砲の用意

附細川家口薬入吉田大藏猿頭の事

立花宗茂大津の城攻に足輕に繩だすさかけさせ、其繩目に玉薬の早合をはさませて、箭をつがふよりも早く鐵砲を擲せられけり。

又細川家の鐵炮は口藥入を革にて、今世のはながみ俗の如く造りて用ふ、事の急なる時指にてひねり入れて利あり、又加賀の吉田大藏とて世に聞えし手だれの射手あり、常に矢を取りて俄に出る時、十筋も持たき事のあるに腰にさせば走るに落るとて革にて角袋造りて緒を付け腰にさげ、それに入れて腰にさしけり其名を猿頭と名付けたり。

伏見落城の事

附鳥居忠政雜賀孫市を饗れし事

會津に向はせ給ふ時、伏見の城には本丸に鳥居彦右衛門元忠、二の丸には松平主殿頭家忠松平五左衛門、松の丸には内藤彌次右衛門家長をおかせ給ひ、六月十六日東照宮打立給ひ、十七日伏見の城にて鳥居を召し、今度士卒少くして残り止る事を仰せ有りしに、元忠臣が存る所會津は強敵なり、一人なり共召具せられて然るべし、伏見には臣一人にて事足候、世上無事ならずして變の出來ん時は、近國に援ふべき味方も候はず、今の十倍の軍兵を殘し置れたりとも防ぐべきやうは候はずと申けるに、東照宮黙しておはせしが、やゝ有りて駿州宮ヶ崎にて十一に成りし時、彦右衛門は十三にて初て出たりしよ、年久しくもなりぬとて御物語に夜いたく深ければ、元忠會津の御留守世に變なく候ひなんには復御目見も仕りなん、もし事あらば今夜ぞ

永き御別れに候と申て座を立兼たりしに、東照宮御袖をもて落る泪をおそひてぞおはしましける、かくて石田兵を起せしかば伏見を攻べきやと評定しけるに、増田長盛城固うしてしかも内府の内に名高きものどもあれば、たやすく落べからず、先はかりて見んとて山川半平を使にけり、元忠對面すれば増田が申候には、今度輝元秀家景勝徳川殿と弓箭をとり、九州中國の諸大名皆同心せられ候、かゝれば此城を請取申すべし、長盛久しく徳川殿の御したしみ深く候へば、此事然るべしとは存候はねども、思慮の及ぶべきにあらず、伏見の城は大閑きづかれ候へ今徳川殿姑くあづかりておはしませば、徳川殿の城と申べきにあらず、とく城を出て内府に忠を致さるゝ道あらんと存るよし言送りければ、元忠聞て過し頃、内府會津に向ひし時かたく守り候へと申て候に、敵に渡し候事は存じもよらず、増田殿は内府にしたしみ有るゆゑ、かゝる事を述べらるゝ旨心得られず候、若おめくくと城を渡さんと同じくは城を枕にせよとの使たまはり候は、忝しども申べし、とく城を出よとは武將の詞にはあるべき事ども存せず、とく寄せられよ討死せんと答へしをかへりて長盛に告ぐる、かたへに渡邊勘兵衛有りしがつくづく聞て感じ入りて頻に涙を流しければ、長盛も我もをしき人を殺さん事のなげかしきとて共に涙を流しけるとぞ、かくて三萬餘りの寄手四方より攻めけるに少しもひるまず、十日餘防ぎるけるに甲賀の者内通して七月晦日の夜、松の丸に火をかけしかば、寄手力を得て攻入りたり、内藤は

精兵の手さゝにてさし詰引詰射ける矢に死人數をしらす、終に内藤父子も討死し主殿頭五左衛門を始として殘なく切死にぞしたりける、元忠本丸に有りて門を開かせ、門際より六七間しさりて、士卒三百餘白刃を拔るるへ、しづまりかへりて待かけたり、寄手しばし攻入り兼てためらひけるに、元忠大音あげ、一人にても敵を討て死するぞ士の志なれ、吾三方ヶ原にて足に手負ひ行歩心にまかせざれども、逃んどせばこそ足をも頼まめ、いざ最後の軍せよと下知する聲を聞て、一同に切て出で面もふらず戦ひて、一人も殘らず討死しけり、元忠戦ひ疲れて玄關に腰をかけ、息づく處に雜賀孫市重次死骸を踏越てす、みよれば、吾は鳥居彦右衛門よ、首取て高名にせよとて、物具脱で腹を切りたりしかば、雜賀其首を取たりけり、本丸に二ツの門有けるを、大手の外はみな堅く鎖してければ、一人も逃ちる者なく討死しけるとぞ、後元忠の首を大坂京橋に梟せしを、京の商佐野四郎右衛門と云ふもの鳥居にしたしみ給ひしが、かゝる忠義の人の首を惡逆の罪人と同じくさらす事やあるとて、夜深て盗取り智恩院に葬りて一字を建て龍見院と名付けしかば、石田聞ば必定刑罰すべし、せんなき事なりと云ける者あり、佐野吾久しく恩を受し身なれば、白刃をふむまでこそなからめ、是程の事は人の義なり、義なきは禽獸なり、人生て死せざる事なし、刑罰にあはん事ちつともをしからずとぞいひける。

雜賀孫市後水戸中納言家に仕へたりしが、ある時中だちを以て鳥居忠政のもとに云送りけ

るは、重次ひかし伏見の城にて、元忠の御最期に乗りあひ、其時の御物具吾家に取傳へ候ひぬ、先考の御形見にて候、御覽せん爲返し參らせ度こそ候へといふ、忠政悦んでなき父が形見是に過べからず、一目見ばやと答ふ、重次自ら携てゆき向ふ、忠政門外に出迎へ重次を奥の間に招じ、亡父に再對面の心地すどて涙を流し、甲冑太刀刀おし板の上にかき居て是を拜し、さて今日重次を襲せし有様誠に美盡せり、其翌日重次の方に使を立て、昨日の見參を謝す、又重次の御志によりて父が最後に帶せし物具再び見候事、返すべくも悦入存候ひぬ、忠政が家に傳へし父が形見に見るべき物もすくなからず、見苦しうは候へども此物具重次の家にとめて御武名を子孫に傳へられん事、弓箭の道にはよき御遺戒にもや候べきとて、甲冑太刀かたなごとく返し遣はす、それより年毎に冬綿厚く入れたる衣正領者にもたせてはるくど水戸に贈り遣はし音信を通ずる事、忠政が一期のはと終におこたらず、水戸公此由聞し召し大に感じ給ひ、鳥居が使者の來るべき前、道梁を修理せさせ、重次に客備すべき魚鳥やうの物賜ひけるとぞ。

村上三右衛門大島源二武者振の事

筑前中納言秀詮先陣の士大將平岡石見松野主馬各祿一萬石なり、伏見の城攻めに主馬が仕寄

の竹把を城中より火箭を射かけ焼たりしかば、其所を退きて竹把を付けんといへども村上三右衛門聞入れず、燒跡に竹把を付すしてはあるべからずとて主馬と相謀て竹把を付直し、竹把の上にかべ土をぬるべき用意しけり、主馬外に出る事を嫌ふ、人々は士たりとも内にて土をこねられよ、又土をぬりたらん者には中間下人なりとも士とせんと下知しければ、下部八人出て土をぬりたりしかば、其後竹把を焼ざりしとなり。旗本より大島源二といふ者使に來り、仕寄場より堀端まで間數幾許かあると問ふに、村上間を打ては見候はず、凡十二間許もやあらんと答ふ大島とてももの事に間を打んといへば、城近く箭玉の飛來る所に強みを出して何の爲ぞといふ、源二殿に問れて間をうたすといはれんは快からずといひしかば、村上旗本の使に先陣の間をうたする事は有るまじとて、村上靜に出て竹を間竿に切り一間づゝうつ、源二先へ廻りしづかに一ツ二ツとさし終れば十一間半也、大島村上進退のふるまひ見物なりしと云ひあへりしに、源二は廿二歳伏見落城の日討死しけるとぞ。

三刀屋監物田邊城に籠る事

三刀谷監物孝和は其先祖承久の亂に軍功有りて出雲の三刀谷の郷を賜はりけるによりて氏としたり、其末雲州尼子の旗下に屬しけり、孝和が父彈正左衛門久扶毛利家に奉公しけるが後仕を

止て終りぬ、孝和は吉田兼治にたよりて吉田に居たりしを、關ヶ原の時安國寺北村五郎右衛門を使にしてまねきけれども聞入れず、細川幽齋の丹後田邊の城に行きて力を合せんとす、從也ども奥州は大國なり、景勝勇將なり、いかでたやすく破るべき、西國一同に石田に與し候ひぬ、徳川家の危き事近きに候に何とて安國寺が招をいなみ給ふぞと云ひけるに、孝和聞て石田島津に叛かせ、内府を引付け軍を起させ、あどにて京大坂を取しめん謀、こそ然るべけれ、徳川家の領國其便よき會津に手始をしたるは無謀なり、三成必定勝べからずとて、吉田家は幽齋と縁者たりしかば田邊に行く、大敵にかこまれしかども持こたへしは偏に孝和が智勇たくましかりける故なり。

田邊城勅命に依て和平の事

附細川幽齋古今集傳授の事

大坂の軍兵一萬七千を以て田邊の城を破る、細川忠興は奥州に赴き、父幽齋城に有り三刀谷孝和大剛の人にて度々切て出て防ぎ戦ふ、幽齋和歌に長じたる人なり、古今集の秘訣爲家卿のしるされしを殊に秘藏せられしが、兵火の爲に焚ん事を桂光院知仁親王慮らせ給ひ、使を以てかの古今集源氏物語を禁裏にまゐらせよとなり、又鳥丸大納言光宣卿勅命を奉りて城に赴き

給ふともいへり、則其書を奉るとて、

いにしへも今もかはらぬ世の中にこゝろのたねを残す言の葉
又鳥丸光廣卿のもとへ封じたる歌書をやるとて、

もしは草かきあつめたる後とめてむかしにかへせ和歌の浦浪

斯る處に前田徳善院を禁裏に召し田邊の城攻和平の事を勅命ありければ、寄手かこみを解て幽齋城を出られけり、光廣卿幽齋の許より送られし書いまだ封をひらき給はざりけるが、かへしあけて見ぬかひもありけり玉手箱ふた、ひ返す浦島の波幽齋かへしに、

浦島やひかりをそへて玉手箱あけてたに見すかへす波哉

一説藤原公國卿早世ありて、其子實條卿幼かりしかば、和歌の口傳を幽齋に傳へられけり、後に幽齋實條卿を田邊の城に迎へとりて養育し、悉授けられしに、古今集の説は未傳へられざる中に朝鮮征伐の起りしかば、弓矢取る身は討死のはどばかりがたしとて、古今傳授の事書たる書の箱を鳥丸大納言光廣卿へ贈られ、預けまゐらす間朝鮮に渡り若討死せば實條卿へ渡し給はり候へとて添へられし歌、人の國ひくや八島も治りてふた、ひかへせ和歌の浦浪

もしは草かき集めたる跡とめてむかしにかへせ和歌の浦波
光廣卿のかへしに、

萬代をちかひし龜の鏡しれいかてかあけんうら島かはこ
其後秀吉遺言して、豊後臼杵を幽齋の男、忠興にかへわたへられしかば、光廣卿より宮をかへすとて、

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふた、ひかへる浦島の波
幽齋田邊の城を守られし時、勅命により三條大納言實條卿へ附し傳へられしに、一首の歌あり。

いにしへも今もかはらぬ世の中にこゝろのたねを残すとのほ

古田助左衛門思慮の事

古田助左衛門は古田兵部少輔重勝に仕へて祿千石を受く、景勝を征伐の時、重勝伊勢の松坂の城に助左衛門を置かれけり、三成兵を起せし時、大坂の重勝の屋敷をどりかこみ、松坂の城を渡さずば重勝の北の方を殺害すべしといひ送りしに、助左衛門此城は殿の仰なくて人に渡さん事存じもよらず、若さあらずは北の方害にあひ給はんとや、誠にいたまじき事なれどもいかに

せん、妻子の死するが悲しきとて城を敵に渡せしと殿を人譏り申べし、運盡きたらば死を潔くする事弓矢とる身の習ひなり、人々は太坂の屋敷にていかにも成り候へ、敵やがて城に寄來らば散々に軍して討死し、冥途にて對面せんと太坂の屋敷に云ひ送りけり、かゝる處に重勝も東國より歸り來り、松坂にたて籠る、此時富田信濃守信高阿濃津を守られしが加勢を重勝に乞ふ兵を分ちやるべき体のなかりければ、助左衛門阿濃津へ加勢あらん事尤望む所なり、敵阿濃津を攻めて其後爰に攻め來らん、若阿濃津落ざる前に東方の味方來らば敵敗北せん、其時は古田が士は敵の旗をだに見ず、富田が力にて松坂を持ちたりなど人に笑はれ候べし、又加勢あらば隣國相援ふの義に叶ひ、又阿濃津にて敵を防ぎしは古田が加勢の故なりと世に申すべしと勸めて五百人の軍兵を阿濃津にやりけり、やがて重勝の領地の百姓の中に大家なる者二十人を士として城にこもらせ、後に百石の地をわたふべしと約しけり、是人質の心にて百姓をさわがせじとの術なり、關ヶ原の亂治りて後、重勝約に背んとせられしかば、助左衛門信を失ふは君の道にあらず候、かゝる言葉は金石よりも堅くすべき事なり、是より後又欺んとて百姓ども何事も聞き入候はじ、信なくば立たずと申事の候、臣が祿地を分ちわたふべしといひければ、重勝約の如くせられけり。

伊勢國阿濃津城軍の事附佐治縫殿が事

毛利秀元吉川廣家富田信高の阿濃津の城を攻る時、城兵城の乾の隅に有ける伽藍を燒拂ふ所に、俄に風かはりて焰を城に吹かくる、寄手是に乗じていざ打破んとて、突戸備前守隆家先がけしで攻入けるを、分部左京亮政壽城中に加勢有りしが切て出で突戸と戦ひ互に痛手負たり、信高本丸の大手にすゝみ出で鎧を合せて相戦ふ、かゝる處に容貌美しき武者緋おどしの物具中二段黒革にておどしたるを着、鎧を提來り富田が矢面に立ふさがり支へ戦ひたり、秀元の兵中川清左衛門へり、かくて富田門に入れる時、かの武者を見れば殿は恙なくわたらせ給ふが、討死と聞て形は女なりとも男におどるべきやとて出候ひしにといふを聞けば信高の北の方なり、信高の北の方の女高驚きて且悦び打進て城に入り、今日の有様たぐひまれなりと云ひあへり、其後高野の木食上人和平を取計ひ、信高城を出けるに程なく、東照宮伊豫の宇和島にて十萬石下し賜はりけり、佐治縫殿は近江甲賀郡伊佐野村の人にて父を左京といふ、秀吉の爲に城を落され流落して、縫殿九つの歳富田信高に仕へ、十四にて四百石わたへられけり、津の城に籠る時十六歳名を善大夫と云ひけり、八月廿四日京口清嵐寺の三の丸を燒拂ひ敵攻入りけるを防ぎ戦ひて、信高本丸に引取りたれども分部左京亮もいまだ來らず、家老物主も來らざれば信高天守に上り

自害せんとて物具を脱ぎ、佐治に汝介錯せよと下知せられしをおし留たる處に、分部富田五郎右衛門同主殿上田吉之允も二の丸に引退く体見えければ、信高上帯しめ直し、佐治を天守より使にやられけり、大手の門矢倉廣間の前屏重門の左にて毛利秀元の士黨はるかけたると其外五六人と、上田吉之允鎗にて渡り合ひ居たる處に行懸り詞をかけて敵を追たつる、はろかけたる敵大手の門くゞりへ引退くを追つめ、兩人にて討取りたるを信高天守より見られけり、後城にこもられし時着られし甲冑と白河原毛なる馬に小鞍といへる作の鞍籠を添て佐治に與へらる、其わけの年佐治富田の家を出て筑前中納言秀詮に仕へ、其家滅びて黒田の家に仕へしを富田禁錮せられしが、大坂陣に後藤にまねかれて士三十騎の將となり、五月六日道明寺の軍に寄手の物色を見んとて谷川すぢに出る處に、東より來る物見武者に行逢ひ、即討取りて冑首を得たり、是後藤が手の一番首なり、後藤が旗本敗北し、敵におし隔てられ丸山に北げ、細隙にて返し合せ、敵一人討取り冑に刀を添へ分捕しけれども冑をも棄てけり、敵慕ひ來りければ大坂へ引取り、事叶ふまじ討死せんとてかけ出せしを、伴野次左衛門佐竹安大夫本多小右衛門もつゞきて鎗を合せんとするに、深田にて敵かゝり兼たり、伴野いざ是までよとて佐治をどらへて引返し、道明寺と平野の間にて眞田に行あひて遁れ得たり、其後流落し仕へを求め、貧しくして江戸柳原の町家のうら少ばかりの所をかりて妻と二人ありける

が京都に赴く、妻殊におはれなる体なりしを近隣の者ども心を付ていたはり、口を送りしにいかなる事にて京にゆかれしぞと問ふ、池田の御家新太郎少將の祿千石賜らんと事なれども二千石ならば奉公すべしとて、其ために京へ行たりと答るを聞て、千石ばくと異名してあざけりにしが、程なく從者十人ばかり引具し、馬に乗てきらびやかなる士來て吾は佐治なりとて妻を迎へ、近隣の者にそれゝに土産し、妻を心付たる禮を述て池田の家に仕ふとて去りけり。

長東大藏大輔降參の事

關ヶ原の軍敗れしかば、長東大藏大輔正家江州水口の城に引こもりしを、國清公船戸帶刀を使として降參を勸めらる、船戸是は物なれたる人然るべしと辭し申けれども、汝どく行向へよと仰られしかば、船戸方三四寸計の小さ鐵の板を造らせ、ふどころに入れて水口に行き、長東に逢ひ降參あらば士卒も別の事候まじ、此旨よく申せと申なりといふに、長東阿濃津の城攻して關ヶ原にさせる軍もせで口惜く候、さらば此城を枕にせんと手の者ども存る處なり、然るに降參せんは恥辱にて候といへば、船戸長東がかたへの士を呼て懐より鐵の板取出し焼て給はり候へ、三左衛門尉が詞今かく申所偽なき印に鐵火をとりて見せ申さんどて思ひ切たる体、げにも

いつはりならざりしかば長東威じて、たとへ誑られていかにならんも力なし、汝がしわざたく
 ひなきによりて降参せんするにて候、是は見苦しき物に候へどもまゐらすとて貞宗の脇指をあた
 へけり、船戸向座を立ざりしかば長東小性をよんで覗取出し、降参すべきよし書て船戸にあた
 へしかば船戸歸りぬ、長東城を出ければ警固の兵を入れられけり。

渡邊才兵衛武功の事

佐和山の城をかこむ時、堀尾信濃守通晴渡邊喜兵衛を呼で凡城を攻るに敵の虚實土地の要害具
 に知らずは叶ふまじ、いかにもして生捕をせばや、汝事よくせんやと言はれければ渡邊首を取
 るだに易からず候、まして生捕せん事叶ひがたしと申しもはてぬに、渡邊が弟才兵衛進み出で
 殿の仰に何とてさはの給ひ候ぞ、喜兵衛年老たり軍令を司るには然るべし、かゝる力業は才兵
 衛に仰付らしよといへば、喜兵衛思慮なき事な申ぞ無禮なりといへば、通晴大志壯力人の及び
 がたき事をもなし得べき眼ざしよと才兵衛を稱せられしかば才兵衛座を立ちけり、兄の詞は禮
 義なり汝が詞は血氣なりと人々戒めけれども、吾思ふ仔細あればこそとて夜の更るを待て従者
 一人打連れ、ひそかに城際にしのびゆく、茂りたる桑の木の下にさゝやく者あり、近くなりて
 それのがさしと二人鎗をとりてかゝるを才兵衛一人は突伏せ一人は追ちらし、首を従者にもた

せ城に忍入て生て歸る事萬に一ツなり、此有様を兄に語れと云ひて堀に添て行所に夜廻りする
 とおぼしくて打過る、其跡についてゆけばふり顧みて名乗れとて弓に箭をつがふ、才兵衛小聲
 に敵の忍び後より來るぞ、爰に待て打んといひつゝ、あゆみより一丈計になりける時、鎗を取の
 べて敵の弓弦を突切て其儘鎗を取直し、諸膝ついて打伏せ上に乗かゝり、汝よく聞けよ、吾殺
 さんどにはあらずしかくの仔細有りて忍び來りしに、行ひたるは天のたすけなり、汝死ん
 どならば吾汝を刺殺して自害せん、それは益なし、吾に隨ひ來れよといふ、彼士怒て既に斯成
 し上は命生んと思はんやとて疾刺殺されよと云ふ、才兵衛聞て二人空しく死んより生て功あら
 んこそよけれ、軍神も照覽あれ吾偽なきよといへば、さらばいかにもせよと云ふ、才兵衛悦
 んで引起し、物具に付たる塵を打拂ひければ、彼士あはれ汝は大剛の人にて、しかも辯舌明か
 なり、からめられぬれと恥とは思はず、名は松田大介と云ふものなりといへば、才兵衛松田を
 先にたて、始首を取りたる所に行けば従者喜兵衛殿も追つゝいて出給ふが歸られずといふ、才
 兵衛いかにし給へるにや松田は逃ぐべき人にあらねども汝付そひ居よと云ひて城の方にゆく所
 に、喜兵衛歸りたるに逢ひ生捕をしてこそ候へと云ふ、城門は固く閉たり、兄弟打つれ歸りて
 かくと申す通晴ゆゑしき事をもしたるよとて一同にぞよみあへり、生捕はいかにせんと申を、
 東照宮心に任せよと仰せあり、才兵衛松田に申せし詞しかくなり、松田に腹さらせられなば

臣先死罪になり候べしといへば、勇有り又なさけ有りとして松田もゆるされけり。

石田三成生捕らるゝ事

田中兵部大輔吉政石田を生捕にせられしが、いと懇に會釋して數十萬の軍兵をひきゐられし事、智謀のゆゆしき事と申すべし、軍の勝敗は天の命に候へば力に及びがたしと、禮義正しかりければ三成打わらひ。

三成此時坐上の楹によりかゝり、もとより田兵と呼しが如く、此時も田兵と云ひて常に替らざりしとなり。

秀頼公の御爲に害を除き太閤の恩に報い奉らんと思ひしに、運盡き、かくなりし事何をか悔むべき、是は太閤より賜はりし切刀正宗の脇ざしなり、かたみにまゐらすよとて與へけり。

馳走の士を付てもてなしたれども、片時も早く死んとて食せず、馳走の士いかで兵部がはからひに及ぶべき、よくいたはりて最後の御用意候へかといひければ、さらば此頃腹中のあしきに糞雜水をたまへと云ひしかば、其設してすゝめければ快く食して打伏して厭かきたり。

田中石田を引具して大津に参りければ、東照宮本多正純に石田を守護すべきよし仰出されけり。

正純石田に向ひて秀頼公年若く事の是非をしらしめさじ、唯太平を致す道こそ有るべきに、よしなき軍おこしてかく恥辱にも及れしぞかすと云ひしに、三成吾土民より國を賜ひたる恩たどへんやうなし、世のさまを見るに徳川殿を打亡さすは終に豊臣家のためによからじと思ひて秀家景勝を始として同心なかりしをしひて勸めて遂に此軍をば起したりき、戦ひに臨んで二心ある輩裏切せし故、勝べき軍に打まけぬこそ口惜しけれ、二心ある人だになくば汝たちを始め、かくの如くからめなんに志を失ひたるよ、運盡ぬれば九郎判官も衣川にて空しくなりたりき、吾打まけしは天命なりといふ、正純智將は人情を計り時勢を知るところこそ申せ、諸將の同心せざるも知らず、かるくしうも軍を起されしかな、軍敗れて自害もせでからめられしはいかにといふに、三成忿て汝は武畧は露も知ざりき、腹切て人手にかゝらじとするは葉武者の事よ頼朝公土肥の杉山にて朽木の洞に身をひそめし心はよも知らじ、大庭にからめられなば汝に嘲らるべし、大將の道はかたるとも汝が耳には入らじ、今は是までなりとて物もいはず。

東照宮の御前へ三成を召出して、いかに武將もかゝる事むかしより有るためしなり、恥にあらざと仰られしかば、三成けしき打とけて唯天運のしからしむる處にて候、どうく首をはねられ候へと申す、東照宮三成はさすがに大將の器量なりけるよ、平宗盛には大に異なりと仰せ有りけるともいへり。又一説中納言秀詮石田が体を見ばやとて座を立れしに

細川忠興何でふ益なき事なりといへども聞入れず、三成秀詮を見てわれ汝が二心あるを知ざりしは愚なり、されども約にたがひ義をすて、人を欺き、裏切したるは武將の恥辱末の世までも語り傳へて笑ふべしと云ひけるに秀詮詞なかりけり。又三成大津にいたる時御本陣の門外に疊をしき其上に坐したりしに、諸將打過ぎけるが福島正則無益の亂を起して其有様なりといはれしに、石田おのれを生どりて縛らざりしは天運なりと云ひければ、正則詞なく過ぎられぬ、黒田長政通られしに馬より下りて不幸にてかくなり給ひぬ、是をどて着られし羽折をぬいで着せられたりといへり。

石田を始め小西安國寺生ぞられ、三人の肌木綿のやぶれたるものを着たるを東照宮聞し召し、石田は日本の政務を取りたる者なり、小西も宇土の城主なり、安國寺またいやしむべき者にあらず、軍敗れて身の置處なき姿となるも大將の盛衰は古今に珍しからず、命をみだりに棄ざるは將の心とする所和漢其ためし多し、更に恥辱にあらず、其ま、京中をわたしなば將たる者に恥をあたふる事吾恥なるべしと仰せ有りて、三人に小袖を賜りけり、石田に見すればこれはたがあたへたるぞと問ふ、江戸の上様よりといへば、それは誰事ぞといふ、徳川殿と答ふれば、三成何徳川殿を尊ぶべきとて一言の禮に及ばず、あざ笑ひて居たりけり。

小西は敵對の吾にこれまでのいたはり心に恥たりとて涙を落しけり、安國寺はとかくいは

で赤面し俯き居たりけるとぞ、三成を誅する時車に載て六條河原に出すに、石田顔色平生の如くなりしとかや、又石田治部が天下を取りたると云ひけるを聞て打笑ひ、われ大軍を率ひ天下わけ目の軍しけることは天地やぶれざる間はかくれあらじ、ちつとも心にはづる事なきよ、はやさずしてもありなんといひけるとぞ。

小幡助六郎忠死の事

小幡助六郎信世は上介野信繁が三男にて上野の人なり、十五歳にて大坂に赴き諸家の体を見るに、石田は太閤無二の寵臣なれば仕へけり、後祿二千石をあたへけり、關ヶ原にて三成敗北の時おし隔られ三成に従はず、そこを切ぬけて三成が行方を尋ね、江州石山に來りしを郷民からめどりて大津に參る、百姓をば賞せられて金二十枚を賜はりぬ、さて信世を召出させ石田が行へをどはせ給ふ、信世承り三成が士小幡助六と申者にて候、主の在所よく知て候、然れども年頃恩を請たる身の今日の難をのがれん爲に主の在所を申す不義や候、たどへ骨をひしがるともかたく申すまじきにて候、試に拷問あれと申切りてけり、東照宮聞し召し忠義の士なり、三成が行方ゆめく知りたるにあらず、しらざる故にこそ落行てからめられたれ、彼はどの者を拷問に及ぶべからず、將たる人は忠臣義士に不憫をこそ加へめどく繩をどけど仰せ有りて則赦

させ給ひけり、信世近きあたりの寺に行き其由こまへと語り、おもはざる外に救を蒙りたれども亦恥にあはんも計りがたし、屍をかくし給はれとて自害しけるを、大津に申上げれば殊の外にをしませ給ひけり。

河村權七郎が事

關ヶ原の亂の時加藤嘉明の北の方大坂に有りしかば、河村權七郎を伊豫の松前より大坂にやりける、忍びて屋敷に至り北の方に相見え、松前より長臣等がかはりとて参り候、若奪ひ取らんとせんども臣かくてあらんはどは、危くな思し召され候ひぞとて、屋敷の隅に井樓をわけ柵の木ゆひ敵にむかへるが如し、かなはぬ時は自害をす、め臣も御供申すべしと云ひけるに、細川忠興の北の方自害の後人質を奪ひ取事止みたりけり、河村に二百石の祿を増與へられしに、後河村いひけるは大坂川口の守り固く中々通るべき様なきを、尼ヶ崎の漁夫をかたらひ船に乗綱の中に身をひそめ、敵の中に入りて守りしは必死を思ひ定めたる事なり、關ヶ原の軍に首取たる者と同じからず、然るに恩賞の薄き事明らかならぬ殿なりとて出奔しければ、嘉明忿て探出して誅せばやと言はれしかばある山中にかくれ居たり、大坂の亂起りし時、嘉明江戸に残しといめられ不慮の事あらば取まきて攻殺んといひあへり、其比夜更て河村嘉明の屋敷の門をた

いき、青木佐右衛門を呼出す、青木あやしみ立出て見るに河村なり、こはそもいかなる事ぞといふ、河村事あたらしきやうなれども君に仕ふる者の忠を致すは常の習ひなり、然るに過にし大坂の事にはこりて殿を嘲りて出奔しける事、後悔今さら益なし、十餘年山中にかくれ居しに、しかへくの事にて殿も危くおはしますと聞て、夜を日に繼て参りたりといへば、青木誠に義理の志はさる事なれども、殿のいかり甚しければかくと申たりともゆるされじ、とく歸られよといへば、河村臣たる者の義を知られなば河村はなぞ來らざるやといはるべきに、門内にだに入れずとく歸れとは口をしの詞よ、此上は町屋にかくれ居て殿の先途を見んと云ひしかば、青木さらば先申て見んとて内に入り嘉明に告ぐれば、それよび入れよとてやがて寢所に召出されしが、一目見るより涙を流されしに河村も涙にむせび、君臣しばし詞もなかりしが、河村おもひもよらず殿の御前に入る事よ、今生の思ひ出に候と申す、嘉明汝が志いはんやうもなしと悦ばれけり、夜明て河村こそ來れとて下部までいひはやし、大軍の援有るが如くいさみけり、嘉明寵愛して八千石あたへられけり、程なく病死しければ奥州四十萬石になられし時、河村ながらへたらんには國政の輔佐たらんにとなげかれてとかや。

加藤清正の北の方大坂を忍び出られし事

加藤清正の北の方も大坂に在りしを、石田人じちにとらばやと云ふを聞きしかば、清正より付られし竹田善兵衛家正大木土佐恒持謀を廻らし、轉法口に居ける清正の舟奉行梶原助兵衛に山梶子の煎汁を飲せ、四五夜ねふらせず疲れおとろへ大病人のごとくなりしを、かごにのせ綿帽子かぶらせ前後に衾かさね、門番の前にて戸をひらき斷て屋敷にゆく事度々に及べり、後は見なれて更に咎めず、又川口にて蜈蚣船を晩ごとこぎくらべをさせてけり、是も番船見なれて後はいづれは早きおそきなごいひて守おこたりぬ、かゝる處に清正より吾は石田に與すべきやうなし、いかにもして北の方を敵にわたさずして落せよかしと云ひ來りければ、大木たくみつる事にてはあり、北の方に此由を告て梶原が衾の下に北の方をおしかくし、其上にもたれかゝりて毎の如くかごの戸をひらき門番の前を通りけり、土佐も跡より供して若見咎められなれば北の方を刺殺し、切死すべしと思ひたれども、事故なければ轉法口に行て頓て蜈蚣船に乗せこぎ出し、番船の前をつと行過て二三町にもなりければ、おれはいかにとさわぎひしめく間に鳥の飛がごとく一里あまりもこぎのびぬ、番船もたばかられたるよとて碇をあげ追付んとせし間に行過て、遂に肥後に下り着きぬ、大木竹田は大坂に居残りて此事洩聞え、打手來らば思ふほど戦んと待懸しに關ヶ原の軍やふれしかば思はざるに難をのがれけり、大木もと佐々成政に仕へ後清正に仕へ、才器篤實兼備へしものなれば、清正寵愛厚かりしに、今度の事によりて又

二千石の祿を増しあたへられしなり。

淺井礮合戦前田丹羽の將士功名の事

附松平久兵衛軍學鍛練の事

前田利長の士松平久兵衛、若き頃より兵書を讀み一飯の間も懈らず、常に人に語て云く此一人に對するわざにあらず、萬人を一刀に斬るの道なりといへり、利長大聖寺の城を攻落し引返す時、利長の士大將山崎長門守淺井礮よりせんと云ふ。久兵衛道細く左右深田なれば大軍の進退いかい有るべき、半退きたらん時長重兵を出さば進退共になひがたかるべし、敵は案内者なり必定味方利候はじといへども山崎聞も入れず、既に大聖寺を攻落し大軍なれば敵は攻られざるをよきにして、いかでか討て出べき、若軍を出さばおしつゝみ一人もあまさず討取べしといへば、久兵衛長重は勇將なり、大聖寺の後詰におくれ口をししく思ひて打出んに其餘日比に倍せん、吾は怠り敵其虚をうたば危き事に候、又誰にもあれ吾城を馬の蹄に蹴ちらして過行く敵に箭の一筋も財懸すしてかゝまり居る者や候べき、明日の軍陣をみだされ候な、わが敵を恐れぬ證はあす人々に知らせんものと云ひけり、其夜物主皆張番を出す、山崎打巡り見て久兵衛が足輕は何故に味方近くに置たるやといふ、久兵衛聞きもあへず勝敗の理をしらず敵を侮り勇に

はこりて利害にくらみ身の士を下知する事をそなたでけれといへば、山崎聞て敵を恐れてしかしたるならんと罵りしを、かたへよりせんなきあらそひよと留めけり、久兵衛いよく憤て強敵にあたりて目を驚かさん物をと定めて居たりけり。

其夜長重は士大將を集め、江口三郎左衛門を大將として夜がけせんとなりしに、俄に大雨にて風烈しく夜討を止られしかば、江口風雨は夜討に好む所なりといへば、人々皆尤と申けるに、長重いやく御幸塚の左右沼にて人馬のかけ引心にまかせじ、明日敵引取る時追詰て思ひのまゝに討勝べしと云はれしとなり。

長重の士大將江口三郎左衛門正良惣がまへより見渡せば、敵段々に引退く時こそよけれと兵を出しおし行き、敵を喰留んと鐵炮を打かくる、長重もやがて兵をすゝめらる。

又一説長重鐵炮の音を聞後れな者どもとて馬に鎧を合せてはせ付けられしかば、江口ふり願て今に初めぬ此殿の早わざ哉と悦びけり、長重われ淺井山を取り敵の頭上より打すくめなば盾をつかする事あらじと言はれしかば、江口尤然るべしとてあとよりつゝきたる兵三百人を引具し淺井山にのぼり、敵を目の下に見下して鐵炮を打かければ、阪井與右衛門直吉も馳來る、長重いよく競ひかゝりて一足も前にすゝめ一寸も退くべからずと下知せられけり、金澤の軍をやみなき終夜の雨にかりの陣屋もあらざれば物具皆霑れどほり、鐵

炮の銃口に水入り火繩もふりけされ、左右は泥なり多くははいだて様のものをなげ入れ足たまりとせしといへり。

金澤の殿長九郎左衛門連龍が陣色めくを見て江口塵を取も、かゝれと下知すれば、松村孫三郎馬を乗出し敵の陣の中に乗切たり、荒田五兵衛つゝいて馬を入る、

松村は五ヶ所痛手負ひ馬より落ちけるを、小池新兵衛松村を馬にのせ引取らせしとなり、長父子ふみ止りて、を専途と戦ひけるが討るゝ者多し、長好連ことし十八歳手の者あまた討せ、敵の中にかけ入りて討死せんとせしを、横田久右衛門馬の口に取付き引返す、長重の軍勝に乗あまさじと追詰めたり、太田但馬は殿の陣に軍ありと聞き兵を返して馳來る、水越縫殿介山城橋において鎗を提げて敵に向ふ、松平久兵衛は太田が陣にて足輕を下知して居たりしが、銀にて飾たる冑を着、黒き物具にて馬を駆よせ來り、馬を乗はなし水越が前につと進出で、小松の士拜郷治大夫と鎗を合せしかば、水越もつゝいて安孫子作大夫と鎗を合す。

一説松平は不破奎兵衛と鎗を合すともいへり。

爰にて双方手負ひ討るゝ者多し、互に精力盡て相引にひき退いても別れせしなり、後に利長二人の前後を問はれしに、久兵衛申けるは縫殿介は初よりふみ止り候へば一番誰か争ふべきと申す、縫殿介は久兵衛敵に鎗を合せし事はやく候へば一番に候と申す、利長聞て武功は猶及ぶ

者あらん、かく譲る志萬人にもこえたりとて一番を松平に定められ、共に感状あたへられぬ。松平此時祿五百石後三萬石を賜りて伯耆といひけり。

一説松平を松原に作る、何れか是なる事をしらす。一説に此日金澤の士七人鎗を合せける中にも岩田傳左衛門、小松方の手負たるを首をとらんとせしに、松平久兵衛岩田今日はれなる鎗を合せ、其上にひろひ首何にかせんといひしかば、岩田尤なりとて同時に引取りしとなり、後に岩田が曰く、首を取て大音あげ、岩田傳左衛門鎗を合せ又首を取りたり、引取口の殿と呼はらば一芝居にて三度の功名なるべきに、松平が物し故己が下知につけて引取らせしとて後に悔みけるとなり、岩田後に内藏介と稱す。又利長淺井にて鎗合せし士に感状あたへられし由小松に聞えしかば、小松の士共殿にも御感状下し給はらんやと云ひけるを、長重淺井殿は道細く左右深泥にてかけ引自由ならず、勝敗定かならざることをわりなれども退く敵を追詰め、橋のあなたにてせり合をはじめ、橋のこなたにてもの別れせしかば、引取敵に少しながらも追返されたるに似たれば、人々武勇の働はざる事なれども、感状はあたふるに及ばずといはれけり。

山田勘六郎討死の事

利長の兵山田勘六郎は十四歳にて父の仇を討たる人なり、ある日利長築藏の戸を開くとて山田に鎗をわづけられしゆゑ、急ぎ來れと呼れしにおそかりければ忿て持たる杖にて突れしに、思はざるに額に中りて血流る、跪て平伏せしに脇差の鞘走りければ、手むかひもするやとてたゝみかけて杖にて打んとせられしを、かたへより山田を引のけたり、山田此より病と稱して引こもり居たりしに、關ヶ原の亂起りて利長大聖寺の城を攻る時、一段高き所に打上り武者おしを見物せらる、山田五六十人計引具しけふを最後と出たちておし通り、城につくと先がけして一番に乗込み、鎗にて乳の下を突きとほされ、痛手なれば堞の下におつる、かねて從者にいひふくめしかば、息絶ざる内に利長の前に昇來る、利長見て後悔せらる、事甚しく、其あやまちを懇にことわりて涙を流さる、山田やがて死けり行年廿歳、世にすぐれたる美男なりしが、大剛のはたらきして討死しけり、其前日したしき朋友に奇南香をわから贈りしを、其頃大聖寺さやらといひてもてはやしたりといへり。

黒田如水凶相の馬に乗られし事

黒田孝隆入道如水關ヶ原亂の時、九州を打平けられしに乘られし馬は二寸計の黒き馬なるが、百會に手負といふ旋毛あり、如水此馬を指さしてわれ此凶相をしらざるにあらざれども、人は

先に押出されよ、廣き所にて陣せんといへども聞入されば獨言して怒りける所に、井上主從三騎小山に乗りあげ、さし物をぬいて味方をまねき陣をすゝめけり。

井上唐冠の冑鳥毛の棒のさし物したりといへり、又佩楯を取て捨ければ、井上が手の者すはやはげしき軍よといさめるとなり。

井上野村敵は皆かちだちなり、馬のかけ場をたのひども必死の敵にかるくしくかゝりがたしとて、皆馬よりおり立つ、勝に乗たる敵にて殊に譜代重恩の士どもけふを限と思ひ定めたるなれば、敵かゝるとも相がゝりすべからず、待軍して突崩したりとも足を亂して追べからずと下知し、しづくとおしかゝる、大友が兵是を見てまばらがけせば忽突崩さんと思ひしにたがひけり、野村は朝鮮にて漢南の軍に功名し、膝に手負行歩心に任せざれば、片はものにて候はどに馬に乗候というて下知しけり、石垣原は原の中に高さ一丈餘の石垣土手六七町計もつきてけり、井上野村の石垣をこなたに取らば軍に勝べしと進みければ、敵も同く進んで石垣を踏んとせしを、つき崩したれども逃るを追はず、井上鎗を横たへ押といめ野村は馬を乗廻し兵を整へたり、大友の士大將吉弘加兵衛宗像掃部是を見て、かくては味方まけ軍なるべし、敵勝に乗て足を亂さん所を追立んと思ひしに力なし、とても討死せんと思ひ定めれば、いざかゝらんとて二千計しづくと歩みよる、井上野村是を見て少しもさわがず、折敷て相がゝりにもせ

す待懸たり、間近く詰寄せて散々に突合ひ切合ひて大友勢一町計引退きければ追もかゝらず、もとの芝居に、跪て心靜に息をつぐ、大友勢又押懸りて爰をせんぞ、火を散して戦ひけり、吉弘は尖眉刀を打ふり、けふを最後とふるまひけるを井上見て、いざ参りわはんと詞をかくれば、吉弘打笑ひ渡し合はせしが、草摺のはづれを十文字の鎧につかせて深手なれば少ししさりけるを、小栗治右衛門が從者弓を持たるが真中を射つらぬく、吉弘心猛しといへども終に叶はで首をば小栗取りてけり。

又一説に、吉弘は黒革にておどしたる甲を着、熊毛にてしころを飾たる冑にて、三尺計の刀を以て井上と馬上にて渡り合ひ、馬より突落されしが脇指を抜て手裏劍に打つ、井上が弓手の股に中る、其間に小栗引細で吉弘が首を取るといへり。又一説に、吉弘と井上は吉弘一年中津に有りてしたしみ深かりしかば、此日井上に向て珍しや一鎗奉らんとて突合しが、吉弘が胸板を二鎗まで突きければ甲かたくて裏かゝず、井上吉弘が内冑を突けるに、十文字の横手にて忍の緒を切り冑傾きて目をふさぎければ少ししさりける處を、吉弘が左の脇より下着の青く出るを目に懸て脇腹をつきたりしかば、吉弘遂に討れしどもいへり。又此軍場の後に吉弘が厲鬼あらはれ、ゆき、の人に祟をなしける故、吉弘がゆかりの石垣原のかたへ別府といふ所に吉弘が屍を葬てけり。別府清田濱田の百姓おこり

をなやめば、米を供るに忽おこりおちけり、吉弘が嫡子は清正に仕へ、二男は細川忠興に仕へしが、父のなき後を見んとて別府に行て其印の石を拜せしが、多く米を供るによりて鳥の集りて糞にけがれしかば、今より武具をそなへたらば治し給へさなくば治し給はざれといひしが、是より米を供るにしろし木刀を作り供ふればしるしありといへり。宗像も井上も從者大野勘右衛門と引組たる處に、勘右衛門が弟林也と云ひし法師武者走より、掃部が脇腹に刀を突立てえいやとはねたりければ遂にそこにて討れけり、大友の勢突崩されてはさつと引く、又おしかゝり戦ひけれども井上野村追かけずもとの芝居に跪き、又かゝれば立あがり、突のけ幾度といふ事をしらず、大友が勢終に打負て殘すことなく討れしかば僅計になりて立石に引返す、義統力盡て如水に降參せられけり。

三宅喜藏武勇の事

義統木付の城に向ふ時、細川忠興の士大將松井有吉加藤清正に加勢を乞ひたりければ、三宅喜藏をやられけり、三宅殿の先陣にて功名せんと思ひしに、他國に往て城にかゝまりをらん事は存も寄ざる事なりといふ、清正汝が武功ある故に他國につかはしたりとも吾名を汚さじと思ひ寄たるに、己が名を貪ること心得ね、永く我家を去て心まかせにせよといはれしかば、三宅を

こを出て、庄林隼人にかくと告げ、殿の咎を蒙りたれど殿ならで奉公せんと存る大將も候はず、あはれ隠し置て給はらんやといひしかば隼人心得たりと許しけり、清正宇土の城を攻る時、三宅はわかねの三本じなへの差物さし夜半より鹽田口の堤に行て明るをまつ、宇土には南條元琢こもり居たり、此元琢は伯耆羽衣石の城主南條左衛門元次が二男にて、兄の元重に劣らぬ大剛の者なるが、毛利元就と軍する事度々に及びけるに、敵寄ると聞て只一騎馬上にて上帯しめてかけ出し、半里が程に軍兵をも追ついて速に國境に馳行き、押寄る軍兵を追散したる勇士なるが、秀吉の勘氣にて小西行長が許にかくれて、朝鮮にても武勇の振廻せしなり、此度清正寄ると聞き只一騎城を乗出す、元琢が從者福西九郎大夫是も十八の時より朝鮮の軍にわひて物師なるが、元琢におくれじと城を出て馳行く所に、山の上に清正の馬櫛の馬印ひらめきて見えければ、彌進んで三宅に行合ひ元琢馬より下りて三宅と鎧を合せたる處を、福西透間なく走りより三宅を斬る、三宅がつきたる鎧を元琢握りてつひに引奪ひて既に危かりしに、三宅が從者元琢が胃の眞向を一刀斬付たり、元琢目眩きてくるく廻りながら刀を抜て三宅が從者を切倒す、清正苗の三本しなへは三宅喜藏ならん、討すな者どもと下知せらるゝ詞の下より飯田角兵衛莊林隼人馬にもる鎧を合せてかけ來りければ、元琢敵つゝきなばあしかりなんと三宅をすて引返す、清正三宅を呼て其日被られし羽織に千石の祿を添てあたへられけり。

又三宅元球が冑をつき落せしかば類に手負たれども、淺手なれば三宅が鎧に取付たるより三宅鎧をすてゝ組合たりともいへり。

其後關ヶ原の軍破れて行長生捕になりしかば、清正使を城に立て城を明候へと云れしかば、城代小西隼人自害して城中の者ども助け給はらんやと申す、清正許諾して八代の城代小西若狹も自害し、宇土八代を清正に授く、清正南條に六千石の祿を與へられけり、三宅と南條と物がたりするに元球汝を討留すして殘多しとたはふれしかば、三宅我も存するなりといひけるとぞ。三宅宇土にて組たる時忽刺殺すべきに、其日指たる小脇差少し長かりし故なりと語りしと云へり。

肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事

清正宇土を圍む時、ある夜敵夜討すべしなとおこたりそと下知せられけり、果して杉本次郎介を大將として清正の陣に夜討す、日下部平介阪川忠兵衛鎧を合せ散々に攻戦ふ、杉本守固きを見て城中に引返す、田中兵助は酒に酔て臥居たりしが、鐵砲の音に驚き起あがり、鎧を取てかけ出せしに敵引取り、皆門内に入りて杉本一人大手の柵の木戸口に残り止りたり、田中詞をかけたれば杉本十文字の鎧にて田中を一鎧つきて柵の中に入りけり、清正火を燈し軍せし者ども

を呼ばれしに、田中今夜先がけしたりと申す、清正能見て一番は日下部坂川二人の内なり二人とも箭創有り弓は鎧を合する時射て一同にかゝれば射がたきものなり、田中が創は右の腕にあり、鎧創ならば左の手に有るべし、ことに横に疵のあるは汝が自ら切りたるにやと云れしかば、田中敵は銀のおもだかの立物打たる冑を着、十文字の鎧にて杉本次郎介と名乗たりき、猶偽と思召し候はんには不幸の至に候とて退きけり、後城明わたし杉本も清正に奉公しければ、此夜討の事を問はれしに、杉本城に入らんとせし時どつはいの冑を着鎧を提て走り來り候武者を一鎧ついで候と申す、清正田中が詞證據に符合しければ、五百石の祿をわたへらる、田中其夜一通の書を残し虚名を蒙り世の誹にわひ候程に加祿に本の祿を添て返し候とて肥後を立退きけり、田中は其初盜賊にて有りしが石川五右衛門といへる強盜の長を、秀吉の時京の三條河原にて刑罪せられしに、皆々見物の男女群をなす、田中其中に紛れて石川を引て過る時につと飛懸り、石川が細取を唯一刀に斬倒し、五右衛門に日比の恩に報じ候と呼はりさわさひしめく間人の中に走り入り、終に逃げ出ける男なり、此時二十六歳とかや。

福島家の士大將東照宮を拜する事

關ヶ原の軍に功有ける諸將の家臣を召して、東照宮御盃を下されし時、福島正則の士大將福

島丹波は跡尾、關石見は晴なり、長尾隼人は盤なりしかば、近習の人々能もかたはの集り候と
 さしやきけるを聞し召し、汝等年若くとも能聞け、女は容儀を尊ぶ事よ、よし形はいかにもせ
 よかゝる軍に功名したるを男とはするぞかし、彼三人は世に勝れたる大剛の者なり、汝等志
 十に二三は彼者に似たらんはよかりなるとぞ仰せられける。

加藤清正治亂を論ぜられし事

關ヶ原の後、東照宮石田が亂は雨ふりて地かたまるといふに同じ、此より靜謐ならんと仰せ
 有りしに、諸大名皆祝し奉りたる處に、加藤清正仰せの如く惡逆の輩誅せられ泰平たらん
 事必然に候、然ども天下の治亂は天の陰晴にたとへ候ひなんには、晴渡りたる晴天と見るも俄
 に雲の出來て雨うつすが如き事も有るものに候へば、測がたきは人の心にて候と申されければ、
 淺からず御感ありしとなり。

但清正の此論いづれの所にての事なりしや詳ならず。

黒田如水豪氣の事

關ヶ原の時黒田如水は豊前中津に有りしが、九千餘の兵を率ゐ、九月九日打出て諸所の城ども

攻落し、筑前筑後の浪人共相集り大軍に成し時、嫡子長政の使來り、關ヶ原にて石田をはじめ
 敗北し、金吾中納言秀詮は長政の謀によりて裏切せられし由告られしかば、如水大に怒り、
 うつけ果たる甲斐守かな、天下分目の軍はわざと月日を過して浪人のすぎはひをわたふるもの
 なり、何事の忠義だてぞ、日本一のうつけは甲斐守なりとぞつぶやかれける。其後長政に筑前
 を賜はりければ、如水も京に上られけるに、諸國の大名如水の門に來りて市をなしけり、山名
 禰高如水と年比の友なりしが、如水の許に來りて諸將の尊崇大方ならず、殊に夜中に密談も候
 とて世の疑ふ事も候なり、就中三河守卿親の如くに敬はれ候、かたゞ徳川殿怪しみ思召す
 處なり、徳川殿遠き慮ある人なれば、こなたに心安く立入人の中にも、いかなる目附をか設
 けられたらん、筑前守の武畧徳川家の賞恩淺からず候に、斯ては筑前守の爲に悪かりなん、徳
 川殿しきりに用心あるも皆如水を恐れての事なりと人も申候、猶又醍醐山科宇治に浪人あまた
 居候も、如水の隠し置たる人々疑ひ申なり、いかにと申されけるに如水聞もあへず、内府を
 攻亡し天下を取らんと思はんにはいと易き事なり、筑紫をば皆打平けたり、島津のみ残りしか
 ばあつかひを懸て味方とせん、若楯つかば攻破らん事尤易き所なり、中國備前播磨まで皆空
 國にて有りしかば、我其頃二萬餘の軍兵をひきゐ、加藤鍋島は既に我に隨從すれば、兩先陣と
 して海陸二手に分ち、道すがら浪人どもをかり集んに十萬はあるべし、清正は猛將なり、吾旗

本に有りて攻のほる程ならば、内府を討滅ん事掌の中に有りと覺えたれども、われ年老ぬ、切從へし國を捨て京に上りしに、臆病者どもものたはけにていろく、の事に恐れていふ事を誠と心得られたるやとて扇をぬいて壘を打て大言せられしかば、神高とかくの詞なくて歸られけり。

浮田秀家八丈島へ配流の事

備前中納言浮田秀家は關ヶ原の時一萬八千を帥られしが軍敗れて、近江の伊吹山にかゝり落られし、美濃の白樫村にしばしかくれて有りしに、遂に忍びて西國に落下り、薩州に着れしに其事聞えて、東照宮死罪一等を宥めさせ給ひ、八丈島にぞ流されける、まことに苦ふく菴竹あめる戸に、雨もたまらず風もふせがねば、黒木の柱を削りて書付けらる。

もしは焼うさめかる身は浦風のとふばかりにやわぶとこたへん
其後芳烈公光政朝臣備前におはしましける比、兒島大寺村の商船風にはなたれて八丈島にいたるけるに、秀家九十餘までながらへて居られしが、故郷の者として、いとなつかしげにさまざまの物語して、

秀家備前には誰か有ると問ふ、新太郎少將と答へ申すに、誰が事ならんとて家老の姓名を聞て後、さては池田の家にて有りけるよ、又所々に城多きや、城の北に伊勢の宮を設け置

きたるがいかなるぞと問ふ、伊勢の宮は候、されども士の家ひしと相並びつゝきて候と答へければ、さては世は治りけり、亂世ならんには國境の城に士を分ち置き、岡山には士の家多かるまじきに、今の有様にて治まれる趣を知たりといはれしとかや。

われこそはにひ島もりよおきの海のあらき波風心してふけ
といへる後鳥羽帝の御製を短冊に書て、かの船人にわたへられけるとぞ。

小早川隆景遺訓の事

安藝中納言毛利輝元は關ヶ原の時、秀家と共に徳川家に弓箭を取れしかども、關ヶ原に自ら赴かざるの故に、安藝備後等の國を削られ、長門周防兩州を賜はりけり。是より前小早川隆景遺訓して輝元を諫られし中に、毛利家五十餘郡を領し富貴誠に溢れたりといふべし、此より後苟にも國を貪る心あらば忽滅ぶべきよといはしめられしに、輝元隆景の戒を忘れ果して國を削られたりき、隆景先見の明かなる露もたがはざりけり、隆景は武勇のみにわらず智謀にすぐれたり。父元就病重くなりて其子を集め兄弟の數はを箭を取寄せ、多くの矢を一つにして折たらんには細き物も折がたし、一筋づゝわかつて折たらむにはたやすく折るよ、兄弟心を同くして、相親むべしと遺言せられしに、隆景其時争は欲より起り候、欲をやめて義を守らば兄弟の不和

候まじといはれしかば、元就悦びて隆景の詞に従ふべしといはれしとぞ。秀吉九州を討平けられて後筑前五十萬石を小早川にあたへられしに、隆景これは吾に過たる事なり、此頃まで敵なりし身に大國をあたへらるゝは、吾を愛するに非ず、九州をなつけん爲のかりの謀よと思ひて秀詮に國を譲り、備後の三原を引こもられしとなり。

佐竹義宣國替の事附車野丹波が事

佐竹右京大夫義宣の士大將車野丹波は剛の者にて、白練に火の車を書て指物とす、關ヶ原の亂に義宣上杉に心を合せられしかば、

義宣四萬の軍をひきゐる水戸の城を出で多珂郡に到る、これ上杉の加勢の爲なり、然れども父常陸介義重はもと徳川家に心有しかば、しひて諒められし故、義宣も兵を水戸に返されしとぞ。

伏見にて義宣の八十萬石を六十萬石削られ、出羽の秋田二十萬石賜りけり、若いなむならば其儘討亡すべき体なれば、義宣北國を経て秋田におもむきけり、水戸の城を奪ひとれとて本多正信等向ひける時、車野組に付けし士六人と俱に物具し、新羅三郎より傳へたる城を人に授ん事こそ口惜けれ、我とおもはん人々は城を枕に死ぬやと呼はり、城中にかけ入りしを大手にて本

多等大軍にておしつゝ、み生捕て磔にかけ、火の車の指物をくゝり添へけるを、東照宮聞し召し武家の道を知たる者を空しく殺しけるよと歎かせ給ひけり。

駿府にて、東照宮御物語の序に、篤實なる人は世に稀なり、われ年老ぬれども多くは見ず、佐竹義宣其人なりと仰られしを、永井右近大夫直勝承ていかなる故にやと申すを聞し召し、石田治部と七人の大名と大阪にて諍論の時、義宣と三成ともどよりしたしみ有りし故、三成を打具し伏見に來り、其後三成佐和山に歸る時、七人の面々道にて討取るべしといふよしを聞き三河守を添たりしに、義宣三成を討せては生がひなしとて道々にも聞を出し、其身は物具して告來るを待て打出んと用意有りしと聞く、是篤實にわらずや、關ヶ原の亂の時も、大阪より續きたるゆゑ、吾に其よしを告て何方にも組せざりき、逆亂に與したるにはあらざれども、捨置難くて先祖より已來の國を削りたりき、篤實のよき事いふに及ばずといへども、國の存亡にかゝるべき事には、又一思慮有るべき事にやと仰せられける。

杉原常陸智勇の事

上杉家の士大將杉原常陸は智勇備はりたる人なり、東照宮宇都の小山より引返させ給ふ時、上

杉家の軍兵とも大にいさみあへりしに、杉原獨眉をひそめて大敵に恐れ引返したりとおもへるは其人を知らざる詞なり、徳川殿諸將をひきゐ先上方に攻上り、石田を討れんに十に八九石田敗北すべし、其時殿一人にていかに徳川殿に打勝給ふべき、敵國に攻入らずして引返したるは味方の不幸なりとぞ云ひける。

杉原白石の城を守りしに、いづれの時の事にや、伊達政宗不意に押寄する事あり、政宗の物見の士はせ歸り、敵はしづまり返りて唯町家に火の用心厳しく呼はり候、物具したる武者杉原かとおぼしくて城門を開かせ、將机にかゝりて待居たるといひければ、政宗謀有らんと恐れて引返されけり。

前田慶次が事

前田慶次利大忽々齋と號す、加賀利長と從弟なり。

一説に利大は、瀧川儀太夫が妻懐胎にて離別し、利家の兄藏人に嫁して、前田家に生るといへり、

前田の家を立去りて、

利大は文學を嗜みさまざま藝にも達せり、滑稽にして世を玩び、人を輕んじける故、利家

教訓せらるゝ事度々に及べり、利大大息ついでたどへ萬戸侯たりとも、心にまかせぬ事あれば匹夫に同じ、出奔せんと獨言せしが、ある時利家に茶奉るべきよしひしかば、悦びて慶次が許に來られしに慶次水風呂に水を十分にたゝへてかくし置き、湯風呂の候入給はんやと横山山城守長知をもていへば、利家よかりなんと浴所に至る、慶次自ら湯を試みてよく候といへば、利家何の心もなくふるにゆかれしに寒水をたゝへたり、利家馬鹿者に欺れしよ引來れといはれしに、慶次松風といふ逸物の馬を裏門に引立させて置たりしに打乗り出奔しけるぞとぞ、又京にて夏の比馬を川入にやりけり、馬取の腰に烏帽子を付けさせたり、道にて往來の人立とまり、ふとたくましましき馬なれば誰の馬に候と問ふ、則烏帽子を着足拍子をふみて、此鹿毛と申はあかいちよつかい皮ばかま茨がくれ鐵甲鶏のどつさが立えぼし前田慶次が馬にて候と、幸若の舞を詠ひて引通る、見る人の問ひし度とにかくしけるとなり。

上杉景勝に仕へけり。

初て目見する時、土大根三本莖に居て出しけり。朱柄の鎧を持せしかば何ゆゑぞと咎むるに、父祖より持ち來りしといふ、水野藤兵衛、葦垣理右衛門、宇佐美彌五右衛門、藤田森右衛門年久しく朱柄の鎧持たん事を望み申せども許されず然るに慶次を制禁なくば四人ともに許され候へと認へて許されけり、直江山形に攻入り引返す時

最上義光大軍にて追がけ、洲川にて軍有りしに、義光旗本をひいて切てかゝり、合戦數刻に及びけるに、上杉勢引取り兼しがは直江怒て、われ大將として此口に向ひ、おくれをとる事口惜きまどでもだへ怒りけるに、慶次馬の前に立ふさがり、爰はわれにまかせられ候へといひすて、敵味方にらみ合たる處に馬を乗かけたり、杉原常陸は先陣に有りて種ヶ島の鐵砲を下知しけるが、慶次におり立てかゝれといへば馬より飛下りたり、慶次其日の出たちは黒き物具に狸皮の羽折を着、金のいら高の珠數のよさに金の懸簞付たるを襟にかけ、山伏頭巾にて十字字の鎧を持ち、黒の馬に金の山伏頭巾がぶらせ唐鍬 かけたり、前田慶次と名乗りてかゝりける處に、水野斐塚字佐美藤田四人も同く鎧を引提げ、おめささげんで念なく敵を突退けたるに、杉原種ヶ島鐵砲三百挺小高き所へおしおげうたせし故、物わがれせしかば慶次下知して引取りけり。

慶次指物ぬりに大ふへん者と書きたりしに、人々わまりの事よといへば、慶次汝たちは武邊とよみたるや、われ落ぶれて貧しければ、天不辨者といふ事なりと嘆れしとかや。

上杉家祿知削られし後、士多く暇を取りて立去けるに、慶次を七八千石一萬石を以て招く大名あり、慶次われ此度の爾に諸大名表裡の心見限たり、景勝ならでわが主君とすべき人なし、扶持し置てたまはれとて五百石の祿にて民間に引込み、風月を楽しみ歌學に心を寄せ、源氏物語

を講じて世を終れり。

出羽國長谷堂合戦上泉主水討死の事

上泉主水憲元は甲斐の武田の家にて劍術の上手上泉伊勢が弟なり、ほまれ有し者なるが京の相國寺の内に落ぶれ身を寄せ居しを、秀吉の時直江景勝の供して京に至りしが傳へ開て對面し、さまざま上泉をもてなし、會津は遠國なれど景勝三千石の祿まゐらせんとなりといへば、上泉かゝる身に思ひもよらぬ詞を承るとて仕へけり。直江出羽に押入る時上泉も三千五百の將たり、最上方には山の上より幡屋まで二十四ヶ所に出城を設けたるに、直江は眞直に山形にすゝんで攻とらんと謀りける所に、幡屋より春日右衛門にしたしみある者のかへり忠せん事をいひおくる、直江悦んで山形にすゝむ兵を押止め、山路にかゝり幡屋によせんとす、軍奉行杉原常陸春日右衛門が一陣を以て幡屋にすゝめ、惣軍は山形に攻入りて然るべからん、敵我に利をあたへ嶮岨にそびき入れ其ひまに山形の要害を能せん謀なりといへども、直江もどより杉原と中よからざれば、我は唯易きに就んとて聞入れず、やがて幡屋を取圍み一時攻に乘破りけり。一説に長谷堂より内通の事をいひ送りければ、直江大に悦びけるを、杉原是は赤松圓心が白旗の城にて新田左中將を欺きたりし謀なり、かくいうて山形の要害をかまへん謀なり、只

山形に攻入るにしかじといへども用ずして長谷堂に押寄けるに、内通の事はいつはりなりし故、直江欺れたりといへり。

それより出城を只一日の中に二十一ヶ所攻落し、さらば山形に押寄んといふ、上泉が曰く山形は勝れて要害よく西南は沼なり、東北は石壁高く柵の木七重有り、矢倉二十餘所にかまへ且美光は先祖より數百年此地に有り、士卒に物なれたる者多し、力攻には思ひもよらず、所々の小城數多攻取りたるにて勇氣を示し、軍を返されん事然るべしと申す、直江あざ笑ひ軍を出せしは山形を攻んためなり、今更山形の要害よければとて引退くやうある、汝は淺黄じなへの差物さして利根川二本木の先陣せられしによりて、關東にてそれを憚りて淺黄じなへを指すものなしと聞たりしにも、覺るぬ事をいふと罵りければ上泉口惜き事なりと思ひけり、直江は進んで菅澤山に陣したり、此處も長谷堂より十九町なり、義光も二萬餘の兵をひきゐ山形を出で、長谷堂の山の尾崎稻荷山に陣す、長谷堂には山形の加勢も來り要害よければ、たやすく攻めがたし、討て出での軍は危しと制しけるに、大風右衛門二百計にて切て出で上泉が陣へ向ふ、上泉大勢にて押つゝみあまさしと戦ひけるが、大風僅に打なされ切ぬけて城に入りぬ、伊達政宗も軍を出し、先陣長谷堂の城下に押來り陣を取たり、直江は大風を討得ざる事残り多し、此城を唯一時に打破れと下知し城際に攻寄せたり、直江高き所に打上り石火矢を透間もなく打懸け

たるに、只千雷の落かゝるが如し、志村伊豆鮭延越前こゝを専途と追出しおひ込れ、相戦うて其日も戦ひ暮しけり、直江又三千餘を城の後の山に上らせ、鐵砲を打かくれば城よりも切て出で死傷數をしらず、直江軍兵をわかち四方を燒きはたらさず、所々に軍あり、長谷堂の城下に大なる池谷を堰にして水をせき湛へたると覺しければ物見の兵を遣し、又一陣を以て燒きはたらさず、城中よりひた胃八百計切て出しかば、直江使を以て引取れと下知すれどもにらみ合て引退らず、使も行どいまりて歸らざれば次第に軍兵重り鐵砲を打合ければ、直江杉原にとく軍を引上られよと云ふ、上泉我こそ行かぬといへば、杉原進むは年若き人の業引揚るは老年の我に協ひたりとて同心せざるに、上泉存る仔細の候といひもあへず馬を乗出しければ、組に付けられし大高七左衛門馬を乗付け上泉を引どいめ、士大將の只一騎にてかけ出るやみやある、有べくもなしといへども耳にも聞入れざれば大高もつゝいたり、前田慶次佐美民部上泉が陣に行き、一陣の大將敵に乗入るをよそにひかへたるは士の本意に非ず、いざかゝられよといへども進むけしきの見えざれば、前田をはじめ二十騎ばかり駈向ふ、上泉大高は馬より立ち立ち面もふらず鎗を打入れ突合たるが、念なう敵を突退け引取んとする所に、政宗の兵三百計横わひより切て懸りければ、上泉兼て直江が詞を怒りたりし故に一足も引まじと思ひ定めたれば、又合戦を始め、火出る斗に戦ひけるが敵味方討るゝ者多し、前田宇佐美を始め大剛の者ども數度切てか

りしかば、政宗の兵三十餘人討れたり、かゝる處に政宗の士大將石川彌兵衛崩る、味方を
 もり返し、又打てかゝる、前田巳下立たへかゝりつ返しの散々に戦ひけり、直江日も暮か、
 り進みがたし、とく引とれと下知しければ、上泉心得候といひ捨て敵に向ひ、上泉主水といふ
 剛の者打取候へど名乗かけ、死狂ひに數十人切伏終にそこにて討死しけるを、首をは金原加兵
 衛取りたりけり、上泉三十四歳とかや、上泉主水と背の眞向に琮嵌にぞしたりける、是より上
 杉勢亂れ立て敗北すれば義光政宗勝に乗りあますなど追つむる、芋川縫殿村上國清四千計横谷
 よりかゝらんと陣を整へひかへたるを見てふみとまりければ、又取て返し追立てそれより物わ
 かれず、石坂與五郎夢沼日向前田慶次宇佐美父子物具に立所の箭各七つ八つ折かけ、鎗は突ゆ
 がめ刀は刃さゝらの如く斬なし、人馬共米にそみたるが、上泉が組の控へたる前を乗通るとて、
 各 大將主水をすて殺しをのこの交りはなるべからず、大高七右衛門のみ士なりとて罵りて
 打過るに答ふる人なかりけり。

伊達上杉陸奥國松川合戦の事

附 永井善左衛門岡野左内が事

慶長六年四月伊達政宗奥州景勝の地を斬取んと百姓を問者にしておこたりを伺はれたり、松川

は阿武隈川の枝川にて伊達領の境なれば、本條出羽守甘粕備後若井備中杉原常陸栗生美濃岡野
 左内五千計にて守りけり、政宗は國見峠を踰え信夫郡より瀬の上の川を涉り、五千の兵にて梁
 川の城を押へ松川をさして押寄せ、物聞ども斯くと告ぐれば本條出羽城を出で川を渡してや
 戦ふ川を前にして半途をや打んといふ處に、松木内匠敵不意の利を謀りて押寄せ候に味方川を
 渡りて待かけなば、政宗思ひしにたがひて必引退くべきなり、川を涉らんこそよかりなめとい
 ふに栗生同心せず、此川中窪にて極めて渡す事たやすからず、政宗わたらん處を半途を打に利
 あらん、岡野いやく敵大軍なり、爰に待んは敵を恐るゝに似たり、勇士の志にわらず、と
 く川を渡して待設せんと云ふ、栗生孫子に以少合衆是曰北といふとあり、小勢にて無謀の軍
 せんは大敵の槍とならんは必定なりといふ處に、甘粕備後杉原常陸もはせ來り、まづ物見を出
 せとて猪俣主膳本庄段右衛門井筒小隼人乗行で馳歸る、猪俣は政宗川を涉らじといふ、二人は
 政宗川を渡さん事半時計もやあらんといふ、仔細を問ふに猪俣敵馬の沓を取らず障泥をはぶさ
 ず羽壺を常の如く附けたりといふ、井筒本條が云く我等見し所も同く候、されども政宗いまだ
 來らず、其間五六町計もや候はん、政宗川際に押寄せて其支度せんは何の時刻を移すべき、且
 小荷駄を遠く引退たれば戦ひを持たる敵なり、政宗二萬の軍兵を帥て寄來り空しく引返すやう
 や候といふ、さらば川端二町計置て陣を整へて敵を待んといふ所に、岡野は切支丹を信する人

なるが、南蠻人の贈りける角榮螺といふ背を着て眞先かけて川を打渉す。栗生甘粕川を渡るべからずと下知すれども、布施次郎左衛門北川圖書小田切所左衛門等二十騎計眞しぐらに川に乗入れ打渡す、宇佐美民部鎗を横たへ残る兵をば押どめてけり、かれば政宗押來り先陣片倉小十郎透間もなく切てかゝる、岡野四百計眞丸になりて鎗を打入れ、面もふらずおめきさげんで戦ひけれども、大軍に取かこまれ左内僅に打なされ切ぬけて引退く、北川馬の首を立直し小田切に向て唯今討死せん、會津に残し候十四歳なる吾子を囑申よ、是をかたみに送りてたまはり候へどて狸々皮の羽織を脱で小田切に渡しければ、小田切若萬死に一生を得候ならばたしかに送り候べしとて羽折を腰にはさみけり、北川今は思ひ置事なしとて退くる敵の中にかけ入りて切死にしたりけり、是をはじめとして歸し合せ、火を散して戦ひけるが討るゝ者多し、政宗勇み進んで追かけられしに、岡野狸々皮の羽織着て鹿毛なる馬に乗り、支へ戦ひけるを政宗馬をかせ寄せ、二刀切る岡野ふり頼て政宗の背の眞向より鞍の前輪をかけて切付、かへす太刀に背のしころを半かけて研はらふ、政宗刀を打折てければ岡野すかさず右の膝口に切付たり、政宗の馬飛退てければ岡野政宗の物具以外の外見苦しかりし故、大將とは思ひもよらず、續いて追詰ざりしが後に政宗なりと聞きて、今一太刀にて討取べきにとて大に悔みけるとなり、岡野は川へ乗入れたるに政宗又十騎計にて追かけ來り、きたなし返せと呼はりければ、岡野ふりかへり

て眼の明きたる剛の者は多勢の中へかへさぬものぞといひて岸に馬を乗上たり、宇佐美兵左衛門十六歳松川の向ひの岸にて危く見えしかば、父の民部馬を川に打入れたり、栗生いかに先には川を渉る者を止められしが何事に渡され候や、名將の宇佐美騎河守の子息にはいかにと問ふ、民部謀も心より出候、あれ見られよ一子の兵左衛門向の岸にてはやうたれぬべく見ゆれば心の亂れたるぞやといひも終らず、川を渉り打連て引返す、栗生は陣を整へて待かけたれば、片倉が軍兵を追崩し川に追ひたす、されども大軍見る内に重り攻寄せしかば、上杉勢は福島をさして引退く、福島に至る行程なかり政宗いづくまでもあますなど馬煙を立て追ひかけしかば、物具を道に捨る事敷をしらず、息されて行倒れたる者もあり、持鎗の長き柄はもち堪がたくて多くは捨けるとぞ、

永井善左衛門は世々徳川家に仕へけり、小田原の城を圍れし後、いかなる故にか有りけん、蒲生氏郷に仕へ、其後上杉家に奉公しけり、すぐれたる剛の者にて、奥州福島口にて物見に只一騎出たりしに、伊達政宗の伏兵六人起て取包みしを四人討取りたり、長篠にても太刀打して首を取りたるが、右の指に手負刀を取落せしを取たる敵を追詰て、又討取りたるはどの物師なり、其後其疵を問へば馬にくはれたりと答へしとぞ、かくのごとく功にはこらぬ人なり、後御旗本に歸り仕へて御旗を司りき、善左衛門浪人にて上州深谷に閑居し

て有りける時、人のあたへし瀬戸の茶人を秘藏せしに、下女取落して打破りぬ、下女驚きてわが鏡臺より五倍子を入れたる壺を取出し、是にでもかはりて奉らんといふ、用にも立たぬものなれども是を請取り置きぬ、後に小堀遠江守見て手を打て是は唐物の肩衝なりと稱美し、後に公に奉りしとなん、板倉勝重懇なりしかば、將軍家に御ことわりを申さん御上京のより京へ來られよといひ越されしかば、深谷を出で平安に赴く時浪人をももなひけり、名護屋に親族ありて立寄ける隙に俱なひける浪人已が刀を永井が指替の刀に取替てかけ落しぬ、永井せんかたなく京に着て後死罪の者有りけるに試んとて刃を付さするに、さびて金色も見えわかず、研師刃を付て此刀の如き刀の刃會て心に覺えずといふ、斬罪の場にてふち身の者有りて切れざりしに、かの永井がさび刀にて切りたりしに物に障る事なきに似たり、能研て見ればすぐれたる物にて銘は正宗と切りたり、本阿彌に見すれば正宗の中にも殊に最上の物なりといへり、是も將軍家に奉りて永井正宗と號せられしとなり。青木新兵衛永井善左衛門を始として大剛の者ども馬を返しては追ちらし、とつて返しては突はらひ後殿しけり、青木は小丈なる馬に乗柄の短き鎗なりし故、殊に乗りさがり幾度となく支へ戦ひけり、甘粕備後は上杉家にて勝れし勇將なるが、白石の城を守りしに會津に行たりし跡にて、登坂逆心して白石を敵に取られし事を口惜く思ひしかば、今日とりわきて引さかり取てか

へして追退け勇氣をあらばしけり、福島の城下の川を渡る時、政宗の兵船追詰てわれ先に川に打入りたるが、永井を後より三刀切る、永井度々の軍に戦ひ疲れ、大軍打渡す川音にまさきれ此を知らず、青木は烏毛の棒の出しにて黒さはるかかけたるが乗寄せて敵を追拂ひ、川岸に打あがりて永井に斯くといへば、驚きて従者に見すれば、ほろに三刀較にも刀の痕あり、永井けふは助けられしとて二禮をぞ述たりける、小田切も敵に取圍れあはや討れぬと見えしを、青木又がけ寄りて敵を追拂ふ、岡野は旗おし立て靜に福島の城に入り甘粕栗生も引入りければ、政宗やがて押寄たるに殿の兵ども柵を踏て城に入たりしに、青木は柵を越かねて只二騎ひかへ居たる所に政宗馬を駈寄せたり、青木十文字の鎧にて政宗の冑の立物三日月を突折りしかば、政宗馬に諸鎧を合せてかけ通られぬ、青木後に政宗と聞て、今一鎧にて突殺すべきに口惜き事よとぞいひける、かゝる處に築川の城より須田大炊助長義討て出で、政宗の兵阿武隈川を前に陣しけるが、此川奥州第一の大河なれども、須田はよく地の利をしり、兵を二陣にわかち、須田は川上に打上りけるを見て、政宗の兵二ツに分れて防がんと色めく所を、一文字に渡して斬りかゝる、敗北しければ物具を始め多く分捕にせし中にも、伊達家に傳へし幕を須田宇平次中村仙右衛門奪取りてけり、須田今年二十三これより武名殊に世に高く聞えけり、政宗は松川にて後に敵出たりと聞き引退く處を、本庄越前又かけ出で川を渡し追かければ政宗敗北し、信夫

山に掛りて引退く時、景勝後巻に打出て紺地に日の丸の旗山の上に見えしかば、政宗とる物もどりあへず仙臺に引返されけり、後に政宗使を以て攻取りたる白石の城と幕と取換んと云ひ送られしかば、景勝聞て白石の城は鋒にて攻とられ候、幕も亦吾士卒の骨折て取得候へば重て幕をも鋒にて取返されよと答られし後、小城一ツ政落されしは恥にあらず、昔より名將も城を敵に攻落されし事なきにあらず、武器を取られし事は弓箭とる身の大きな恥なれば、政宗我をたばかりて斯く云ひしなりと笑はれけり、台徳院殿上杉の館に御出有りし時、かの九曜の幕法華經の幕を腕にうたれしとぞ、其後政宗岡野に逢たりし時、松川の軍の有様語り出して、汝が斬りつるはわすれと物をといはれしかば、岡野大將の刀の跡と存候て金糸にて縫わはせ家の寶とせんと存するよしひて羽折を政宗に見せければ政宗悦ばる、其時岡野胃のしころと吹通しかけてなぐり切にしたりきと申ければ、政宗色を變じ物語を止られしとや。

岡野はもと蒲生家の士なりしが上杉家に仕へけり、富有ある人にて儉を好み奢をにくむ、一月の間二三度も金銀を山の如く積て其中に臥てなぐさみとしけるを聞人そしりあへり、或時岡野いつもの如く金銀を並べて見居たりしに、近きあたりの士わらそひをし出し方人の者どもあまたかけ寄てさわぎしを、岡野聞くやいなや正宗の刀を提げて走り行き、一日一夜其家に有りて事能どりあつかひて歸りけり、岡野が馬取の下部大板金一枚持たりと聞

き及び呼出して汝が志こそゆゝしけれ、人は貴賤によらず貧くしては義理のなすべき事も心ばかりにて叶ひがたし、よく心がけたりと云ひて黄金百兩與へけり、景勝會津に兵を起す時、永樂錢一萬貫文を獻じ、朋輩の親しみ深き人々にはわまた黄金をわかち送りけり、軍のしたくに人々はひしめきけれども、岡野は猿樂に舞をぞれとてさわがず、人に語りて日比は武備におこたらす猿樂でも世のゆたかなる時は諸方にまねかれて暇なし、今人々あわてさわいでかの者どもいとまわれば、玩にまねきたるよ、軍に臨む者生て歸らんと思はず、されば今生の樂しみと思ひてなぐさみ候とぞ云ひける、又政宗福島島の城を攻めとらんとて木幡四郎左衛門百騎計にて城近く働さけり、岡野井樓より見大物見なれども三陣にわかれたるは軍を心懸たり、兵を出すべからずといひけるに、鈴木彦九郎よせ來りし中に政宗有るべし、くひとめて討取らんといへば尤なりとて兵を出し、先陣廿騎計次の陣にひとつにならんと色めく所を、鐵炮を打かけ、煙の下より左内一文字に切て掛り、遂に木幡を討取りければ、景勝度々の功を賞し、謙信武功の輩に姓名をわたへられし例により、左内を越後と更められけり、政宗三萬石にてまねかれしかども、舊主の好み忘れがたしとて、蒲生秀行に仕へ猪苗代の城に有り、下野守忠郷の時死しけるが、金子三千兩正宗の刀を遺物に獻じ、忠郷の弟中務にも金子三千兩景光の刀貞宗の小脇指をかたみにまゐらせけ

石田が子の僧助命の事

り、牽頭人にかしげる金銀の手形證書の大なる箱にありしを皆焚すてたりしとぞ。

關ヶ原の亂をさまりて後、東照宮本多正信を召して石田が子妙心寺の内永壽院が弟子にて僧となりしを、寺中一同して重罪の人の子なれども幼き時より出家したる者なれば赦され候へといふはいかにと仰せ有りければ、正信とくにも御赦されの有るべき事に候、治部は徳川の家に大功をなしたる者なり、治部よしなき軍を起し西國中國の大名をかたらひ候ひしに、一戦に打負たる故にこそ日本六十餘州皆徳川家に歸服いたし候へ、治部が存立しよりかく日本は従ひぬれば、徳川家に大功を成たるには候はずやと申ければ、東照宮汝が理窟もさる事なりと仰せられて、かの僧御ゆるされを蒙りたれば、岡部美濃守宣勝、懇にして和泉の岸和田にて終りけるとがや。

越後國一揆堀直寄武功の事附于利休が事

關ヶ原の亂の時越後に一揆起り、堀左衛門督秀治が臣小倉主膳が下倉の城を攻る、堀盛物が子丹後守直寄坂戸の城にてかくと聞き、後巻にかけ向ふを敵引ながべて坂戸を攻ば如何あらんと

云ふもの有り直寄いまだ下倉を救はず、敵此城に攻來らざば敵の旗先をだに見ず口惜かるべしといふよりはやく打出て下倉に向へば、小倉も門を開て切て出で、直寄後より一文字に突懸り一揆の長田丸右京を打取りたり、此告を坂戸にて書する時、勝利を得候と書せしかばいかいあらんといふ、直寄あざ笑ひ、打まけば戦場の土とならんと云ひて出られけり、一揆柿崎齋藤巳下五千計猶山により、前に平田をわて、陣しければ、直寄昔太閤の前にて允長老の孫子よみしを聞きたるに、兵以正合以奇勝といへり、吾けふ奇を以て軍すべしとて、山中數馬速水織部に高じるしを渡し、直寄は六百計引分て林の中に待居たり、一揆馬印を見て進み來る時、林の中よりとつとかけ出で、直寄眞先にす、みて思ひもよらぬ不意を討つ、一揆二百餘討取りて切崩したり、東照宮御威狀を賜りぬ、此年二十四歳とかや、後に一萬石を賜りけり。

直寄は秀政の長臣堀盛物直政の次男なり、十三歳にて陪臣なれども太閤の小性に召出され左右をはなれざる寵臣なり、初三十郎といひけるが後丹後守と稱す、太閤ある時茶室に入りて火をともし炭を入れる時、千利休が幽靈あらはれ來て黒き頭巾をかぶり爐のかたへに座し居たるが、眼の中より光生じ息に火を吐く、左右に有りける侍女恐れあへるに、太閤炭を入れ終りて無禮なりとてはたとにらまれしかば、利休が形退きて坐す、太閤常の居間に出で、丹後守をよんでばけ物數寄屋に有り、しかり來れといはれけり、直寄今年十

五歳なり、即行く時廊下の窓下みな閉て、さてすき屋に入りて見れども何もなし、歸りて斯といへば羽折をあたへらる、利休は茶の湯を好て世に名あり、天正十八年秀吉南禪寺より黒谷へ出らる、山ぎはの道にて、女房の下部にわりと持せ、山々の花をながめて静に來りしが、秀吉の先ばらひの者を見て、花の木蔭に立かくれたるが、いふ計なく美麗なりしを問はるゝに、利休が女にて閑屋に嫁し今は獨住なる由聞て宮仕へさせよとしひてよび出されしに、夫にわかれし後悲しみの涙乾かずとて従はず、利休にしひられしに女を商ひしたりとて人にいはれんが口惜とて出さず、秀吉利休をにくまれしに、利休木像を作り大徳寺の山門に置きたり、太閤山門は天子を始として通らせ給ふ頭上にかする事無禮なり、且茶の器の價に就て私有りと聞くとて、天正十九年二月利休を誅せられけり、利休小座敷に茶の湯をしかけ、弟子の宗巖と常の如く茶の湯終りて、それぐに形見をわかちやりて後自害しけるどぞ。

直寄幼少の時紙でこ土でこひいなやうの物を玩びて、人の贈るにも他のものは悦ばず、されば人ごとに贈りけるほどに大なる籠に入れて有りしを、人々あやしみ思ひけるに、常に人なき所にかのでこを並べ、武者押陣取をして戯れ悦びしどぞ。

世間太兵衛伏兵を知る事

越後の一揆三條の城に寄ける時、道に伏兵したり、溝口伯耆守宣勝兵を出して三條に赴くに世間太兵衛先陣せしが、小川の脇に新しき蕨の有るを見て、此邊に兵を伏置たるならんとて捜しければ、伏兵駭きて逃げるを追かけて百餘人討取りたり。

眞田昌幸父子三人始末の事

眞田安房守昌幸は海野小太郎幸氏二十一代の末なり、父海野彈正幸隆信州眞田に居て眞田氏と稱す、武田家の臣となる嫡子源太左衛門信綱は長篠にて討死す、二男は武藤喜兵衛昌幸と云ふ、長篠の後高坂彈正五ヶ條の諫を申ける、其一條にて昌幸に兄の家をつがせられけり、父の幸隆後一徳齋と號す、昌幸信玄の近習にて十八の歳川中島にて鎧を合せたり、天正十年勝頼諷訪に陣し、四方より敵來りし時、昌幸吾妻の城にこもられよといひけれども長坂長閑其謀を用ひず、勝頼郡内に赴きて死して國亡びぬ、北條氏政兵を出して甲府を攻取んとするどき、昌幸徳川家に屬し、依田信蕃と碓氷嶺に陣して北條の糧道を塞ぐ、東照宮北條と和平し給ひ、上野の沼田を以て甲斐の都留信州佐久二郡に換らるべしと約あり、是より前昌幸沼田の城を攻取

りて要害の地とせり、眞田に上田を與へ沼田をば氏政に渡すべきよし仰出さる、上田はもとより信玄以來眞田が居所なり、昌幸われ徳川家に功有りといへども僅に上田と沼田を賜はりぬ、賞甚薄しと思ひて辭し申けるは、沼田は賜り候地に非ず、吾鋒にて取り得たれば故なく人にあたへん事叶ひ候まじと申けり、豊臣家に屬すべきよしを云ひ送りし其折から、秀吉東照宮の上京なき事を怒りて此を悦び、密に上杉景勝に眞田に力を合せよと下知せられしかば、千六百の兵を眞田が許に援とす、東照宮眞田は奸謀ある者なりと、もとより憎ませられける上、無禮の答を怒らせ給ひ、大久保七郎右衛門忠世、鳥居彦右衛門元忠、平岩七之介親吉、柴田七九郎康忠を將として七千の兵を以て上田を攻させらる、昌幸城より一里計隔てたる加賀川を敵渡る時、半渡を打べしとおもひけるに、甲州の浪人板垣修理とひ敵の半渡を討て利有りとも、三遠の物師どもなれば、敵の後陣二の見る勝あらんと云ひければ、昌幸尤なりとて城に近き砥石の城に嫡子信之、矢津の岩に矢津但馬をこめ置き、寄手必染屋平より寄るべし、よわくと引受て不意に突て出んとの謀なり、又城外小野山のかげに郷民を伏置きけり、寄手すゝみて町口に押入り、惣廓の内横小路に柵をくひ違ひにゆひて簾をかけ、其陰に伏兵を置き、鐵炮を打かくる、昌幸思ふ處に引受け城門三方より一同に打て出でたれば、寄手支へ兼ねて崩れしかば討るゝ者多し、砥石矢津よりも切てがゝり郷民ももみ合ひたれば、大久保十四五騎に

て踏止り戦ひて加賀川まで引取りたり、鳥居は高き道を退きけるを砥石の兵喰留んとて慕ひ來れば、五六町計の間に討るゝ者數多なり、大久保は鳥居が敗軍を見て忠世唯一騎引返し、弟平介忠孝後彦左衛門黒き物具に銀の揚羽の蝶のさし物にて乗付て馬より飛下り、鎧を提げて扣たる處に、敵押懸る中にも眞先なる兵を突伏せたり、忠世が返すを見て松平七郎右衛門をはじめ引返し來れり、平介は小高き處にふみこたへたれば眞田も進み得ず、其間僅十間計に過ぎれども忠世少もひるまず、日置五右衛門忠世が陣の前を通らんとす、平介これこそ敵上三ツ巻を付けさるぞと云ひけるに、日置いかいあやまりけん、味方ぞと心得て日置五右衛門なりと名乗て通る處を、足立善一郎政定鎧おつ取り鞍の前輪を突く、五郎衛門が從者鎧を取直し、善一郎を突く、平介が前をはせ通らんとすれば平介またつきけれども、從者鎧を崩へて平介に向ふ、其間に五右衛門乗拔し處を氣多甚六郎のがさじと追さまに股のはづれを突く其時五右衛門ふり顧り川中島の加勢と思ひて危ふかりしといひてかけ抜たり、忠世平岩が陣に往て敵はまばらに追懸來たれり、我跡を詰られなば切てがゝり候ふべしといへども、親吉敵小勢なれども必定近所に伏兵有るべしとて進まず、其間に昌平城に引入けり、此日酒井與九郎殿して敵の首を取りければ其日の一の功名なり、翌日忠世廉忠眞田が枝城丸子を攻んと筑摩川を渡るを、眞田見て海野町へおし出し、八重原を一騎打に相働く、忠世鳥居平岩に後を詰ば敵の中を取切討取るべし

といへども同心せず、真田引取りたり、味方は八重原に陣し、真田も城を出て陣し、足輕軍あり、芝土居をつき柵を結び蒔田働きに日を送る、かくて濱松より井伊直政大須賀康高を始として五千餘援兵たり、されども秀吉の下知により景勝大軍にて真田の後巻するとの聞え有り、諸將相謀りて陣拂す、昌幸が次男左衛門佐信仍(信仍或本にノブタカカ)佐け慕はんとす、大返しにかへして軍すべき物色を昌幸見て信仍を制して追はざりけり、諸將歸陣の後昌幸大息ついで、徳川殿は誠の英雄なり、加勢を以て城を攻むる色をあらはしたる故、昌幸其謀に陥り防ぐにのみ心ありて夜討朝がけの志夢にも無りしなり、斯たばかりて不意に引取たる事、吾計の及ぶべきにあらざると云ひけり、其後東照宮太閤と和平なりしかば、景勝の加勢の頼も無く、信州甲州の人々を真田頼みて秀吉に申て徳川家に歸り屬すべき旨を申せば、御許容あり、天正十五年正月七日昌幸信州深志の小笠原右近大夫貞慶と共に駿府に参りて、東照宮に謁し奉る。

東照宮も昌幸が武勇侮りがたしと思召して、嫡子信之を本多忠勝が婿にせんと仰せられしに昌幸夫は聞わやまちならん、本多が女を信之が妻にせん事さらに望みに候はずと申す、東照宮此事を太閤に御物語有りしに忠勝が女を養うて今はわが女なりといはせられよとはかられしかば、東照宮使を以てしかじかなりと仰せ送られしかば、果して昌幸聞受たりと云ふ。

斯て北條征代の事起れり、天正十六年八月北條氏政の使として北條氏規聚樂に参り、氏政上京すべしといへども上野の沼田は天正十年徳川殿と和平の時相渡さるべきを真田 恣なる事を申て北條家 志を失ひ候、早く安房守に彼地を北條に渡すべき旨をしめされなば氏政上京せんとぞ申ける、秀吉聞き給ひ往年の事詳に知ざる事なり、北條家に土地の事能知る者を上京せしめよとて氏規に暇給はりぬ、翌年坂部岡越中融成入道江雪大阪に赴きければ秀吉事のよしを聞給ひ、真田が上州の内の所領三分二并沼田の城を北條に渡し、其換地には徳川家より真田に與へらるべし、同所三分一名胡桃城ども真田已前の如く願すべきよし江雪に命せられけり、かくて真田が方より沼田を武州鉢形(鉢形は武州に在り)の北條氏邦に渡し、氏邦其従士猪俣能登範直を沼田の城代とせしに、ゐなかに人にて得失の辨なく、名胡桃の城を真田が領せし事を怒りたばかつて城を奪ひ取りたり、昌幸太閤に懇へしかば、太閤北條は沼田を得ば上京すべきと約しながら遅緩を怒られし上に此事を聞て氏政を征伐せんと志決して、天正十八年秀吉師を出して小田原に打向はる、東山道の先陣前田利家碓氷峠に至り、上杉景勝は阪本に至れば、名胡桃を奪ひ取し猪俣は戦はずして城を捨逃落ければ真田信之(後伊豆守)城に入る事を得たり、昌幸は去る天正十三年以來秀吉の恩願を得しかば、大谷吉隆に申て次男信仍を秀吉の許に人質に出しけり、其後石田兵を起すの時、真田父子三人は奥州に打向ふ途中に石田が使來りて秀頼公の爲に旗をあげ候、同心せ

られれば信州に故主君の地甲斐を添へて參らせん、儻なきしるしにて起請文を送りけり、昌幸素より徳川家に二心あればさらば引返すべしといふ、信之是は然るべからず内府智勇勝れたる人なり、いかでかたやすく討滅さるべき、思ひも寄ざる事なりと諫れども昌幸聞入れず、又一説に本多と親しみ厚く候へば、石田にくみしがたき由を信之申せしかば、弟の信仍女房のよしみに引れ、父に弓引くやうや候と申す、又信之西國に興せられなんに必軍敗れ候べし、其時父と弟との危難に逼らんを助けて家の亡ぶる様にせんといひければ、信仍西國の軍敗れば父も又信仍も同じく戰場の土とならんに、何として助けさせ給ふべき、徳川家先年兵を出し上田を攻めし時景勝加勢候ひし、其報禮などかなるべき、其比秀吉公和平を取行ひ給ひ武名を世にわけしかば豊臣家の恩淺しといふべからず、唯疾石田に同心有りて然るべし凡家の亡ぶべき時人の死すべき時至らば、潔く身を失ひ候こそ勇士の本意なるべけれ、何條きたなくいのち生て家の亡びざるやうにせんと云ふ事や候と争ひければ、信之怒て汝が詞不禮なりとて既に切て捨べく見えしかば、信仍いや／＼只今爰にて首を刎られ候事は許されよ、信仍は豊臣家の爲に身を失ひ申さん志なりといへば、昌幸聞て兄弟の争各其理有り、太閤世を過させられし後此事の起れるも必秀頼公の爲にする忠にあらずと信之はおもへるならん、信仍がいふ處善思ふ所なればわれと共に引返すべし、信之

は是より心任せにせよとて別れしといへり。又一説昌幸云ひけるは、會津より宇都宮に至て七日路なれども、日の岡の徑より三日の行程なり、景勝と謀を合せ前後より攻たらんに、伊豆守俄に裏切するならば徳川殿をたやすく討取るべしといひければ、信之内府は勇略百萬の人にもこえたり、味方利有らん事存じも寄すどて遂に兵を引わけて參りければ、東照宮信之を召て安房守が片手を折る心地するよ、軍に勝たらば必信州を賜はるべき後の證ぞとて御刀の繼のはしを断ちて賜はりけるといへり。又眞田兄弟の争の處は佐野の天妙といふ、又犬伏といふ所なりともいへり。

昌幸は引返して沼田の城にて信之が妻に對面せんと云ひけるに、信之の北の方聞もあへず、既に父子仇となりて引分れ給ひしかば、父にておはし候ども城に入奉りて見え申さん事思ひも寄らずとて、本丸の門を固めさせ自ら物具取出し女房共皆刀を側に置きたり、厩にあし毛の馬あるべし厨の土間につなげとぞ下知せられける、昌幸聞て吾過ちなり、人々能聞候へ日本一世に云へる本多中務が女なりけるよ、弓取の妻はかくこそ有べけれ、此婦人あらんには眞田が家危からじといひけるとぞ、昌幸夫より須河に至り高間越にかゝりて上田にかへりけり、台徳院殿木曾より登らせ給ふ時、御使を以て禍をまねかるゝにてこそあれ降參せよと仰せ有りしに、昌幸聞て秀頼の爲に城を守り候、攻められれば一矢仕らんと答へしかば、又御使にて石田小

西等己が威權を恣にせんが爲にかゝる企に及べり、豊臣家の恩を蒙りし人々皆背きたるを以て知るべし、猶降参なくば信之に腹切らせ其後城を攻破るべしと仰送らせられしに、昌幸聞て太閤恩深き人々の背き候は此人々心の同じからざる故なり、既に子にて候信之父と相違ひたるにてしるし召さるべし、信之に腹切せられんとや親の子を愛するは誰も同じ事に候へども、信之父とともに城にあらば同じ枕に討死すべし、信之を助くべきにあらざると答申せしかば、さらば攻めよとて陣を寄せらる、其日は百姓の家に込入りたりしに榊原康政眞田今夜必夜討すべしとて物見を出し、烽火を透間なくたかせたり、果して信仍夜討せんと支度したりけれども、康政の設によりて夜討はせざりけり、斯て明れば九月六日押寄せ給ふ、淺見藤兵衛只一人隙際に進みける處に、打懸る鐵炮に朱に十二引の差物打さかれ、其身もひしと折敷伏して味方の續くを待つ、小栗治右衛門大音あけ淺見功名せうとて深入りし、ふかくなせそと呼はるを聞き淺見立上り、汝に先をさせんやというて門に付く處に、門を開きて討て出で淺見小栗得たりと鎗を合す、に左右の出し屏より鐵炮雨の降が如し、淺見が從者虎若といふわらは剛の者にて、刀を抽き鎗の穂先をくゞり入りて敵の足を難拂ふ、淺見も痛手を負倒れしを虎若足を取て引提げ持歸りけるに、淺見小栗をも助けよと云ふ、虎若聞て主人の先途の爲にこそ來りたれ他人を何にかせんと云てかい負て退く、淺見差物をたゞき落されたりと覺ゆ取て來らずば生甲斐なしといふ、

虎若逃るとて差物を落さば恥なり鎗を合せて落したるは恥に非ずといひて念なく歸りけり、城兵山本清右衛門依田兵部堤の上に入るを見て、寄手三十騎計馬を並べておめいて駈よせ、ひしと馬より下りて進み行く、齋藤左大夫山本依田前につと出て名乗けるを見ると均しく、御子神典膳辻太郎介わたり合ひ入亂れてたゞかゝ、御子神はたぐひなき早わざにて鎗をかざし堤の中にひらりと飛入る、朝倉藤十郎中山助六戸田半平鎮田市左衛門太田基四郎齋藤久左衛門きそひかゝりて鎗を合す、依田朱塗の物具にて戦ひけるが深手負て倒れしを、御子神辻依田を一刀づゝ切りたりけり、山本も鎗を打折り痛手負ながら依田が屍を肩にかけて引退く、寄手追つむれば城兵切てかゝるを中山鎗を合せ太田弓にてさし詰引つめ射たりしかば門に追込たり、太田後善大夫といふ、ある時士一人太田が許に來りて吾は眞田家の浪人にて候、上田の軍の時相手に成りたる者なり、其時射られし矢を携へ來れりと云ひしかば、太田かゝる事は必わきに聞人のたしかなる有て證にすべしとてよび入れず、近きあたりに笹瀬左大夫とて武功の有りし人をよびよせて彼眞田が士に對面す、其人申けるは上田にて出合たりと、善太夫あやしみて一番に出たるは髭の多くありし大男なりきといへば、かの士よく見届られし、それは眞田荒右衛門と申者なりと答ふ、其次の男はふどりたる男といふ、それは何の左仲と申者なり、さて其次なりといふ、いや、それはしかゞの男なりきといへば、そ

れは無極と申者なり、さて分明に見定められしといふ、さて其次われなりといへば、太田
いかにもしかなりきといへば、其時この矢にて射られきとて矢を取出す、かの者は細野權
之介といふ者なり、其後善大夫申て細野を尾張の組付にしたりとかや。

されども鐵炮をうち出す事霞の飛ぶがごとく、寄手の先陣地にひしと跪きてけり、本多正信
下知して城をば責めず、昌幸と信仍は中の手に出るを、牧野右馬允康成同新次郎忠成はせ向ふ
其間二町計もあらんに眞田父子八十四人の手つゝみを打て高砂の謠をうたふ、榊原にくさやつ
かなといふまゝに眞先に馬を乗出す、其兵二千計後を取切んとすれば、渡邊半藏も鐵炮をうち
かけて進みしかば、松澤五右衛門敵の付入心許なく候、とく城に入らばやと諫めて眞田高砂の
謠を終らずして引入りけり、康政康成おしつゝいて寄せけるを正信かるくしう攻ん事然るべ
からずと制しければ引返す、戸田辻等の七人を上田の七本鎗と世に申なり、戸田は銀の御體
のさし物、辻は白き四半に辻といふ字を墨にて書きたり、信仍箭文を射させ二人の武勇を稱し
けり、此中山はきはめたる馭法の上手なりとかや。

後に依田を太刀付し一二の論あり、辻は依田朱塗の頬當せしといふ、御子神は依田朱塗の
胃着て頬當はなしといふ、牧野右馬允從者を馬工郎にして上田に遣し、様々にして山本に
あひ其時の事を問ふ、山本が云く此論有べき事なり、誰人にもせよ頬當をかけずといふ人

初太刀なり、依田は頬當かけざりき、せはしき場の鎗下なれば、血に染たるを朱ぬりの頬
當と見たるなるべしと云ひしを聞て歸り、牧野に語りしかば御子神一の太刀にきはまりけ
り。

かくて力攻めにせられれば人死傷せん、早く美濃に赴かせ給ふにしかと評定有り、森右近大
夫忠政を上田のおさへとし、台徳院殿かこみをどかせ給ふ、榊原殿せしに眞田遙に見て榊原
が有様吾を侮れり、追かけてくひとめ一軍せんと云ひけるに、眞田が許に年老たる法師武者の
謀ゆゝしき有りけるが、康政ほどの者いかで其謀にはからるべき、古の兵法に歸師勿逐
といふ事の候とてとめて追はざりけり、東照宮榊原は必かり引にすべきものなりと仰られ
しが、後に召て御尋ねあり、榊原承り御大將は城に遠き山にかゝりて引給へと申せしが臣は
城下を眞直に殿仕たりと申せしかば、東照宮汝必しからんと思ひしに果してたがはざりけ
りとぞ仰せられける、石田軍やふれしかば眞田父子を誅せられん處に、信之此度父と引分れて
參候は父を助ん爲に候、たどへ大國を賜ひ候とも何にか仕らん、おはれ信州を以て二人の命に
かへ申度旨を申されけり。

信之井伊直政榊原康政に就て父を助け給はり候へと申す、東照宮聞召し許容ありしと仰せ
られければ、台徳院殿に申に信之父を助けんといふはことほりなり、されども安房守にさへ

ぎられて關ヶ原の軍におくれたり必ず安房守を誅すべしとて御ゆるされの色なかりしかば、伊豆守是を承り又兩人に就て仰せの趣申べき詞なし、かくあらんと存じ父を諫しかども用ひざれば力に及び候はず、只一ツ志す所の候、安房守を誅せられんより先にまづかく申す伊豆守に切腹を仰出され候へかし、御敵の子なれば左あるべきと世の人も存すべし、必父在世の中に伊豆守を誅せられよと云ひも終らぬに、康政心得て房州御救免の事は康政が申上て事よくせん、むかしの義朝には大に異なる豆州かなといひて其旨を申せしかば、東照宮台徳院殿も聞召入られて眞田父子ゆるされしといへり。

信之に信濃十二万石の地を賜はり、昌幸信仍は御赦を蒙り、城を出て紀州高野の麓九度山に引籠る、信賴常に父と兵法を談じて天下の時勢を計りけり、昌幸は六十七歳にて九度山に死す、其後大坂の亂起りしに秀賴信仍を招かれけり、此比世の中さわがしかりければ、紀州は淺野長晟の領地なれば、橋本山の百姓に眞田大坂に行事あらんおしとめよと下知せられしかば用心きびしうしたりけり、信仍橋本山の百姓數百人を九度山にまねき、かり家あまた設けて酒宴してもてなし、上戸下戸をいはずしひたりしほどに酔伏て前後もしらず、其時百姓の乗り來し馬にいろくの物取村百人計打立て紀伊川を涉り、橋本山より木のめ路にかゝり大坂にぞ行きたりける、道々にて百姓はみな九度山にゆきぬ、残りし女わらべども信仍が鎗眉尖刀の鞘をはづ

し、鐵炮に火なはをはさみもし、抑止る者あらば忽討殺すべき体を見てせんかたなし、九度山に酔伏たる者ども夜明て見れば眞田はなし、いかにと問ば昨日しかくの有様にて河内路に赴きたりといふ欺れしと悔めども力及ばず、信仍大坂に至り只一人大野修理治長が家に行き、信仍其比薙髮して傳心月叟といひけり、大野が士信仍とはしらず、何國の修験者ぞと問ふ、信仍大峯より參候といへば、折節修理は居合せずとて番所のかたへに呼入れ置きぬ。

若き士ども刀劍の物語するるとて信仍に向ひ、汝が刀見せられよといへば、山伏の犬おどしに候とて出すを拙て見れば心も詞も及ばれず、さらば脇差を見んとて是を見るに、是も同じ事なればおどろいて、なかぞを見るに脇差は眞宗刀は正宗なり、人々あやしみあへり、其後信仍彼若き士に逢て刀の目さゝはあがりたるやとたはむれしに、みな赤面せしとぞ。

修理歸りて信仍を見て大に悦び、とくも參られ候よと禮儀正しくして書院にまねき入れもてなしぬ、秀賴速水甲斐守時之を使として黄金二百枚賜はり、軍兵の事はやがて下知有るべしとなり、既に東西の軍起るに及びて東照宮いかにもして信仍を降參させばやとて、叔父隱岐守信尹を以て此旨仰せられ、信州にて一万石賜はり候ひなとなり、信仍同心せざれば又信州一國賜るべしと仰せ出されけり、信仍怒て義は人の道なり、秀賴に二心あらん事存じもよらず候、重ねてかゝる使をせられなば存る旨ありと罵りて信尹を追返しけり。

或説に信尹のぶたけに向て天下に天下を添そへて賜たまはるとも秀頼ひでよりに背そむきて不義ふぎは仕らじ、汗あせの出るとて肌はだをぬぎ小姓こしやうにぬぐはせて、やがて首くびを關東かんとうの兩御所りうごしよの前に出すべきとてうち笑わらひぬたりとなり○元禎げんてん按あんずるに昌幸まさゆき徳川家とくがわに服從ふくじゆうし奉りて後のち、關ヶ原せきがはらの亂らんに及および背そむきたる事こと二度に及およべり、此義こゝれぎといふべからざるにや、東照宮とうしょうみや寛仁くわんにんにおはしませし故ゆゑに再犯さいはんの罪つみを宥なだめさせ給へり、信仍のぶより其寛仁くわんにんに何を以て報むかひ候まうや心得こころえられず、豊臣家とよとみけは眞田まんだ數世すうせいの君きみに非あらず、若君わかしきみに不背ふはいの義ぎを論ろんせば、武田家たけだけ亡ほろびて後世のちよをすて、山中やまなかにかくれずはいかにか有あるべき、眞田まんだが論ろんずる處ところの義道ぎみちに叶かなへるとはいふべからず、世の人眞田まんだを以て賞稱しょうじゆうする事こと甚こゝろし、故ゆゑに愚論ぐろんを述のぶるに及およべり。

大阪冬ふゆの陣じんに出で丸まるに有ありて防ぼせぎけるが、大敵たいてきの責せきし時守固ときもりかたかりけり、和平わへいに及および信仍のぶより越前忠直えつぜんちゆうぢくに仕つかへし、原軍人はらぐんじん貞胤さだたねはふりしよしみ有ありて招まねきもてなしけり 原はもと武田家の士也 酒盃數献の後、信仍鼓をうち子の大介おほいけに舞ませて與あしけるが、信仍のぶより云いけるは吾必討死われ必ず討死せん、思おもひの外ほかにながらへて再會さいかいする事ことよ、されど終つひには軍いくさに及およぶべし、落おふれて九度山くどやまにかくれ居ゐしが一方いっぽうの大將たいしやうとなりて候まう豊臣家とよとみけの恩おんたどへんやうなし、おれに見みゆる鹿しかの角つのの立物たてものの背かたは眞田家まんだけに傳つたへたる物ものとて、父ちち安房守あはぶし讓ゆづりり與あへて候まう、重かさねての軍いくさには必かならずさんずる物ものなれば見置みざてたまはり候へ、又命またいのちはをしからねども大介おほいけがおもひ出いもなく、空からしく戰場せんじやうの土つちならんは不便ふびんに候と語りければ、貞胤さだたねも涙なみだを

流ながし軍いくさに臨のりむ者もの誰たれか生いて歸かへらんとおもふべきと答こたへしに、信仍のぶより白河原しろがはら毛けなる馬うまに赤運鏡あかぐんきやうを金かねもてすりたる鞍くらおかせ、庭にわにて乘まはし原はらに見みせて、城しろは壞こぼれたれば天王寺口てんわうじぐちにかけ出て馳はめぐり、下知くだちして思おもふ程ほど軍いくさせばやと存ぞんずれば此馬こゝれうまのかはゆく候と語かたて、又酌酔しやくすいて別わかれけり、果はして和平わへい敗やぶれしかば元和げんわ元年げんわ五月ごがつ大阪おさかにて軍評定ぐんひやうぢやうあり、後藤ごとうは大和口やまとぐちの先陣せんじんにて平野ひらのに陣じんしぬ、五月ごがつ六日むつきの夜よ信仍のぶより毛利もうり豊前守ぶぜんしゆうぜんしゆう勝永かつながと二人ふたり打連うちづらて後藤ごとうが陣じんに行いき、明あけなば國分くわくぶんの山やまを踰こえ三萬さんまんの軍兵ぐんべいを一陣いつじんにして關東かんとうの旗本はたもとに一文字いちもんじにかけ入り、軍神ぐんかみも照覽せうらん候へ兩御所りうごしよの首くびをとるか三人さんにんの首くびを實檢じつけんにそなふるか二の中ふたりのちゆうよとて最期さいごの盃さかづきせり、後藤ごとうは六日むつきの夜よ半はんに打出だうしゆで道明寺口だうめいじぐちにて討死たうしにしけり、毛利もうりは藤井寺ふじいじに陣じんを進すすみ處ところはや後藤ごとうが軍いくさやふれ、關東かんとうの軍兵ぐんべい二三十萬にさんじゆばんもあらん洪水こうすいの溢あふれ来るが如ごとし、眞田まんだを待まちどもいまだ來きらず、眞田まんだは兄あにの伊豆守いぢゆうしゆうと同心どうしんして裏切うらぎりするよど人々ひとびと罵ののしける所に、住吉海道すみよしかいぢやうより赤旗あかきおし立て馬煙うまけふみ立て来るをみれば、金の蠅かみどりの馬印うまじるしにて眞田まんだなれば毛利もうりが陣じんもいさみあへり、信仍のぶより譽田こんだの方にすゝめば、さてはいよく二心ふたごころよど人々ひとびとあやしむ所に、信仍のぶより堤つゐの上うへにあがり鐵炮てつぱうを進すすめて伊達政宗だてまさむねの先陣せんじん片倉小十郎かむらこじちらうに向て討たてかゝる、信仍のぶより眞先まことさきに進すすめた、かひしが片倉かむらが陣敗じんぱい北きたす、逃にるを追おて敵たてあまた討取たうとりたり、片倉かむら金の鐘かねの差物さしものにて魔まをとりもり返かへす、政宗まさむねの旗本はたもとの騎馬きばの鐵炮てつぱうもすゝみ來きる、奥州おくしゆうは聞きゆる馬多うまたき所ところなればよい馬うまを撰えらびて若わき士しに乗のせ、馬上うまじゆうより鐵炮てつぱうを打うつらねさせ敵たてひるむ所ところを馬うまの首くびを

揃へて忽破り、追かけみだして追崩す軍畧なり、未だ其間相去る事遠かりしかば信仍いざ疲れたるに息をつげ背を脱と下知しければ、みな背をぬいで休み居たり、敵や、近付しかば信仍さらば背を着よといふほどこそあれ、背の緒をしめ鎗の穂先をそろへて敵に向ふ、政宗の鐵炮箕手なりに成てかゝり來り、雨の降如く打かけたり、信仍眞丸に成りてとてものがれぬ所よ一足も引くなもの共と下知し、ひさくと跪て聲々に念佛をとなへ力を合せてこたへたるに、信仍大音あげ一寸も引くな爰に死ねやと下知して鎗を取てかゝれば、士卒一同に立上りおめいて鎗を打入れたれば、政宗の軍兵大に破れ一支もなく崩れけり、此を世に眞田が天王寺口の軍とて、大軍の騎馬鐵炮に打勝たる有様をつたへて稱しけり、信仍士卒を立固めしづくと毛利が陣に來る、大介今年十六歳組討して取たる首を鞍の四方手に付けて手負たるが、流るゝ血をもぬぐはず馳來るを毛利見て、おはれ父の子なりと感じけり、信仍毛利が手を取り涙を落し、時刻遅く後藤が討死せし故、謀空しく成りぬるも豊臣家の運盡ぬる所なりといへば、毛利今日大敵に打勝れし武勇の有様古の名將にもまさりたりとぞ云ひける、かゝる所に秀頼の黃母衣の使番乘來り、とく城中に引こもり候へど下知せられしに、信仍猶赤旗おし立て、今一軍せんと背の緒をしめ直し、勇氣殊にいかめしく見えたりけり、水野日向守勝成此を見ていざ軍せんとして政宗にすゝめらるに同心の色なし、越後少將忠輝こゝに陣を進められしが、此も眞田が陣にか

ゝらんと背を着給ふ、政宗の士大將片倉小十郎忠輝の前に來り、日暮に近く軍危からんといへば、はやりをの士どもいざかゝりて討とらん、弱敵をあますまじといふに片倉それはひが事に候、日本國を敵にして軍する大阪の者共を弱敵といふべきや、片倉が組の士三十人の中二十九人は討死したり、是見られよとてつばまで血に染たる刀のまがりたるを見せてけり、越後の士大將花井主水もいかいすべきと軍奉行玉虫對馬に問ふ、玉虫敵は二の身の勝を心がけ候、かゝりて軍に利候まじといひてためらひけり。

忠輝大阪をつくべきやと評定決せず、篠瀬左太夫足輕をかけあしらひてくひとむべし、軍をさせられよとすゝむ、玉虫僅なる足輕を以ていかにして敵の大軍をくひとむべきといへば、篠瀬ふまへのなき事は申さじ、六尺の大男も足のうらに踏ぬゝすれば行歩ひまどるものなり、人数少しとてつけられぬ事やあるといふ、玉虫地の利しらぬ所にて日もくられたり、ゆきがりの合戦は危き物なりと押といひ、小野能登守は判官殿三草山を越ての合戦はしらぬ國の夜軍ならずやといふ、皆川老甫小野能登守花井主水篠瀬左太夫は駆らんといへども玉虫對馬林平之丞はおし留て論決せざりし中に大阪方しづくと引取りしども入り。

眞田が陣には手々に扇をあけて招き、何とて軍し給はぬぞと聲々に呼はりけり、猶かゝらざり

しかば信仍しづかに兵ををさめ、關東武者百萬もあれをのこは一人もなしと大音に罵りて引取りければ、東照宮玉虫に林道春に吳子が六國の風を説たる章を讀しめられ玉虫を逐出されけり、此玉虫は甲斐の武田家にて物しなる故軍奉行たりしにいかなる故ならんおくれたりき、あくる七日の軍に信仍兵を出せしが、秀頼の出馬をすゝめんため子の大介を城にかへしけり、大介今年十六に及ぶまで片時もかたへを離れ候はず、たゞ今討死のきはに逃たりと人のいはんも口惜く候、去年母上にわかれ奉りし後、文のたよりにながらへて相見んはねがはしけれども合戦の場にて必父うへと同じ枕に討死せよ、苟にも名こそをしけれと誠められしといひければ、信仍城中へ歸れといふも秀頼公の御ためなり、父子とてもものがるべきや、やがて冥途に逢べきをしばしの別れを惜むこそ口惜けれ、とくくまぬれとて取つきたる手を引放せば、大介名残をしげに父を見てさらば冥途にてこそとて引返す、信仍大介を見おくりて落る涙をおさへ、昨日譽田にて痛手負しがよわる体の見えざるはよも最後に人に笑はれじ心安しといひけるとかや、かくて大阪の軍敗れしかば信仍討死しけるを、首をば越前忠直の士西尾仁左衛門取りたりしに誰ともしらす真田信尹馬に乗て打通り、此を見て其冑は見知たるぞ真田左衛門佐なるべし、口をひらいて見よ向齒二枚闕て有べきといひしに信尹が詞のごとし、さてこそ左衛門佐とはしりてけれ、彼冑は原に物語して見せたるなり、弓箭とる身はおもひ出の詞かねて云ひお

くべき事にこそといひあへり、大介は城中に入り秀頼に従ひて蘆田曲輪の矢倉にこもりて父の事を尋ねけるに討死せしと聞て、それより物もいはず、母のかたみに賜はりける水晶の珠數を首にかけ秀頼の自害を待居しかば、速水甲斐守大介に向ひて、組討の武勇たくまじきふるまひして痛手負れしと聞ゆ、和平にて君も城を出させ給ふべし、真田河内守信吉の方へ人をそへて送るべしといへどもちつとも動かさず、寄手矢倉を取巻し時、速水戸口に立出て大介が有様をかりたり、武勇の血脈おそろしき者なりと云しとなり、終に大介も矢倉の中に死して父子同じく豊臣家の爲に亡びたり

西村孫之進武功の事

大阪夏陣に真田信仍と伊達家と軍する時、伊達家の騎馬鐵砲をうち立たれば、玉の飛ぶこと鐵の降るが如く、信仍が軍兵をも折しきて鎗を敵の方へさし向けきたへ居たるに、西村孫之進といふ者うたれたる味方の屍二ツを重ねて盾として居たるに、玉一ツ来て二ツの屍をうち通し孫之進が肩に傷きたれどもうす手なり、鎗を握りたる左のこぶしの大指こそばゆくて氣味悪く覺え、残る指四本にて大指をねぎり込めてきたへたり、全身の危き事はわすれて大指の先の斯の如きは怯たる故ならんと思ひて左右をみるに皆しかしたり、又かたへに並び折しきたる者に玉の

中る音甚だ強くひびきて、我身に中りたるかとおぼえしと後に人にかたりけるとも、此時孫之進伊達家の秋部甚平といふ者を討取りけれども其姓名をしらず、落城の後孫之進いまだいづれの家にも仕へずして江戸におもひきりたりしが、相知れる者の方へゆきても語する時客來れり、主人西村が事をかたりて大阪にて事に逢たる物なりといふ、かの客は伊達家の士海道林左衛門といふ者なるが誰の陣にかおはせしと問ふ、西村眞田左衛門佐が許に有りしと答ふ、客の云くさては五月六日の戦にての事なるべし具に承り候はゞやと問ふ、西村聞てさせる事にては候はねども尋ねに付て申べし、伊達家と始の一戦終り後の軍殊の外はげしく、伊達家の陣を七八町計も有らん追たてたる處に、三十人計取てかへし折しかれたり、某ども三人鎧を入れ候ひき某が鎧の相手の間におし隔りてかけ入候人を、初鎧にわたかみの外れを突損じ二の鎧に草摺の間を突てはね倒し、首をとらんとせしに歴々の人にてや候ひけん、從者と覺しき者三十三人も取巻候て、手に一幾刀どもなくさらされ候、皆具足の上にて手を負す候ひしが、鎧にて腰骨をつかれ倒れて絶入りそれよりはおぼえず候、後に承り候へば眞田が惣軍とつと押かゝり候故、われらが首をとられず候由、彼突伏たる鎧の相手は定めてたすけのがれたるなるべしと存なり、其後少し人心地つき候に馬どり彌右衛門と申者これはどの手にて弱るといふ事やあると云て跡の方へ歸る音かすかに耳に入りぬ、見捨て逃たるかと思ひしに又來て腰の手ぬぐひを水に

ひたし持來り口にしぼり入れたりしゆゑ彌氣付たるを、彌右衛門肩にかけて城中に歸り翌日も其疵故働く事ならず、戰場に出ずして思はざるに存命候といへば、彼客聞て驚き初の鎧を合せ候は士大將秋部刑部と申者なり、其間にかけて入たるは刑部が子甚平といふ者なり、御物がたりにて疑もなく候、甚平をば陣屋に連歸りたれども死しぬ、察せられ候通一陣の大將にて候、其日武功の證人には我等立べきにて候、其しるしをまゐらせんとて右の次第を書花押を加へて西村にあたへ、さて豊田以來の參會珍らしき縁なりとて互に物がたりして別れけり、西村後に池田の御家芳烈公光政朝臣に仕へたり。

仙次郎兵衛伊豫國松前城を守る事

仙次郎兵衛十成は加藤嘉明の左の先手の士大將なり、からしまの船軍に十成敵船に乗移る時、敵劍にて口中へ突入れたれども少しもひるまず、猶飛込けるを棒にて背の上を強く打れ、海中へ落入れたれども水に長じたれば泳ぎあがるを、從者熊谷覺兵衛薙刀をさし出すに取付き直に敵船に乗り入て船中の者どもを撫切にしたりけり、嘉明船あまた乗取れし其一ツなり。關ヶ原の時嘉明は伊豫の松前を出で關東に打向はれしに、十成に堅固に守れと下知して松前に留守居たり、毛利輝元の兵村上掃部能島内匠會根兵庫宗兵衛善右衛門等松前をとらんと支度しけり、能島村上

は河野の一族なる故招かざるに人々従ひなん、豫州を攻めどらん事、掌の中に有りて評議し、豫州の人平岡善兵衛といへる者を嚮導とし、三千餘をひきゐて豫州に打向ひ、使を以てとく城を明渡されよ、遅くは踏潰さんと松前へ云やりけり、城代加藤内記佃と相謀り、先敵をたばかるべしとて子細なく城をわけ渡すべし、然れども妻子をかたつくる間を待れ候へと返答す、左も有りなんと侮りて三津浦に上り、民家に陣して待居たり、大洲の城に藤堂高虎有りて加勢をさし向けられしかば、松前城中の人々よろこびあへり、十成獨同心せず、今敵大軍にて押寄せたりといへども、謀を設け一戦して義を守るは弓箭取者の法なり、城を枕にして討死すべし、勝利を得ば生前の面目なり、たとへ勝たりとも人の救によりて運をひらきたりといはれん事口惜かるべしとて禮義を正くして辭したりけり。此時國中一揆起り三津浦に酒肴をおくるよしを十成聞て、双方の勝負を窺て見合せ居たる黒田大溝永田村の百姓小ざかしき者四五人呼寄せ妻子を質に取り金銀をあたへ、よく云ふくめ酒肴をもたせ三津浦へ遣し、嘉明近年松前を領し仕置宜しからず百姓ども困めり、河野一族の人々國に入給はん事百姓の安堵なりと悦祝ひ申すなり、城中にゆかりの者候て具に承り候は、嘉明關東へ出陣軍兵を拂て連れられしゆゑ、今残りといまる者ども多からず、大かた老衰病者にて一人も軍すべきものなし、佃十成も大病なり、鉛薬も乏く落支度の外更になし、はや逃去なんと口々に云はせられたれば、安藝の士大將さも有る

べしとて彌おこたりけり、彼百姓一人立歸て其有様を告げ知らせければ、さらば今夜風雨の紛れに一夜討すべしとて、嘉明の貯へおかれし白布を胸肩衣に裁縫ひて配りわたへ、十成は背に松の字を墨にて書てしるしとし、合詞を定め首はとるべからず、貝の音を聞かば勝負を止て引とれと約束を定め、慶長五年五月十八日戌の刻に打立けり、忍の者歸りて今夜は村上が陣所に集りて酒盛の半なり、巒山の濱邊に張番の足輕松前のおさへに置たりと告る、十成打破りて通らんは安けれども、途中に滞りて三津浦へ聞えなば謀いたづらに成るべしとて道を替へ、江戸山を越て子の刻計に三津浦におし寄せ、所々の民家に火をかけて切て入りしかば、大にさわぎて物音も聞わかず、十成薙刀を提げ貝先に進みけるに、掃部敵寄たりとて何程の事か有るべきとてかけ出るを、夜討の大將佃次郎兵衛なりと名乗て掃部をつき伏せ、敵あまた切りはらひ、貝を吹立て軍兵をまとひ、しづくと引取りたり、掃部を始め内匠兵庫も討れければ、引退て久米の郷如來寺に遁こもる、翌十九日十成又おし寄せければ、如來寺にも支へかね道後山に引退く、十成も深手数多負て日は暮ぬ、松前に引どりぬ、道後山の安藝の人に近郷の百姓を相從へ刈田焼ばたらさして松前の城を攻んとすると聞えければ、九月廿三日加藤内記道後村へ押寄せて相戦ふ、十成は久米の戦に手負て出ざりしかど、重ねて安藝の加勢來らば始終いかでか勝べき、今急に追拂はずば後日の事覺束なし、手紙を痛みて城中に死んより、敵に向ひ快

よく討死せんとて、城下の町人近郷の百姓二百人計あつめ具足を着せ、妻子を質にとりて昏旗を指せ、十成引具して道後村にかけ向へば、味方は是に力を得、宍戸平岡に従ひたる一揆ちりくになりければ、終に風早の浦より船に乗り藝州に引退きけり。關ヶ原の後嘉明松前に歸りて戦功を撰るゝに、夜討に首とらざりしかば十成村上を討取たるは明かなれども其功をいはず、生捕の者にたづぬるに村上が陣へ先だちて切込たる人の白き肩衣の脊に松の字を大きに書たるが薙刀にて村上を突伏しを間近く見たりといひければ、嘉明十成が功によりて松前をどられず、殊に安藝の物主三人を討取り大洲の加勢を辭せし事勇といひ忠といひすぐれたりとて、太閤より賜ひたる物具に感状を添て浮穴郡久萬山の庄六千石を興へられたり、慶長十八年嘉明温泉郡勝山に城を築き松山と名付け、松山の北に別に一廓をかまへ、五つ矢倉をあげて十成を置れぬ、元和元年大坂の軍にも十成嘉明の嫡男式部少輔明成に従ひて淀川を渡り城兵を討取りけり、同年十成關東に召され葵の御紋の時服を下されぬ、寛永四年嘉明奥州會津に移りて十成に一萬石をあたへられけり、寛永十一年十成病おもく子共どもを集め、吾若かりしより戰場に出る事度々にて、疵を蒙る事十三ヶ所、就中豫州久米の合戦に鐵炮頭の右にあたりて猶其鉛皮の中にあたり、然れども運蓋さざれば死せずしてかく老年に及んで病の爲に死せんと覺ゆるなり、是を以て思ふに弓箭取身は少しもきたなびれたる志あるべからず、かたみに是を殘さん

とて刺刀をとりて皮を破り、鉛丸をとり出して前に置く、三月二日八十二歳にて端座して終れりとぞ。

大久保忠佐に三枚橋の城賜ひし事

關ヶ原の亂治りて後、大久保治右衛門忠佐に二萬石賜ひて三枚橋の城主たりしに、渡邊忠右衛門御近習の人に向ひ、治右衛門を武功の者と思召しけるが、此忠右衛門に逢ては逃たりと申けるを聞き召し治右衛門を召され、先年三河にて一向宗一揆の時忠右衛門兄弟弓を持其餘あまた鐵炮を持たる者七人に汝一人立向ひて、相手がけの勝負ならば手なみの程を知らすべきに多勢の飛道具に吾一人かゝりて犬死すべきにわらずと大音に詞をかけて引退さたると聞きたり、然るに渡邊めがごとく無理をいふ男にはとりわはずすて置くにしかず、必此後聞かぬ体にてあれどぞ仰せられける。

細川幽齋古歌を書て忠興を諫られし事

細川忠興諸事嚴正に過ると父の幽齋に告る者ありければ、忠興の長臣を呼て古歌二首書てあたへらる。

あふ坂の關のわらしの寒けれどゆくへしらねはわひつゝぬる
此歌のこゝろを察せよ、

まこも草のくみわたる澤邊にはつなかぬ駒もはなれさりけり
此歌のこゝろをよく思慮せられよと忠興にいへと教訓せられけり。

關のわらしの歌は古今集よみ人しらす、まこも草の歌は詞花集俊惠法師のうたなり。

本多忠勝功名を論ぜられし事

或人本多忠勝に思慮ある人功名をとげ候か、思慮なき人功名をとげ候かと問ふ。思慮なき人も思慮ある人も功名するなり、思慮ある人の功名は士卒を下知し、大なる功名をとぐる物なり、思慮なき人は第一本の功名にて、大なる事はなしと答へられけり。

井伊家の附人連署して直政を諫めし事

井伊直政壯年銳氣甚しかりしかば、東照宮よりつけ置れし「諸本脱」以下連署して諫書をさしげたりし、其中に人には必向ふと中事を思ひ設けたるが然るべく候、臣等が前の主君の事を申も如何なれども、信玄はわかさ時より一として心より善事はなき人にて候へども常に越後

の謙信を以て向ふとすとして謙信にまさるべきとつとめはげまれ候ひき、されば信玄一生の間手をおろしたる大事の合戦五度に及び候へども大なる敗北はせられず候、殿にも本多中務太輔忠勝を以て向ふとすとして勉めてをどらじとはげみ給ひ候へかし、いにしへより進ず退かざる良將と中は中書相かなひて覺えたりと書きたりけり。

堀秀政を名人太郎といひし事

堀久太郎秀政後左衛門督といふ、士より下部にいたるまでつかふ、上に下の情をつくすを第一に専ら心がけられたり、かゝれば下に恨る者なし、奉行の従者と荷を担者と輕重を争ふを聞て、其荷物を自らふりかたげ往來し、我方は彼者よりまさされり、然れども一里ばかり負たれば勞れたり、持事あたははじといふは尤なりと決斷せらる、或時武者押にはたさし後れたりけるを尤めけるが、秀政自ら旗を負て試み、さては吾乗たる馬の肝よき故ならんとて、肝よき馬に乗りたれば旗さし後れざりき、世に名人太郎といひけるはかく下をつかふ心を用ひられし故にこそと人いひあへりけり、小田原陣中に卒せらる年三十八なりとかや。

大久保忠隣忠直の事

大久保相模守忠隣は忠貞の人なり、關ヶ原の時台徳院殿木曾路より攻めのぼらせ給ひしに、石田敗北の後御着陣ありしかば、東照宮御對面ましますと、忠隣近習の士を以て申たき事の候と申す、中々口にもいひ出されずといふを聞て、さらば直に申さんとて座を立ちけるを、さらば先申て見んとてかくと申せば、色を變じて内に入らせ給ひしがや、有りて相撲は歸りたるかと仰あり、猶待居て退んけしきは候はずと申せば、あくまで剛直の者なり、よも空しくは歸らじとて召されけり、忠隣御前に参りて先何とも言出さで涙を流しければ、それはいかにと仰せ有る忠隣此度上田を攻候て道に逗留の候ひき、上田を攻候は忠隣と正信がしはぎに候、二人の中一人は召出され罪を糺させ給ふべきにて候、さはなくて不和に及ばせ給ふ事ひが事にてこそ候へ、過し年大軍にて攻めたりし時も、眞田が智勇に挫れ候ひき、上田固くとも遂に攻落すべきをすて、のぼらせ候ひしに、關ヶ原にて石田今しばし支へなばなぞ戦功のなかるべきに、石田もろく敗れて手を空しくなし給ひぬ、君萬歳の後に日本を治め給ふべき御嗣に人の侮り奉るべき事をなし給ふは怒にひかれて忘れさせ給ふにや、とく嗣君に自害をす、め奉るべしと申されしに、汝が言無禮なりとて立せ給ふ所をおしとめ、忠隣が申處理ならば聞し召し入れられよ、正しからずば首を刎られ候へと憚る氣色なく申せしかば、聞し召し入れられ汝がいふ所尤なりとてやがて御對面おはしましぬ。忠隣は相州小田原の城を賜はりたりしが、慶長十八年切

支丹を改る仰を蒙りて京都に赴きたりしに謀反の志あるよし訴へし者あり、本多正信忠隣が悪逆の志あるよし申けると世に申せしが、忠隣をば井伊直孝の領國佐和山にとちこめ置かれけり、板倉勝重仰を承て忠隣が旅宿に行く、折節忠隣基を圍み居たるに、かたへの人殿を流罪の爲に板倉來れるよし云ひけれども、驚く体もなく勝重に逢ひ仰を承り更に恨の色もなし、從者大に怒り讒言により流罪にせられ候事口惜き事なり、切死せんといひしかば京都のさわぎ大かたならず、二條の城にて門々を守りけり、忠隣武具を繩にてからげ勝重にさづけしかば京都のさわぎしづまりぬ、夫より佐和山に行かれしかば直孝よくいたはり申されしが、ある時申開くべき旨候へし直孝承りて達し申さばやと語られしに、忠隣理を正して申さんには聞し召し明らかめられん事必定なり、さらば讒言を聞し召し無罪の者を流されし過ちを人しらば君の非をあぐるなり此忠隣が志にあらず、われかく朽果るともつゆちりばかりも惜からずといはれしかば、直孝感服せられけり、忠隣つれづれのあまりに忠臣記二卷を作られけるとぞ。

天野康景廉潔高國寺の城を去られし事

天野三郎兵衛康景は、天野遠景が苗裔にて、百貫の地を領し來りしを、東照宮瀧坂におかせ給ひ、遠江榛原郡を切取に仰出されし大剛の人なり、後駿河の高國寺三萬石の地を賜る、駿府の

城經營の時竹をからせ積置き、足輕に辱らせしに、御領地の百姓竹を盗みしを見咎めて斬殺す、残る者ども逃ちりて代官井戸某に訴へしかば、井戸百姓を殺したる解死人を出せと天野にいふ、天野盜を殺す事罪にあらず、守る者罪あらば先天野罪に行はるべしと云ひければ井戸訴へけり、東照宮足輕を誅せよと仰出されしに、天野始の如く申せしを聞し召し、天野は不道のしわざする者にあらず、仔細あらんと仰せられけるに、本多上野介正純天野に逢て仰せをいなむは臣たる者の道にあらず、臣として君命を承らざる事やあると云ひけるに、天野さては臣たらずは苦しうも候はじといふまゝに三萬石の祿を辭して、慶長十二年三月廿九日高國寺を去て行方しらす成りにけり、程經て大久保忠隣尋ね出し、年ごろ親しかりしかば小田原の入口といふ所に隠し置かれけり、罪なき人を殺すに忍びず、三萬石の祿をすて、隠れし志を人々稱しあへり。

井上正就駿府へ御使の事

台徳院殿太田某に五百石の祿を賜はりし時、太田折紙を擲かへし退出しけるを死罪と思召しけるに、井上主計頭正就駿府に申て後罪を定められ候へと申す、さらばとて井上駿府に参りて、東照宮にかくと申を聞し召し、泰平久しかるべき基なり、太田は誠に無禮なり、凡賞罰中らざ

れば下の恨るは常の事にて、太田も無禮とは知りたらん己が身をすて、諫る心なるべし、臣下の直言して諫る者怒に逢て刑罰せられ、家を亡し、大軍の中かけ入る者は多くは身を全うして功名を立る故に昔より諫臣を忠の第一とす、然るに今太田にあたふる祿賞に中らざるやと汝を以て問はる、事政務に心を盡さる、なれば泰平の基と謂ふにてこそあれ、汝にもものがたりせん事あり、われ三河にて池の鯉を鈴木久三郎が取て烹て喰ひ、信長より賜ひし酒をもわれにあたへたりとておもふさまに飲みたりき、吾怒て眉尖刀を提げ鈴木を呼しに、鈴木肌をぬぎ大音をあげて魚に人を替る不道にて天下に旗揚んとは思ひもよらずと罵りし時、予鈴木が詞に屈伏して内に入り、つくづく思ふに走りの者池にて鳥を取りし罪にてとぢめ置きしを諫ん爲ならんと心付て、走りの者を赦し鈴木を近付け汝が志返す、悦しきといひしかば、鈴木涙を流し、密に申べき事を今戦國の時なれば手あなるがよきと存候て無禮の詞を申せしに、かゝる仰を承りて辱の身にあまり候といひしなり、今太田にも三千石の祿をあたへられよとて井上をといめ給ひ、御刀を賜はりしかば江戸に歸りてかくと申す、太田にも祿を増賜はりしかば涙を流して喜びけり、台徳院殿井上には汝が詞によりて孝行を知り、賞罰の道をわきまへたりと仰せ有りて左文字の刀を賜りけり。

東照宮諫言を容れ給ひし事

東照宮濱松におはしませし比、ある夜本多正信御前に有りしに、誰人にてか、ありけん 姓名を
 懐より書を取り出し諫め奉るべしとかねてより存る事の候て書候ものなりと申せば、大によろ
 こばせ給ひ、夫よめと仰せ有りければ披きてよみけるに、一條よみ終る度毎にうなづかせ給ひ
 尤なりと仰せられ、よみ終りければ汝が志感するに詞なし、これより後も心置なく告よ、返
 すくも神妙なりとくり返し仰せければ、忝きよし申て退出す、正信居残りて只今諫め申せし
 事用ふべき事に候はずと申す、東照宮大にけしきをかはらせ給ひ、いやとよ己が過はしらすし
 て過るものなり、國を領し人を治る身には過を告げ知らせ諫る者は鮮くて、唯諂ひて主君のい
 ふ事道にたがひてもさは候はじと詞を返す人はなきぞかし、諫をふせぎし人の國をうしなひ身
 を亡し、後世の笑ひ草となりしたためし多し、只今われを諫めし者日比心を盡し見及ぶ様に付き
 諫んと思ひて書しるし、時もあらば見せんと思ひ居たりし志何にたとへんやうなし、其の用ふ
 べきと用ふべからぬとにはよらざるなり、唯彼が忠心を愛するなりとぞ仰せける。又或夜の御
 物語に凡主君を諫る者の志軍に先がけするよりも大に踰まされり、其故は戦に臨みて一番に進
 み出るは素より身をすてゝの事なれども、必しも討死せず、又討れたりとても後の世に名を殘

し死後のほまれとなるぞかし、幸に功名をどぐれば恩賞にて家富子孫榮るなり、されば得有り
 て失なき忠なり、諫は然らず、主君不道にて善をにくむにすゝみ出て直言する者十に九つは刑
 罰にあひ、妻子をほろぼし果る様に成行くぞかし、失ありて得なき忠なり、武功は名利の爲に
 もなるべし、諫言は聊も身の爲をおもふ心あらば、いかで主君の前にて直言すべき、唯人に
 君たるもの、賞すべきは諫臣なりとぞ仰せありける。

三河國箭矧の橋を修造せられし事

箭矧の橋水に壊れしを造れと仰せられしに、兼てより船渡にすべしといふ人の有りけるが、幸
 にて候船渡よかりなんと申を、東照宮汝等末を知て本にくらし、費をいとふは民の爲なり、往
 來の旅人を苦めんは吾志にあらず、又要害も其もとを論ずれば唯國民の和と不和とにあり、險
 をたのみて敵をふせぐは道を知ざるなりとて橋をまたかけさせ給ひけり。

山名禪高徹衣を着せられし事

いづれの時の事にや、山名豊國入道禪高古き羽織の所々徹れたるを着て、東照宮の御前に參ら
 れしに、それはいかにと仰せ有りければ萬松院殿より賜はりたる物にて候と申を聞し召し、舊

を忘れず本に背かぬ者かなど御感有りけり。

東照宮禮を正し給ひし事

東照宮大度勇畧におはしませし事は誠に申も恩なり、中にも禮儀を正させ給ひしかば、今川義元討死の桶狭間を御鷹狩にて過させ給ふ時、必御馬より下させ給ふ、これは御幼時義元のよしみを思召し出されての事なりけり、上杉景勝に途中にて行達せ給ふ時、輿より下りさせ給ふ、是も父謙信のよしみを思召しての御事なり。

駿府城中へ水を引かんごせられし時の事

駿府の城中の池に阿部川の水を引入れよと仰せ有りしに、水筋に小寺有りければ、外の處に引移さんと申けるを、東照宮寺を移す事と仰せ、水を入れるにも及ばずと仰せられけり、此ほどの寺移し候はんにか計の費の候べきといへば、それは大なる僻事なり、田の爲に水を引んには左あるべし、吾庭の水はなぐさみなり、夫に人を勞する事やある、無益の事に地を捨るは敵に取られたるに同じ、百姓の苦みなりと仰せられぬ。

東照宮御中指の事

東照宮御指の中節たことなり、年老させ給ひては屈伸しがたくおはす、是はわかき御時より數度の戦ひに初の程は塵にて下知せさせ給へども、事急なるに及てはかゝれくとして御拳にて鞍の前輪をたゝかせ給ふに、血流れて出るかくのごとき事、幾度ともなき故となり。

金の七本骨の扇の御馬印の事

東照宮金の七本骨の扇に日丸付けたる馬印は參河の設樂郡牛窪の牧野半右衛門がしるしなりしを、永祿六年に乞得させられて馬驗となし給ふ、夫より前の御印しは厭離穢土欣求淨土の八字を書たるにて大樹寺の登譽が筆なり、そのしるし明暦丁酉の火災にかゝれりといへり、然れども扇の御しるしは其前よりの事にや、天文十四年、公矢矧川にて織田家と軍有し時利なくて危かりしに本多吉右衛門忠豊と岡崎に入せ給へ、御馬驗を賜はり討死すべしと申せども許されず、扇の御馬しるしを以て清田騨にて討死しける其ひまに危きを遁れ給へり、御しるしは忠豊が嫡子平八郎忠高が家に相傳へ忠高も又戦死しける、其子忠勝が時に至りて永祿二年、東照宮乞返させ給ひたりと云へり。

加藤忠廣物語附飯田覺兵衛が事

加藤肥後守忠廣或夜物語に、吾は大力ありかしと思ふなり、重き甲二領重ねて軍に出れば、恐るゝことあらじと云はれしを飯田覺兵衛つくくくと聞き、先殿物具一領にて數十度の戦に終に手負せ候はず、朝鮮に攻入りて鬼將軍と異國の人も惶れ候、死生存亡は天命にて人力の及ぶべきにあらざといへども能戦へば生悪く戦へば死ると申事も候、國中の民を撫育し諸士よくなつき従ふ時は席上にて勝敗の理を論じ軍兵を下知して進退自然に整ひ候へば、三軍の着たる物具は皆大將の一身に重ね着たると同じ事に候、たれか鋒を争はん臣は力を好ませ給ふ事然るべしとも存候はずと申て退出しける時、先殿にはいかでかくまでおどり給へるとて聲をあげて泣けるとぞ。此覺兵衛は清正の時武功の大將なり、初は角といふ字なりしに太閤覺の字に書替させられしとぞ、覺兵衛云ひけるは我一生主計頭にたまされたり、初て軍に出で功名しける時、朋輩多く鐵砲に中りて死しけり、危き事よはや是までにて武士の仕へはすまじきとおもひたるに、歸るやいなや清正時をすかさず今日の 働神妙いはんかたなしとて刀を賜りき、斯の如く毎度其場を去ては後悔すれども主計頭其時をうつさず陣羽織或は感狀をあたへ、人々もみな羨みてはめたてたりしゆゑ、其にひかれてやむ事を得ず塵を取り士大將といはれしは、主計頭に

たまされて本意を失ひたるなりと、忠廣没落の後京に引籠り再仕を求めずしてありける時語りけるとかや。

前田利常戦死の士を吊はれし事

前田利常大坂の軍に功有て加賀に歸り、討死したる士の爲にとて報恩寺といふ一字を建立し、戦死の人の追福にせられ、自ら彼寺に詣し時討死の士の親族を供に連られける、自ら香を焼涙に沈みて深く悲れしを見る人聞く人、此殿の爲に死ん事露塵計も惜からじとて一同に哭泣けるとぞ。

黒田如水遺言の事

慶長十九年黒田孝隆入道如水病重く成て子の甲斐守をよび、汝は親にまされる事有り我もまた汝にまされる事二つあり、語て聞かせん、今我死ば我士はいふにや及ぶ、汝が士大將より士に至るまで悲みなげくべし、汝死して我ながらへたらば誠に大なるさかしまことなれども、如水おはしますとて力をおとす士有るべからず、是人のなづき従ひて吾に服する事汝に勝る其一つなり、次に我は無双の博奕の上手なり、關ヶ原にて石田今しばらく支へたらば、筑紫より攻登

り下部のいふ勝相撲に入りて日本を掌の中に握んと思ひたりき、其時は子なる汝をもすて、一ばくちうたんどおもひしぞかし、又紫の袂に包みたる草履片足に木履片足取出し軍は萬死に入て一生にあふ習ひなり、十全を思慮しては叶ふまじ、たとへば草履木履をはきたるごとく、二ツものかけの軍をする心得せられよ、汝は才智有りて先の事を豫め料る故に大功はゆめゆめ叶ふまじ、借めんづと云ふ物は飯を盛ものよ、上天子より下百姓に至るまで、一日として食物なくては世にながらふる者はなき事なり、國を富し士卒を強うするの根本一大事此飯入にあり必わするべからず、かゝる故に此めんづをかたみに參らすといはれけり。

本田正信加藤嘉明を諭されし事

加藤嘉明關ヶ原の戦ひに大功有りしかば、五十萬石を賜はるべき處に本多正信其事をおしどいめたりと嘉明傳へさして本多を恨みられけるに、正信行れしかば願ふ處とて對面せらる、正信の曰く大國を賜ふべきとなりしを、我然るべからざるよしを申止めて候ひき、是忠ある子細の候、其仔細は御身は武勇智謀たぐひ稀なる人にて、又豊臣家の恩深し、人の疑有るべし、功成名遂て身退くと申事の候、今領國の少きに聊の恨なくおはさんに恩遇子孫に到らん、若大國を領し給はゞ必人の後にかゝむ人にあらずと世疑ひおそれて禍あるべしと存る所なり、去れ

とも恨られんには力なしと云ひたりしかば嘉明詞なくて止けり。

安藤直次先見并に本多正信遺言の事

安藤帶刀直次物がたりの時、本多上野介正純は家亡ふべきなりと云ひしに、程なく本多に祿を賜はりけり、人々直次にしかくいはれしにいかにと問ふ、直次聞て後を見られよと云ふ、又下野の宇都宮二十萬石を賜はる、人々又直次に我等承り候所へくるしうも候はず再三かゝる事ないはれそといふ、直次打笑ひ正純家亡ん事近きにありといふ、やがて正純國を召放たれしかば人々又直次に神智有るが如くに候、いかなる故にやと問ふ、直次さればとよ、台徳院殿關ヶ原の軍の時木曾路にて遲留の有りしを正純是みな父正信が仕わざに候、死罪に行はれなば嗣君の過なき事を人存すべきよし申せしを、台徳院殿我爲にかくまで云つると仰られし由、正純聞て己が功と思へり、父を死罪にといへる三千の刑不孝にまさる事や候、此家の亡ふべき理なり、忠を君にいたすは誇るべき事にあらず、正純の亡ぶるいと遅かりきとぞいはれける。

正信に三萬石の祿地まし賜はりし時、臣はもと鷹師にて候をかやうに取立られ候へば只今の祿分に過たり、必天の冥助に盡申べしと固辭せしが、其後子の上野介に、我なからん後

汝に祿をまし給はりなば三萬石は我に賜はりたれば辭すべからず、それより増賜はりなば必固辭すべし祿の身に過るは禍なりと遺言せられしが、正純父のをしへに背き終に國亡びたりといへり。

台徳院殿御行狀の事

台徳院殿は殊に禮義正しくおはしまし、苟にも疾言おはしまさず、事なき時は泥塑人のごとくになんと人申せしが、極めて下民に御心を盡させ給ひ、孝道深くおはしましけり、又信を失ひては天下は保ちがたしと常に仰せられ、御鷹狩に出給ふ時も時を定められ、御膳の半にも辰の鼓をうては箸を捨て出給ふ、近習の人奉膳終らざれば辰の大鼓をうたず、井伊直孝是を聞き近習の人々に向ひ、是君を愛すると思へるは大なるひが事にてこそあれ、君正しき道を好みたまは、汝たちも正しき道にて仕へられよ、かやうに事を料られなば必阿諛をなして寵愛を好するにも及ぶべし、とく膳を奉りて鼓の前に終りなんに何の苦しきことやある、是等は誠に小事なれども君を欺くともいふべし、君子は禍を未然に防ぐものなりと戒められけり。

林道春格言の事

直孝ある時林道春に物語して焚燭が勇氣たくましましきと聞く、されども弓箭取の珍しき事にもあらず、我とても燭が下に立つべからずといはれしに、道春、燭は誠に穢多の子にて筋目もまさり給へり、されども爰に一ツの故の候、戦ひに臨みて矢石の中に先掛するのみを勇氣とはいふべからず、是は匹夫の事なり、燭が顔を犯して高祖を諫め申せし事有り、足下にはいかゞ候べき、廣言をはき給ふともよく、自ら省られよ、燭に及ばぬ事の有るべきといへば直孝耻る色あり、是は其比大猷院殿御病氣とて大名に相見なかりし故に斯いはれしとかや、世に道春一生の格言とせり。

藤惺窩秀吉公を論ぜられし事

惺窩藤敏夫東照宮の御前にて、秀吉は大膽なる人なれども大心なりとは非べからず、朝鮮より明に攻入らんとは大膽なれども秀信を信長のあと、は仰がれず、自立して日本を掌握せられしは大心にあらずと申されけるが、後に此事を四辻亞相公理卿にかたる人あり、亞相の曰くわれも其論尤なりと思ふなり、大佛建立はかの猿どころがはなれぬなりといはれき。

紀伊大納言頼宣卿諫言を歡び給ふ事

紀伊大納言頼宣卿は東照宮の十一男にておはしませしが、幼き時より東照宮の膝下におはして文武の御物語を聞き召し、尋常の質におはしませず、諫を納れ給ふ事もなみくばならず、或時腰帶といふ備前長光の刀にて立げさを試み給ひしに、快く切れて其まゝ立たるをつき給ひければ二ツに成りて倒れけり、左右一同に驚入るばかりなり、大に悦びて那波道圓に異國にもかゝる利劍も有りや、又かく手のきゝたる人やあると仰せ有りしに、道圓承り異國には龍泉太阿なぞ申利劍も有之候、人を殺して樂む人は夏の桀王殷の紂王と申惡王おはしませし候、凡人を害して面白しとおもふは禽獸のしわざにて人間にてはなく、日本にて罪人を切候は穢多こそいたし候へど、憚る色なくいひしにつと入り給ひぬ、やがて道圓を呼て先に申つる所こそ至極の道理なれ、これより再び自ら試る事有るまいぞ、諫言こそ返すべくも淺からねど賞美のりけり、又ある時大高源左衛門といふ士に司る事に付て、われ不幸にして良き士持ざるゆゑ何事もおこたりに成りぬどしかりて人のなきなりと有りしを道圓聞て、己が目のくらくて人のよしあしを見明めざるを咎めずして人のなきとは何事ぞや、外様古參にも新參にもよき人を撰み出さんには、智者も勇者もいかにほども有るべきに人のなきとは目の明かぬ故なりと直言しけるをつくくと聞給ひ、道理至極せりとて再三感せられ、深く先の詞を悔ひ給ひけるとぞ、道圓常に其子にかたりて亂世には臣士君の爲に死する事有り、太平の世諫て死する事を忘るべからずと戒めけり。

由井正雪反逆の時頼宣卿出仕の事

慶安四年 辛卯四月 二十九日 大猷院殿過させ給ひて、其七月江戸にて浪人由井正雪叛逆をたくみ、紀伊大納言殿の仰せと稱し判形を似せ謀書を所々に遣し、丸橋忠彌芝原又左衛門以下數百人徒黨し、御鐵炮の藥藏の奉行川原重郎兵衛も是に與し、埋火にて遠くより火をさし徒黨の者ども船にて海上に出る時、藥に火を移して江戸を一時に焦土となさんと巧みたりしに、心替したる者三人有りて訴へ出であらはれしかば、丸橋をはじめ生捕れ正雪は駿河宮の町にて自害しけり、右の謀書を敷通浪人どもの許に有りける故大臣集りて一大事と案じ煩ひ、とかく頼宣卿を殿中へ召して此書を出す外有るべからず、其時様子あしかりなんには直に捕へ申せとて、くつきやうの兵をかくし置て出仕を待居たりしに、尾張中納言光友卿水戸中納言頼房卿も出仕有り、此事を告申けるに尾張中納言何條かゝる企有るべきや是謀書にてあらんとなりしに、水戸中納言もいかにも左候ひなどぞ宣ひける、されども各手に汗を握る處に頼宣卿出仕有りて座に付き給ひしかば、井伊直孝酒井忠勝松平信綱此度浪人どものたくみの次第を申述べたる處に、阿部忠秋かの狀を披露しけり、頼宣卿残らず見給ひて氣色うちとけて返すべくも目出度こそ候へ、

もはや何のおそる、事も候はず、其仔細は彼徒黨の面々外様大名の判を似せ謀書を作りたらんには、三代の御恩を忘れもしや氣ちがひて謀反を企むとの疑も有るべきに、我等が判を似せたる事故なく治りたるなり、幼き公方の御身にてもし御疑ひもあらんには、我等只今國さし上いかにも仰せに従ひ奉るべし、天下安全にてこそあれど悦面にあらはれて見えしかば、兩公をはじめ一同に感じ譽ぬ人もなかりければ、頼宣卿其浪人どもの中壯年の者四人勅け置かれよ、重ねて詮議有るべき爲なりとの給ひけるとぞ。

松野惣太郎前田權之助賞せらるゝ事

頼宣卿馬を乗給ひ、駈の中に頭巾の風に落けるを中に取て又鞍に乘直り給ひしを、吉見喜右衛門といふ者松野惣太郎といふ者に語りけり、折節頼宣卿馬場におはしける時なるに、惣太郎聞て殿にはいまだ馬上は練給はぬなりといひければ、頼宣卿仔細いかにと尋給ふ、惣太郎さん候、東照宮は海道一番の馬上の御名人と申奉りたると承り候、小田原陣の時山道を武者押しして過させ給ふ、丹羽長重長谷川秀一堀秀政峯筋をおしけるが、東照宮の御旗をみて皆々おし前を觀る、茲に一ツの谷川の細橋有り、此の橋へ行かゝる人々橋の下を皆歩みわたりにす、東照宮馬上にて橋際へ着せ給ひしかば、三人の大將聞ゆる馬上の達人の細橋を渡さるゝみよと云ひ

あへりけるに馬より下り玉ひ、御馬は遙の下を口つき四五人にて率渡しけり、人々是はいかにと云ひけるを、かの三人の大將大に感じ、馬上の達人とは是をこそいふべけれ、馬上の達人は危き事はせぬものなり、殊に大事の軍を前に置ての事なれば、かく有るべき事よと感じたりと承り傳へ候と申ければ、頼宣卿つくづくと聞て大によろこび、其詞を書て硯箱に入れられけり。又前田權之介といふ士、ある時頼宣卿へいひけるは、今朝ひとり思慮せる事の候ひしに、大將の一言は重き事は候まじ、千金にも人の命を替るものは有るまじきに、大將の一言により忽命を露ちり計もをしきとは存る事なきは昔よりの事に候と申ければ、とかくの詞なくて時服をあたへ給ひぬ。

水野重長諫言の事

頼宣卿紀州にて松江の西の庄といふ所にて鷹狩ありて港に船を付け陸路を経給ひしに、折節春たる麥を蒔にならべ僅に路明きたりしかば、皆農民の年中の糧なるを供の者ふむべからずと再三制して歸り給ひければ、百姓ども悦びあへりしを、供なりし横目の長臣の前に参りてかゝる次第に候と申す、何れも感じあひけるに水野淡路守重長一人今日殿の御ふるまひこそ心得ね、かゝる事故下々の奴原殿の内胃を見て馬鹿にするぞとよ、殿の通らせ給はんには麥を脇へ引の

け水を打てこそ有るべきに、何ぞや麥をばして通路をさへはる事奇怪なり、一國の主の仁はさ
は無きものなりといひしを、賴宣卿聞き給ひければ君も君たり臣も臣たりと人々申けり。

佐々九郎兵衛經濟格論の事

京極刑部少輔高知播州龍野を領せり、國用甚乏しかりければ公儀の事は堀田若狹守に計
り、藤堂大學頭高次高知の長臣岡七郎兵衛定次相かりて評議し、新參の士に年を限りて永く暇
を出すべしとの事なり、佐々九郎兵衛長光年老ぬれども思慮ある者として呼ばれければ、江戸へ
行き藤堂堀田に相會す、評議の始終書記して佐々に見するに是は存寄ざる事なり、是非新參の
面々に暇を出して足らざるを足さんとならば祿多き者然るべし、かく申佐々一人が祿數十人よ
り多し、流浪すともさのみ艱難にも及ばじ、小祿の人々は道路に乞食せん、是不仁の至にて行
ふべき事にあらず、つくづく論せられよと諫む、佐々が思慮を問はるゝに高次五百貫目を取次
て貸れんには、五百貫目は臣歸路に京にて借來ん、されども爰に一つの大切の事あり、幾度か
くすども殿の能歌舞妓鷹狩屋敷の設衣服器物萬事に費をなし、國の長臣其職に有もの身がまへ
してあらば何の益かあらん、此諫言は外戚といひ大祿なれば高次の任なるべしといふにより、
一座感じて佐々が言を用ひ暇を出さるゝ者一人もなし、さて長光定次に向ひて此事を一旦評議

に及ぶとも、國の長臣として猥に順從して一言も争はず、不忠なり、世の國の長臣となる者其
身の饒なるを省す、尙貪る心より其主君に諛ふ、古より軍に臨て死するは多く、諫て席上に
死する者は少し、成難きをなすをすぐれたりとす、何を諫めて死せざるべき、大かた財用の乏
しきに及びて、よその金銀を借求めて忽困窮に至りては士の祿をはぎとり、約束の詞を違へ非
義不道の事を申行ふにも成ぬるぞかし、常に儉ならで足ざるに及で俄に患るとも、其本正しか
らば武備を全うせんとおもへども、いかで事よく成るべき、君臣とも國郡を盗み祿を竊むの
凶賊なるに、其恥べきを恥とせず是非なき事ならずや、汝其職に居てかゝる心なきはいかにと
いへば、定次一言の答もなかりけり。

不破彦三武備の事

加賀中納言利常の士不破彦三四千石の祿を受けて武名を知られたり、其子も同じく彦三といふ、
性質愚鈍に見えて常に怠がちな事多し、是を諫る人有りて時節といふ事有りといふ、悦入
候といひながら聽用するしも見えざれば、又いさめたり、其時不破あざ笑ひ、才覺ある御身
五百石我愚なれども四千石のみな誹られ候ひそといへば、色を變じて人の勝る劣る祿の多少
によるべきや、何とてさはは理の不通なるぞといふ、不破それは我も知りぬ今の詞は戯なり、

亡父常に我を誡めて小ざかしき利根だてなる事ゆめうすべからず、人の心に入らんとてかりそめにも諛ふ事有るべからず、唯守るべきは義の一筋なり、汝武勇の身なり、士の義を忘れざれと申おきたりしに違はんかと、日夜是を勤るの外他事なし、衣食の美を好まず、從者と艱難を同くせり、日本第二の大家なる加州の士中我と祿同じき者多しくらべ見られよ、人馬のすくやかなる武具の揃ひ整ひたる我に勝る者有りとも覺えず、又利にたよりたる事やなしたる諂ひたる事や候、偽を申たる事や候、平生日々身に省みて弓箭の家に生れし職をゆるがせにせず、御身は亡父と親しき人なりし故、かく諫めたまはる事も忝くよろこび存するなり、されども正しき道に教へ給はるべきに只時を見て世に従へとや、實の本意には非るべし、さらば言に従ずして本意に従はん如何候はんと答ふれば、諫し人大に心服したりけり

井伊直孝衣服儉約の事附戰國の時質素なりし事

井伊直孝大坂冬の軍に物見二騎をやるに、雨に濡て歸りければ、則着られし小袖二つを脱ておたへられけり、扱安藤帶刀の許より小袖をもらひて島の小袖革袴にて兩御所の御前に出られけるとぞ、直孝の領地近江の彦根は湖上より船を泛べて都に行くに甚近し、太平に及てや、奢靡の風俗になりて、彦根の士も都近ければ衣服美麗になりけるを、直孝戒ずして儉約にすべき道

をはかり、江戸より歸る時木綿の衣服を供する士の數密に用意して彦根に着く時、俄にくばりて着せられけり、彦根の侍衣服をかざりて迎へけるに、供の士皆木綿の衣服なり、彦根の人々身を省て美服を裂たくありしとぞ、一事の法令をも出さず彦根のおどりやみてけり。

戰國の時衣服質素なる事論するを待す、瀧川左近將監一益關東の管領として麻橋に至る時、諸將對面の爲來りしに、只今一つ有る衣服の垢つきたるを濯ぎて赤裸にて候程に、暫く待て給はれといひし事語り傳へて、直孝の衣二つ物見の士にあたへて着替のなかりしも皆符合したり、泰平に及てや、衣服の美に成しかども寛文の頃まで尙其遺風あり、然れども金銀利倍の物語する事は士の恥と心得居たりけり、酒井雅樂頭忠清大老たりし時、江戸の殿中にて春の末にや休所にて下に着たる服の汗づきたるを欄干にかけたるが、所々つぎたてたるが見ぐるしきと歸りて語られしに、其事を司りし老女の時移りて君の奢り給ふにこそ、わが一生は今の如くならんといひし事あり、此事は嚴有院殿の御時なり、古の武士は大やう無用の奢侈を縮めて用ふべき事には吝ならざりしなり、關ヶ原一戰の後成瀬吉右衛門は伏見に有り、其子隼人正駿府に在りけるが、折節父の許に金を贈りけり、居間の天井に釣置て客來れば、あれ見給へ着を調味せよとて隼人が贈りたる金なり、是を見れば美味に勝れりとぞかたりけり、大坂冬陣和平の後隼人が子何某祖父の所に來りければ、此度は

事故なければもやがて事あるべし、其時よき馬をもとめよ、江戸廣しといへども金二拾枚の馬はさのみ多からじ、これをとて二人の孫に各金二拾枚をわたへしとなり、昔の士風想ひ見るべきにや。

永井尙政執政の用意を直孝に問はれし事

永井信濃守尙政に執政の職を仰出されし時、井伊直孝に對面し、不肖の身かゝる任を受甚恐懼に及び候、教訓を得て其職に居候ばやと申されければ、直孝尤の事に候、我をしへ申べし、身を潔くし明朝來られ候へと有りければ、辱きよしいひて沐浴し、禮服して其明の朝行かれしかば、直孝出あひて世の諺にゆだん大敵と申候事定めて知れたるべし、萬事の危きに及ぶ事皆是ゆだんより破るゝ事の候、此事かたく忘られなといはれけり。

松平信綱恭敬の事附信綱幼年奉公の事

松平伊豆守信綱出仕の時、裏付の上下着る事なし、屋敷に有りても是を着られず、常にいはれしは人の心衣服によりて變ず、出仕して恭敬を存せずしては忠を盡す事を得難し、先衣服より心を付て恭敬をわするべからず、我においてはかくの如くつとめざれば忠勤を成しがたしと云はれけり。

信綱實は大河内金兵衛元綱の子伯父正綱の嗣となる、幼名長四郎とぞ申ける、殿有院殿御誕生有りし時より御家人になされ、御あそび相手にぞ候ひける、大殿の御寢殿の軒に雀の巢をくひ子を産たるを、若君こなたより御覽じて、長四郎よ取てまゐらせよと仰せけるに、年十一歳なればいかにもかなふまじきよしを申す、晝は驚きて飛去もやせん、よく見置て日暮てこなたの軒に梯さして登り、忍び行きてとるべしと有あふ人々進めければ力なく、日暮に忍びのぼりてやうくつたひ行きけるが、ふみ損じて御壺の内にどうとおつ、大猷院殿御刀とらせ給ひ障子ひらかせ給へば、御臺所どもし火とつて出させ給ひ御覽するに長四郎にて有りけり、大猷院殿汝は何ゆる爰には來れるぞと御尋有りしに、けふの晝御殿の軒にすいめの子産たるを見て、餘りのほしさにとりに参りて候と申す、いやく己が心にはあらじ誰がをしへけるぞとままに御推問あれども幾度もあらずひぬ、年比にも似ぬ不敵なれば、とく大なる袋の中へおし入れて口を御手づから封じ給ひ、柱に掛させ給ひ事の上しを有りのまゝに申さざらんはどは、いつまでもかくて候へと仰せければ猶詞をかへず、夜既にあけて常の御座を出させ給ふ、御臺所は早く心得させ給ひて、かれが幼き心

にて身の悲しさを願ず、竹千代君の仰なりと申さる事を深く感じ給ひ、女房たちに仰せ有りて朝飯をゆしてたべ候へど賜はりて、又口を封じ給ひてけり、晝はせ入らせ給ひて又御推問あれどもつひに其詞屈せず、御臺所御わび言ありしかば、さらば重てを慎めよと仰せ有りて御赦しあり、御臺所に向はせ給ひ、かれが今の心にて生立たらんには竹千代殿の爲には双なき忠臣にてこそ候はめと殊の外によるこばせ給ひけるとかや。されば諸國の大名の代々奉りし人質をかへし、殉死を禁じ大佛を鑄て錢とし、明暦の火災東都の城廓を始めことごとく灰燼となり諸人焦爛にくるしむ、殊に去年由井正雪の逆徒のさわぎ有りし後なれば、人々心安からざりしに、信綱事に臨みてたち所にとり行ひし事、皆其所を得てはどなく世の人心も静まり、昔に替らぬ時となりぬる事、いにしへの賢輔にも恥べからずと申傳ふる所なり。

細川忠興の立物の説

細川忠興に冑の物ずきをいかにせばやといふ方の有りしに、詳に書しるして使にあたへられけり、使立物の下地桐の木どかき給へるは折やすきものにていかゞ候はんといへば、忠興色を變じ汝は弓箭取の使とも覺えぬなり、軍に臨む者誰か生て歸らんと思ふべき、二つなき命だ

しかり、何條立物の折るを厭ふべき、かるきこそよけれ、立物の折るばかりは働きたらば、何の見ぐるしき事あらん、ひと面目にてこそあれといはれけり。

天正元癸酉年七月信長淀の城を攻落されしに岩成主税助を細川藤高の士下津権内打取し時忠興八つの年なりけるが長岡監物が肩にのりて監物が立物鹿の角に取つき見物して興に入たりしを人見て後年の生さをおしはかりけると也。

忠興飯河豊前同肥後父子を誅せられし事

附 肥後が妻節義に死する事

細川忠興豊前に在りし時、同州龍王の城に飯河豊前宗祐祿三千石岩石の城に長岡肥後宗信祿六千石宗祐の子寵せられて長岡の姓を興へられしに、父子とも罪有りて慶長十一年七月廿一日二人とも誅せらる、宗祐は河北石見逸見治左衛門を討手とし、宗信は増田藏人を討手とせらる、宗祐散々に戦ひて死傷多し、宗信が妻は米田助右衛門是政が女なり、宗信と睦しからず、對面せざる事三年に及べり、忠興是政が後室の尼雲仙院といへるをよびて、豊前肥後罪有りて誅すといへども、汝が女と孫の女に罪なし、密に告知せて命を助けよとなり、後室の尼聞て肥後が妻常に中よからず、然れども夫をすて、かゝる時にのがれんとは得こそ存じまじけれど、仰せ

の忝さをば告申さんどて文して告やりければ、誠に仰せは忝けれど今はのきはに夫をすて、遁れん事人道にあらす、女子は東西をわきまへざる者なれば、養育して給はれどて使につけて厄のもとへ送りけり、宗信是を聞て大に悔み、我過を謝し終に共に自害したりけり。

黒田満徳丸袴着の時母里但馬舞をまひし事

黒田長政の嫡子満徳丸とて四の歳袴着の祝ひ有り、母里但馬はひき目親にて常にぢいとつつけられしが、其時但馬満徳丸の髪をかきなで、とく成長して功名し、父上より克したまへど申ければ、長政何といふ事ぞや、我武畧をさみするか、若き時は汝又備後山とも相謀りき朝鮮にわたり、又關ヶ原の合戦も皆汝等が扶によらず大敵に勝たり、其後世太平なれば立べき武功もなし、満徳いかにおもふども我を越る事存じもあらずとて膝立直し、但馬をにらまれしかば、人々汗を流すところに、但馬かたへに向ひて故なき怒かな、人の子に功名し玉へと云はひが事かどて物ともせざる体にて長政の方を見向もせず、長政いや父よりまされとはいかにと怒られしかば、但馬打わらひ、心を静めて聞玉へ、武功は幾度事にあひても仕すましたりと思ふ事はなく、度ごとに不足なる者に候、他人はたぐひなしと褒たつれども黙して過候よ、よき軍兵を引具し地の利よく幸に勝玉へるを自讃は以外のひが事にてこそ候へ、今まで勝軍になれて毎度

斯の如くならんとならば必敗北あるべし、味方崩れたる時一足も引ず討死は殿の得ものなり、其は大將の道にあらす候、味方討せず軍に勝を良將と申候、殿の武畧進む一途は得ものにておはせども、進退圖に中る一途はかけておはしまし候、此是非の論は備後老功の者にて候間、時々とはせ給へ、満徳どの只一人かけ出て討死する事は葉武者の業なり、死ぬやうに軍に勝を大將の道にはする事に候、此詞よく覚えてとくより能し給へと髪をなで、長政の怒を物とも思はぬけしきなり、備後守次の間に酒宴して有りしが聞つけて、銚子かはらけ取持て走り出で長政の前に跪き、憚も顧すす、め奉り候とて盃を差置き、若き時如水公の小性たりしかば御酌はいたしならひし小笠原の禮義存出し候とて、酒をす、めければ長政うちとけ盃をかたむけられしかば、それを但馬に賜はり候へとて、氣ちがひよそれへ罷出よといひければ、但馬す、みより其盃を戴きて三度引うけ飲て後、殿はよしなきに怒り給ひ今日の祝ひに興さめ候、少し酔玉へと云ひしかば長政も又盃に十分引受られし時、但馬いさ肴よとて田村をうたひ出し舞すましたり、鬼の如くなる男の稽古せしか拍子も耳目を驚かせり、皆一同に兵のまじはりとうたひて酒宴盛になりければ、備後守高聲に若き人々能聞れよ、心掛の深さも殿又思慮なきも殿なり、大たはけは但馬又たのもしきは但馬なり、黒田の家の武勇目出度時ぞよとみなく酒を酌かはし、事有らん時鎗を合せ、なすべき事をなし置時は何事もゆるし玉ふぞ、人々うたへや舞やど

て酒宴やみてけり、又長政或年の春歲初の祝に栗山備後守がもとに行かれしに酒宴あり、四ッ比に及んで長政われ居たらば若き者ども酒おもふはと得飲じ、あとにて打とけて酒もりせよとて歸られしに、但馬今少し居て若きもの共に懇に詞をかけ、人に悦ぶやうにこそ有りたけれ、どかく我まゝの直らぬ殿なり、頂に大なる灸をしてこそよかりなめと大音にて云ひしを、長政聞かぬ体にて歸られけり。

龜田大隅江戸石壁を築きし事

江戸の石壁をきづかるゝ時、淺野長晟仰せを奉りて龜田大隅高綱を奉行とす、石壁成りて後崩るゝ事三度に及べり、台徳院殿打廻り御覽じて何とて崩れしやと仰せ有りしに、龜田謹で其事に候大隅軍の時鷗の嘴の鎗を提げ先かけ候、陣つひに崩るゝ事はなく候、石は無心ものにてせんかたなく候と申す、事終りて鹿毛ぶちの馬を大隅に賜ひけるに、士の二毛の馬に乗ることや候、にげたる事もなく候に口惜く候といふを、土井利勝申上られしかば別の馬を換て與へよと仰せられけり、龜田大剛の者にて十文字の鎗下阪忠親が造にてさやは鷗の嘴に造り栗色にぬり總螺鈿の柄なり。

吉岡建法狼藉太田忠兵衛手柄並太田武政を論ずる事

慶長年中禁裡に散樂の有りし時貴賤群參しけり、吉岡建法といふ染物屋劍術の妙手にて有りしが無禮の事有りしを雑色咎めければ、建法外に出で羽織の下に脇差をかくしもの所に入り、先の雑色をたゞ一打に切て夫より縦横にかけ廻るゝもとよりあくまで手さゝなり手負敷をしらす、板倉伊賀守勝重日の御門に有りしが眉尖刀の鞘をはづし向はれしを、太田忠兵衛何條手おろさせ給ふ事やあるとてかけ行くを、勝重此長刀にてとてあたへられしかば太田吉岡に向ひ、惡逆無禮のをこの首をのべよと走りかゝれば、吉岡は紫宸殿の階に息つき居しが、我に太刀打せん者汝ならではといひて階を下りて立向ふ、太田己に眉尖刀は無益なりといふまゝに刀をぬく、吉岡走りかゝりさまに倒れけり、太田大音あげ倒れたるを切は士の恥なり、立て勝負せよといふ、吉岡立わがる所を飛かゝり、一太刀に切殺しけり、勝重悦びて太田に祿を増し、盃をわたへて後吉岡が倒れたるを切ざるは勇餘り有りといへども、氣に驕の失あるに似たり、吉岡商賈賤しき身なれども劍術はいかなる人も及びがたし、倒れしは天の與へなり、然るを切らざるは虚を打の理にくらしともいふべきにやと云はれしに、太田仰せ誠に辱く候、こゝに一ッ存る故の候、多く敵の倒れ候をおこしも立す打んとする故に身を忘れ脚を切られて倒れたる者の

勝になり候、倒れ候に虚實の二つ有り、吉岡が倒れ候は虚にて候、吉岡たどひ實に倒れ候どもたやすく斬る、男にあらす、倒れし時は身を防ぐ事虚に似て候へども、近付ならば切らんと存るは實にて候、虚にも實にも倒れ候もの、立あがらぬといふ事はなく候、其立あがる時は躬を防ぎ敵をさりはらはんと存る心虚になり候、そこを打てたやすく切とめ候ひき、誠にかゝる小業匹夫の事にて殿のしろしめす理にても候まじ、されども陣をわかち軍する道にも相かなひ候事もやと憚を省すして申にて候といへば、勝重大に感せらる。

柳生宗矩劔術御師範の事附宗矩先見の事

柳生但馬守宗矩は大和國にて世々柳生の庄の地頭なり、關ヶ原の戦の後徳川家に仕へ奉りて、父より劔術を受傳へ無双の妙手と聞えてけり、大猷院殿御年わか、りしより此技を好ませ給ひ、宗矩御師範に参りて御心を盡させ給ひ、頗其妙を得させ給ひけり、只此藝によりて其人を信じ敬服させ給ふと人々おもひけるに、實に其技によつて治平の政事を諭し申しけるにや、常に御側の人々に天下の治めは但馬守に學びてこそ其大體を得たれと仰せられしとぞ聞えける、宗矩年老病重かりし日も、辱くも家に入らせ給ひき、正保三年三月終に空しくなりけるに、其ころためしなき贈位の事を執し仰せられ、從四位下にあげさせ給ふとかや、宗矩死せし後事にふれ

て生て世にあらば尋問べきものと深くしたはせ仰られしは誠に有がたき事なりし、其中一事相傳ふるは島原凶徒の亂、江戸に聞えし頃は十一月十日なり、宗矩有馬玄蕃頭豊氏の家に散樂有りて行向ひしに、家隸尋來て但馬守を呼出し、肥前國島原に土民相集りて楯籠り候ひぬ、是切支丹宗門の者にて松倉にそむき候ての事なりと早馬來り、板倉内膳正追討の御使を承り、はや御發向候とぞ申ける、宗矩さらぬ体にてもどの所に歸り坐し、用人に向ひ急て宿所に歸るべき事出來ぬ、よき御馬をかし給へといへば、心得たりとて馬に鞍置て牽たつ、宗矩打乗りて品川にはせ付け板倉は如何にと問ば遙に過させたりと答ふ、川崎に馳着て問へば今は二三里も隔りたりと申す、日已に暮に及べば引返して御城にわがり、近侍の人々を以て申べき旨有りて伺候し候ひぬと申せば、やがて御前に召して何事にやと仰せ有り、宗矩畏り只今承り候へば九州に切支丹宗門の逆徒發起し、内膳正重昌追討の御使を承りはせ向ふよし、仰せと稱しおしといひべきと存じ追かけ候へども追つかず候、此よし申さん爲なりと申す、何故におしといめんとは思ふぞと御尋あり、さん候君はひたすら土民ばら立籠り候と思召して追討の御使かくこそ候へ宗門に付て起る軍は大事のものにて候、重昌一定討死仕申べし、いかにもはかつてといめばやと存候ひしと申す、以の外御氣色損じ御座を立せ給ふ、宗矩猶夜ふくるまでも退出せず、此よし聞召し又御前に召て重昌討死すべき仔細はいかゞと御尋あり、宗矩さればこそ兵の

道は勇を先とす、勇士は死を悲まず、三軍みな恐れざる事は今の名將の專一とする事にて候に、凡愚の輩宗門を深く信じ其法をかたく守りて死を以て身の悦とす、百千の人死を恐るるの勇士となり候事は宗門の故にてこそ候へ、織田家の武威を以て一向門徒に勝事能はず、天子の命を假て和平になり候ひぬ、三河國の一揆も近き御家の事にてこそ候へ、大事の時重昌年わか候へども、數十万人に撰ばれ唯一人大事の御使承りたる者なれば、是等の土民打亡すべきに何事か有るべき、誰かは其下知を背くべきと思召したらんは事の違ひにて候べし、重昌位高く祿も有りて年頃重き職を司つて常に人の敬ひ候はんには然るべく候、今の重昌が身にて城を攻候ひなんに、西國の諸侯いかゞは下知に従ふべき、おもふにも似ず攻わぐみて候ひなんには、又御一門の人々かさあらずは宿老の内重ねて追討の御使下され候べし、しからば重昌何の面目ありて生て再び關東に歸るべき、あたら人を土人等に打せ候ひなん事誠に口惜くこそ候へ、是は御家の恥辱ども申べきをや御ゆるしを蒙て候は、追付参りてどかく押へといめて具して歸るべき物をと憚る所なく申ければ、御後悔の色あらはれさせ給ひしが、それも叶ひがたくや思し召けん、夜も更たりとて入らせ給ひしかば宗矩も退出し、ひそかに人にかくと語りけるとかや、誠に宗矩が計りし事掌をさすがごとくなりしかば、尤深計遠慮ありとぞ申べき。

板倉重昌肥前國島原の賊追討の事

附周防守重宗先見の事

島原にて寛永十四年切支丹一揆の時、討手に石川主殿頭忠綱板倉内膳正重昌なるべしと云けるを、石川聞て我年老たり、板倉其器に當れりといはれしが、重昌仰せを奉り肥前に赴き城落ざりしかば、又討手の大將を下さるべしといふを、石川聞て我始は其撰にあはん事をさのみ悦ばざりき、今思ふに泰平の世に徒に死んも志に非ず、あはれ仰を奉りて西國に赴かばやとぞいはれける、重昌筑紫に向ふ時、京都にて所司代板倉周防守重宗に對面ありて、今度の仰せを承る事辱き由を語られけり、重昌既に京都を立て後重宗重昌がおもふ所を察するに必討死すべし、再會是までなりといはれけり、松平伊豆守信綱肥前に進發せらると聞きて、重昌城を攻て討死せられたり、人重宗に其いはれをどふ、重宗城にこもる者は百姓の身なる故に、内膳正忽攻落すべしと思へる色あらはれたり、たとひ此城を攻落すとも一揆の奴原さのみ功名ともいふべからず、只今四方無事の時、一揆のみなき城に籠りて降参するとも悉うち殺さん事を知て其心一和すべし、たやすく落べからず、日敷を経ば又他の大將を指向られんに、内膳何ぞ生て歸るべき、吾是を以て討死せん事を知りぬといはれけり。

川北九大夫肥後國川尻を守る事

細川忠利たよとしの士川北九大夫といふ者あり、川尻かはじりの代官だいかんを勤めよとなりしに、出陣しゅつぜんの時供ともに連られ
なば代官だいかんの職しやくつとむべしといひければ、尤なほとて出陣しゅつぜんのとき供ともすべしと定めらる、天草あまくさはや、
もすれば一揆いぎをなす所と西國さいごくの人のいひける事なれば、心にかけて川尻かはじりは海邊船かいへんせんの着つく處ところにて
細川家の米藏こみくらあり、天草あまくさへ海上七里かいじょうしちりと聞ゆ、川北かはきた兼かねて地鐵砲ちてつぱうの數かずをしらべ置けり、獵師りやくしの事こと也、天草
の一揆いぎ起ると聞て川尻かはじりの海岸かいがんに一間いけんに一本づゝ竹たけを立たてさせ、一本いっぴんごとに火繩ひなはをゆひ付け、五本
に一人の地鐵砲ちてつぱうを配りけり、後に天草あまくさにて生せいぞられし者のいひけるは、其夜かよ川尻かはじりの米を取ん爲
に船ふねをおし出して見しに、川尻かはじりにいくらともなく鐵砲てつぱうを備そなへて見えたる故、さては熊本くまもとより軍
兵へいのはや川尻かはじりに來れりとして船ふねをもどしけるとなり、川北かはきたなかりせば川尻かはじりの米を取られ天草あまくさの糧
たやすく破やぶれまじかりしに、川北かはきたが謀はかりごとにて天草あまくさの糧らうはやく盡つきてけり。

天草一揆夜討の事

天草の一揆いぎを圍かこみ攻めらるゝに、城中じうちゆう糧米らうまい既すでに乏ひそしくなれば夜討ようちうして米をどらんと本田ほんだ但馬たじまが
謀はかりごとにて先諫せんげん早口はやぐちの屏へいの外の水みづを汲くみせける時、鐵砲てつぱうをならべて寄手よてに見せたり、かくする事二度

に及びて後には漸々しんしんに遅おそく夜に入りて汲くみせけり、是は夜討ようちうに出る時の鐵砲てつぱうの火を見答みこたさせしと
の事なり、其後そのち毎夜まいよ屏裏へいりにて切支丹きりしたんのとなへごと天帝てんたいといふ事を數千人一同いっどうにをめぐ、是も夜
討うちに出る時の物音ものおとをまぎらはさんとの謀はかりごとなり、斯かくて寛永十五年二月廿一日の夜、五百人をも
て黒田忠之くろだただゆきの陣所ぢんじよにおしよせ、二陣にぢんの兵二千人を二手に分ち、繩なはだすきして領りやうにはくるすを鉢
巻はちまきにして、相辭あひこぼは丸か丸と定め首くびなどりそ食物しよくものをとり來るを第一だいいちの功名こうめいにせんと下知げちし、諫早せんさ
口くちより出て出廓でせきのかたへなる有江口あゐえぐちへ退入しりぞるべしと定め、陣屋ぢんやを燒かん爲ために檜ひのの木を削りかけ
にして腰こしにさゝせ、丑うしの刻ときばかり月もおぼろにくらかりしを便たよりに、黒田くろだの陣所ぢんじよに押寄せ同時に
関せきの聲こゑをわぐれば、城中じうちゆうにも関せきの聲こゑをわはず、士大將しだいじやう黒田くろだ監物けんぶつしよりぎはにありて父子ふしともに
面おもてもふらず支さへ戦いくさひしが、流れ矢やに中りて討死うちじしければ、從兵じゆうへい四十三人よんじゅうさん枕まくらを並べて討れけり、
一揆いぎ大に勇いさみ進すすみしかども黒田くろだ美作みさく入道にゅうだう睡鷗すいおう物ものしにて柵さく壕こうさりの守まもりかたいためらふ中に、黒
田くろだ市正いちのちか高政たかちか鎗やりを提出ていしゅつわひ二三人ふたりにさん突伏つせふせ小性せうじやうに首くびとらせ、市正いちのちかこゝにあり一足ひとあしも引ひきなきたなき
ふるまひせば、軍神いくさかみも照覽せうらんあれ斬きつ捨て捨するぞと呼よはる聲こゑを一揆いぎ聞きて、爰こゝは破やぶりがたしとて寺澤てらさわ兵
庫頭くらかみ忠高ただたかの陣所ぢんじよに進すすみ行く、三宅みやけ藤右衛門とうゑもん支さへ戦いくさひ痛手いたて負おひたり、一揆いぎ又また鍋島なべしま勝重かつしげの陣所ぢんじよの井
樓いろうに火をかけたらしに、松平まつだいら信綱のぶつなより夜廻よまわりの士岩上いはかみ覺あ之の介の尼子あまこ八郎やちろう兵衛べゑ紀州きしゅうの使者しや山中やまなか作右
衛門さくゑもんと打連うちつれて來りしが、山中やまなかは銀ぎんの冑かぶとにて十文字じゅうもんじの鎗やりを持もさんぐに相戰あひたふ、鍋島なべしまの軍兵いくさへい馳集せあつ

り入たてじと防ぎけるに、竹把に火もえ付て白日の如く、一揆かなはで引かへす時、四郎矢倉に有りて勝鬨をつくらせ、それより城中静りけり、其後水野日向守勝成島原に着陣し、黒田睡鷗に夜討の有様がたらせ聞て、ひかしより四方を固く取りまかれ、竹把を付け、柵の木二重三重にゆひたる寄手の陣に討て出たる事を聞かず、古今無双の武略をしたる一揆なり、されども一揆を一等超てはたらかんはわが士卒なりと云はれたり。

鍋島榊原島原城先登の事

同じ城攻に鍋島のしより塀二三間ばかりに竹把を付寄せ軍兵ひしと押寄せ居けるに、城中殊の外に静なればひそかに塀の内をさしのぞき見るに一揆一人もなし、士大將鍋島安藝是を聞き塀裏をさしのぞく其有様只今攻入べきけしきなりしかば、おはやと云ふ程こそあれ我先にとかけ集る、鍋島の陣に附られし榊原飛驒守の士ども竹把を付習ふとて毎日かはりくに来りしが、是を見ていざといふまゝに押寄る、榊原の嫡子左衛門佐真先かけて乗入りければ、戸田左門氏鐵の陣所に諸將集りて軍評定有りし時なるに、井樓より鍋島の軍兵只今城に攻入候と呼はる、さらばとて諸將陣を寄て攻落されける、其後勝重に今度軍令を背き城攻有りし事を問はるゝに勝重承り、榊原父子先がけて乗入り候うへは目附を討せて叶ふまじと不意に攻入り候と申さ

る、榊原に問はるゝに嫡子にて候、若き奴軍令を忘れ先がけしける故、恩愛にひかれ子を眼前に討せ候ては生がひなし、父子は同罪と存じつゝいて攻入り候と申されければ、鍋島も榊原も門をどちておひ込れ、三十日過て御ゆるされあり、勝重人にあふごとくに筑紫にて卒忽の城攻せし罪ゆるし給はり忝きよしはれしかば、江戸にて城攻の卒忽人よとて勝重の通らるゝを珍しげに観けるとなり、又榊原申されけるは若き者どもに竹把の付やう習はせ度候、攻口四五間分ち給はれとなり、皆くるしう候はじと云ひけるに勝重聞入せず、わが攻口を人にわくる事やある、一寸も叶ふまじと答へらるゝに、榊原しひられしかば飛州の士をわが士共にさし加へられよといはれけり、此時一丈にてもわけたらば領地を削らるべきよし議ありけるに、勝重の遠慮なかりし故に其事やみたりしと人々いひけるとぞ。

黒田勢天草丸を攻破る事

附黒田睡鷗武畧の事

黒田忠之天草丸を攻る時、本田但馬さびしく防ぎ支へて先陣攻入り得ざりしかば、忠之素はだにて進まれけるを、黒田睡鷗物具持ひにたらぬとは申せども、大軍を下知し給ふ身の甲を着ざればうろたへたりと人の嘲り候べしといひければ、忠之物具とつて肩にかけ冑をば着ず手ぬぐ

ひにて鉢巻し走り出で、わが士ども年頃吾家の恩にみちし奴原けふはいかにして進まざるや、われ此處を一足も引まじきとて鎧の縛を地にさしこみ、折しきてすゝめ者共と下知せらる、雨の如く打出す鐵砲に打すくめられためらへり、睡鷗は是を余所に見てひかへ居しかば、忠之何とて一方を下知せざるや、年老て老耄したるかど大音わけ齒がみして罵られしかども少も騒がず、いまだはやく候としづかにいへば、忠之いよく怒り罵られしを、弟市正彼入道は物しにて候、またせられ候へといふ所に睡鷗つと立上り、魔を取てかゝり候へといふ、詞の下より軍兵一同にとつと進みて天草丸に乘入り攻取たり、後に忠之睡鷗を近付け軍兵我下知を用ずして汝が一言にて忽城を攻破りたるはいかなる故ぞと問はれしに、すべて城攻に四方より押寄せ先陣ひと攻つむる時を見はかりて無二無三に進んで手負死人を願す乗入り候へば攻破り候事を得候、四方の味方いまだ押寄せ、一方より攻破らんといそぎ候へば、城中も外の防をすて、先きびしく攻るかたを支へ候もの故、外の持口よりも防ぎ甚つよく候、其ひまに一方より攻入り候時は容易く撃破り候、早過たる方は却て手後する事常の理に候、臣このわさまへしりてしづまらせ候へと申せども、殿いそがせられ候故味方に手負討死多かりきと申ければ、忠之高政どもに大に感せられけり。

水野勝重父子有馬永純本丸一番乗を論ぜられし事

鳥原を攻落す時、水野美作守勝重は江戸にて賜りたる白川月毛といふたくましき馬に乗り、田氏鐵の陣所よりわが陣所に乗切て歸られしに、勝重の軍兵ども金の束のしの馬じるしを見るより我先にといさみけるを、勝重馬上にて胃を取て着、武者奉行河村新八士大將上田玄蕃に向ひ、わが下知なき以前にかゝるならば軍神にかけて斬棄よと大音あげて呼はり、魔を抜出し軍兵をすゝめ扉を破りをめきさきけんで攻入りける、自分馬より鎗を杖にして本丸を目かけて進まるゝ、嫡子伊織十四歳真先にかけて出るを祖父の勝成後陣より見て本丸をうち破れと下知せらる、本丸にたてこもるもの共數千人、けんを限りと思ひ定め防ぎ戦ひければ討るゝ者多し、鍋島の軍兵ひるみて見えし處を、水野父子横さまに面もふらす切かゝりて三の丸より本丸へ逃入る一揆を討取る事敷をしらす、本丸の石壁より打出す鐵砲の玉霰の飛ちるが如し、石壁は五間七間計も高く登り兼たる處に、水野父子大音あげて今日本丸を攻とらずは生て誰にか面を向べき、死や〜と聲々に呼はりうてども射れどもひるまず、われ先にと攻めかゝる旗奉行神谷奎之允旗十本の内一本持せ來りて自竿に手をかけ、本丸に入らんとす繩奉行進藤七兵衛小野田正太夫金の束のしの馬印をふりかたげ來りて、松の丸に押立しかば、神谷も旗を入れ水野父子の

兵念なく石壁を登り本丸に攻入たるを勝成二の丸より見やりて、われ今生の思ひ出なり、美作は大阪にて武功あり、伊織はけふを始めの軍なるに、本丸を攻取りし事家の面目なりとよろこばれたり。有馬左衛門佐康純の嫡子藏人永純は寺澤忠高の後陣なりしが、唯一人従者に鎧をもたせ寺澤の先陣をかけぬけて、天草丸の方へはせ入り本丸に進んで五六間計の石垣を登り、今日本丸の一番乗有馬藏人なり、心ある士はよく見候へと呼ぶ處に、勝重の士鈴木半之丞取りたる首を石垣の上に置いて息を繼居けるが、此聲を聞いて鎧を横たへ藏人に向ひ、只今こゝに來り一番とは何事ぞや、本丸は水野美作守攻入り旗馬印入れ置きぬ、二番とならば是へ上らせ候へといふ、藏人聞入られずは唯一鎧にとおもへるけしきなる上に、水野の旗本丸に建しを見て、さらば美作守についでしては藏人なりといはれしかば、其時鈴木半之丞美作守父子の外大將たちはいまだ本丸には見えず、まぎれなき二番にて候とて手を取て石垣に引き上るに、永純のねの丸くひ途ひの處に進み行き美作守はいづくにやと問ふ、神谷美作守は腰廓の上に居て爰に旗を入れ候と答ふ、永純聞てさては美作守は我より後にてこそあれといはれたり、永純本丸に押入りたりと勝重聞て使をたて、只今攻入られしよしくるわ有る所にあり、もし夜に入て一揆討て出る事もあるべし、爰に一所に有りて下知せられ候へとなり、藏人聞もあへず作州はわれより後に攻入られしよ、藏人は一寸も敵近き所を好み候はどに後へは引候はじ、一揆打て出るとも藏

人爰にあらば危き事候はずと答へられけり、勝重よし詰の丸より切て出ば敗北すべしとて士三十人計鎧を横たへ鐵砲を前に並べたり、藏人は鐵の楯を取寄せ前に押立て夜の明るまで待かけられしかども一揆討て出ず、信綱下知して勝重も鍋島の陣に入かはられしかども永純はしりぞかず、使度々に及て引かへされけり、落城の後三月朔日永純勝重の陣所に行き本丸の一番は藏人にて候といふ、勝重年若くて左の給ふ本丸の奴原命を限りに防ぎ候ひしを美作守父子おし寄せ討破りて旗を一番に入し事誰かあらそひ申べきと答ふ、鈴木も進み出たれば永純また鈴木が申せし言もいかで忘れ候べき、作州父子は一番とおもひて藏人二番と申せしも分明なり、されども旗入置れし所に行て見しに夫より遙かの跡に控へてこそおはしたれ、鈴木も旗を證にして利口を申たれ、とかくに一番は藏人に候と云はれければ、勝重陣所に在りたればとて旗を一番に入れしは是軍の法に於て誰かは一二を論すべき、父子が兵ども身を棄て力攻に乘取りし本丸を他の一番に定めん事思ひも寄り候はず、能思慮し給へと答へられしに、永純旗の前後は論せず候、將たるもの、先がけは藏人が外誰か候作州は跡より使を給はり候へば、一番は藏人なりと怒られしかば、勝重只今のあらそひ無益の事に候、軍に慣たる物しに問て一二を定められしかば、永純打とけて小性を呼び、茶を飲て出られしが鈴木に向ひ、いかにも詞和らかに云て歸られしかば、藏人もなみくならぬ人なりと譽めあへり。

陣佐右衛門一揆の長四郎が首を取る事

一揆の長四郎が首を細川家の足輕陣佐右衛門取りけり、二の丸にて鐵砲にあたり倒れし者の首を斬しに、忠利前髪ある首をえり出させ、鞭にて彼首をさし、四郎が首ともおぼしきに、誰か見知りたると問ふ須佐美權之允四年以前に四郎を召つかひし事の候、紛ひなき四郎なり、左の耳の下に瘤の候、是其しるしなりとて生捕たる四郎が母に見すれば、吾子なりとて泣倒れしかば、忠利使をたて、首を石谷十藏の方に送られけり、後陣に千石の祿を與へらる。

松野龜右衛門鉄砲修練の事

附松野才覺の事

島原の城攻に細川家の士大將松野龜右衛門井樓より見るに、本丸と二の廓の間に坂有りて人集る、中に大紋の羽織着たる者あり、松野指ざして鐵砲にて打ちたるに五町ばかりにてたゞ中にあたりてけり、それより空箭なく打ちしかば彼坂を夫より後たまゝ通る者身をかゝめ走り通りけるぞ、松野は鐵砲の妙手留刑部一火に學びて妙を得たり。

熊本にて一匁の筒をみかさ居しに、庭の南天蜀の實をひよ鳥の來て喰けるをかなものしは

めて薬をこめ目的を見ず箸にて火をさして打つに中らざる事なし、島原の前の事なりしにや、細川家の長臣南條大膳恨をふくむ、故有りて細川家を傾ん事を謀りけるに、其比深く密する事ありて泄なば、細川家の禍なる事を知たりければ、先切支丹の事訴へけり、江戸より南條をめす、細川家驚きたれどもせん方なし、松野我にまかせられよとて四人なれば厚き板にて詰牢をつくり、醫者一人、密謀を云ひふくめ熊本より出るに、天氣を待て處々に舟をとめ、日を経る内に人參の入たる薬をあたへ、朝夕の食物まで人參湯にて飲食させけり、南條は氣の鬱したる上人參數百斤飲たりしかば心狂亂したりけり、松野江戸に打具し至りて南條は數年狂氣の者にて候とて出しけり、切支丹認の事を問はるゝに狂言のみなり、とく熊本に歸すべしとて松野に返されぬ、此謀たゞ醫一人のみ知りたりと云へり。

藤堂高虎阿野津にて勢揃せられし事

元和五年藤堂高虎領國阿濃津にて俄に勢揃をせられけり、人或は怪しみ或は高虎何事に謀反すべきや、萬に一も反心あらば事を密にすべきに、あらはに人のおどろくべきやうになしたるは仔細あらんといひしに、福島左衛門大夫領國を削られけり。

福島正則領國を召放さるゝ始末の事

福島左衛門大夫正則は關ヶ原の軍功によりて尾張の清洲より安藝備後を賜はりけるが、物荒く政悪きのみならず多く無罪人を殺し、且東照宮に對し奉り無禮多かりければ、元和五年台徳院殿御上京の時領國を削られけり。

本多上野介正純に就て廣島の城池を浚ふべき旨を申す、申上べきよしを答へられしが、御上京の事繁きにまぎれて其事なかりしに、廣島の城普請の事を聞し召し怒らせ給ひしに、正純其時驚きて正則の書翰を出されしに、證文の出し後れとて聞し召し入れられずとすへり。

二條の城にて土井大炊頭利勝藤堂和泉守高虎をめして此事を仰せ出され議決せり。

板倉伊賀守勝重此事は井伊掃部頭直孝に仰せ聞けられよとて直孝を召す、御前に參りて、福島左衛門大夫國を召放たるべき事故召れへ候やと申す、其事なり、誰か使にせんと思ふぞと仰せあり、直孝京都よりの御使ならば江戸に残れる者は是程の事辨へざるやと申事も候べし、只今江戸に罷有る者に仰出され然るべし、又正則を京に召れ罪の趣仰出され申譯あるか、又は國に引てもり思慮せよと仰られ候ても然るべく候、事により直孝罷向ひ打破り

申べしと申、和泉守若き掃部頭には似合たり、但福島もさすがの者にて剛の者餘多ければ小路軍になりていかにあらんと申、直孝和泉守は何方にて小路軍をしたるぞや、直孝が家には武功の老武者多し、古き戦の軍を聞しに、今川氏眞の許にて濱松の城主井伊隼人を氏眞の城下へ召し寄せ誅せられし時、小路軍になりて殊の外むづかしかりきといふ、唯一事を聞たりと云へば和泉守詞なし、台徳院殿いはれざる小路軍の論ぞとて先退出せられしが井上主計頭を以て再び直孝を召し仰にはわが思ひたる所も汝が言の如し、人々皆口々にひて一同せず、掃部が存る旨に従ふべし、さて誰をか使にせんと仰せなりしに、直孝か様の使久世三四郎坂部三十郎兩人よかりなんと存るなりと申せば、是も符合せりとの仰せにて兩人使たり、かくて酒井雅樂頭唯世太田善太夫を近付け、福島左衛門大夫領國を召放たるべきよし仰せ出されたり、福島はさるものなり、いかなる事をか仕出すべきと危く思ふなりと語られければ、太田いや何事かいたすべきと事もなげにいふ、酒井又いつものわうちやくなる詞かな、危き事と思ふなりと申されければ、太田ならざる事する福島にあらざ候、すべきをしらざる者こそさは候べけれ、福島は非道不仁の男なれども勝負の理をよくしりて候、男なれば何事も仕出さじといひしが、果して一言にも及ばず仰せの旨を奉りたり。

六月に福島領國を削らるゝ旨廣島へ聞えければ、福島丹波諸士を皆呼集め、預置れたる城なれば、公方の仰せなりとも渡し難し、又備後守殿爲なれば渡すべきかと評論す、上月文右衛門進出で人はいかにもあれ、我は本丸を預りぬる上は命あらん限は人に渡すべからずと申切たり、丹波心得ざる氣色なり、村上彦右衛門聞て福島上月兩人の思ふ所に同心の面々別々に判形せられよとて二通書て指出す、酒井主膳とて丹波が従子なるが座を立ち鎌田主殿を呼び、いかにおもふぞ、丹波は伯父なれども上月がいふ所尤なりといへば、主殿も上月に同心して判形をしたりければ皆是に同心しけり、其時上月人々皆かくの如くなれば、丹波が妻子を本丸に入らるべきやといへば、丹波即妻子を本丸へ入り、それよりわれ先にと妻子をこめけり、城を受取べき爲に諸將うち向はれしかば、丹波吉村又右衛門水野治郎右衛門二人を使として左衛門太夫領國召放たれ候により仰の旨は謹んで承り候、然ども主君預置れし城を、證據とすべき書簡なくて渡さん事は人々の存る處思ひやられ候、次に領國に入給はん事なかの若き奴原無禮の恐れ有り領國をさけられ候へと申送る、さらば左衛門太夫は程遠し、伏見にある備後守の書簡を證據にせんやと云はせらるゝに、父子たる事は論なしといへども、備後守が領國にも城にもあらず、備後守が言は用ふるにたらずといふ所に正則が書簡來りしかば、城門の大手にて書簡を受取りぬ、さて廣島は船入三所あり人多くさわがしくて士どもの妻子退去る時争ひあるやの恐れ

も候とて、一方をば人をとゞめ一方の口より退散す、城中の士は門の左に付禮服して並び居、城受取の使安藤對馬守重信は城門の右にそひて城に入りけり。

安藤城門に入る時、並び居たりし人々に向ひ、左衛門殿事申べきやうもなしと詞をかけらる、其時皆禮せしに御茶筥邊にてしかみの撞木杖をつきて、對馬守の詞を聞かたはらを見て禮しけるを、山崎甲斐守見てなみくならぬ人なりと知て、姓名を問ふに長尾出羽と答ふ、山崎退散の後家族を養ふべし、又他國に行中寓居せられよとて使をもて云はせられしに、出羽甲州の御事は承り及びたり、忝き旨を謝す、やがて森美作守忠政禮を厚うして招かれしかば、森家に仕へけるとなり。

丹波と文右衛門とは密に相計りて、初よりたてこもるべきといひて同心する人なき時は別にすべき道なき故に、事を二ツにして士の心を試みたるなりと、其比いひあへり、さて後城を守るに決せし時、丹波上月に向て吾と文右衛門腹切たらば何事も外にすべき事なしといひしとかや。

左衛門太夫罪せらるゝと聞て暇を乞たる士三十人ばかりありしかば狭間くゝりといはれけり、妻子を本丸へ入れたるは諸ごもりと名付け、妻子を城外に出し其身のみ城を守らんといひしに片籠りといふ、後に京都耳塚に札を立て三色に分ちて姓名を書て世の人に見し

ゆゑ、さまざまの面々は餓死に及びぬといへり、上月は祿五千石士大將たり、正則上月が志を感賞し、書簡をわたへらる、今度我等事御預に成候是に依て城を枕と存候よし心底察入候、然ども存寄有之候間早々城相渡し可申候、貴殿志之段不淺過分之至に存候とぞ書れける、大崎玄蕃長行も福島家の士大將なり、同じ時大崎は備後鞆の城に有り、秋田も下總同じく鞆に有しが、大崎を廣島にやりて己一人にて鞆を守り、討死して名を揚ばやどや思ひけん大崎に向ひ、江戸より城を受取べき使近き内に着陣すべし、とく廣島にこもられ然るべからんと云ふ、大崎聞て殿の下知なくて城を出んこと思ひもよらずといふ、秋田城中を廻り防戦の支度専らなりしに、山崎は柱によりて眠る外なし、人々大崎をそしりたるに大崎あざ笑ひ、秋田はかくゆゝしく防戦の用意するなるべし、われは思ひ定めある事有て萬事ひまなりといへば、其仔細を問ふに大將此城を守り日本を敵になし、萬に一つも勝べきや、あたら人々を徒に殺さんもいかになり、われ一人大手の門外へ出て城代大崎玄蕃と申者なりとて腹切ん後城を受取り給へ、城の人々残らずたすけられよと云て各たちの命に換るべし、何の用意の有るべきといひけり、かゝる所に正則の證書來り事故なく城を渡せしかば、大崎と村上彦右衛門眞鍋五郎右衛門と同じく紀伊の家仕へけり、大崎は若き時木村常陸介師春に奉公し、後正則に仕ふ、鬼玄蕃といはれしものなり、關ヶ原

の時尾州清洲の城に大崎を置れけり、石田三成大垣の城に入りて使を以て、福島家は太閤の恩篤き人なれば、今度無二の味方に候、清洲を明られよ兵を入れなんとぞたばかりける津田備中繁元はげにもとおもひて同心すべきに、長行はいかにもせよ殿の仰せなくて他國の兵を城にいれん事、存じもより候はず、しひて兵を寄られば一軍せんと目を見出して使を罵り追返しけり、かくて大崎門々を固く守りさまくばりしてかくと小山に告たりしかば、正則悦ばる、東照宮正則に清洲の守りに誰か有ると仰せあり、正則大崎玄蕃を留置て候と申處に斯と告來りければ聞し召し、大崎は世に譽れ有る者なり、さぞあらんと仰られしが、其後も清洲を敵にとられざりしは大崎が功なりと度々仰せありしとなり、紀州にて安藤帶刀大崎村上眞鍋に逢て武功を問ひたりしに、眞鍋は十四の時より軍をし、數度の功名をかたり、村上も十四竹子の軍より壬生川の先駈等をいひしに、大崎はわれ木村が許に小祿にて有りしが士大將になり、又福島の家にも士を下知し候へば左のみにぶうも候はずといへば、帶刀大に感じけるとなり、又一説に福島正則流罪藝州へ聞えければ長臣の者ども福島丹波がもとに相集り城を渡すべきや否やを論ず、村上彦右衛門通持殿流罪たりとも御存生においては御判形を見て國を引渡すべし、御判形來らずば此城を枕にして討死の外他事なし、但本丸は上月文右衛門預りたれば上月に談合然るべしといふ、上月聞て御判

形を見ずしていかでか本丸を渡すべきといふ、備後三次に尾關石見備中境東條に長尾隼人一勝備後三原に大崎玄蕃長行有しを、石見隼人をつばませ廣島三原の兩城を守り、各人質を城に入れ天守に燒草を積み大手搦手の持口を定めたり、安藤對馬守永井右近太夫中國西國の軍兵を率ゐ、備中の笠岡に着陣あり、丹波吉村又右衛門大橋茂右衛門を使として、主君の判形を見ずして城を渡すと迷惑なりと、竹中采女へいひ送れり、上使聞て狀を取寄すべしと返答有りて笠岡に滯留の所、正則の狀到來す、丹波已下是を見て城を渡すべしと相定む、笠岡より尾道へ八里、初は陸路と定められしを安藤船にて行くべしとなり、加藤嘉明聞て、上使は船にて早く惣人數は陸にて遅からん、上使より遅くばわれらは男をすてなん、是非陸をとすゝめらるれども安藤聞入れず、船の事を蜂須賀阿波守に相計らる、加藤も船を用意したり、せめて某の船に乗られよとすゝめ、此船に乗て上使尾道に到り、人數は陸を廻りけり、大崎玄蕃使を以て主君の狀廣島に来る上は三原も相違候まじ、然れども三原へ狀來らずして城は明渡し難しと竹中のもとに云ひ送る、安藤聞て跡先の思慮にも及ばず無二無三に城へ乗入り、上使討死の時爰に有り、城の門際にて上使討死せば續く者なしといふ事有るべからず、只今まで笠岡に滯留し又爰に日數を送べきにあらずと云切たれば加藤尤然るべしとて、子息式部少輔の先陣をはや押出さんとする處に三原の城へもはや

正則の狀來りければ、玄蕃事故なく城を渡したり、城に入りて見れば士足輕の名を書付けてさまごに配り置き城の隅々まで掃除して座敷には釜に湯を沸し、茶をひかせ置たり、翌日廣島に着ければ丹波今日渡すべきに城中掃除未だ終らず、下々の荷物ものけ兼たり、明日までまたれなんやといふ、永井聞て我かねて聞つる事有り城和平になり渡すに及て下人の荷物を片付兼たり、一兩日またれよといひしを、荷物は札を附て大手搦其手より出さるべし、相當のわたひに買取んとて城を受取りたりし、其翌日寄手の大將頓死しぬ、城中のいひにまかせば、城を持かへす變も計りがたし、危き事なりと云傳へたり、唯一刻も早く受取らんとて、大手へ進み行きて繪圖を披き、城内の物主共を呼集め、番所寄口を渡し濟み、城へ入りて飛脚をもて此旨言上ありけるとなり、古き人の詞に城の受取り渡は互に證據をとり、唯今事に臨むが如く心得べし、城主進退窮りたるなれば慎むべきなりといへり。

福島正則信濃國へ赴かれし時の事

正則配流の時正則の邸表の門前に蒲生下野守忠郷、裏門へは鳥居左京亮打向ひ皆士卒物具したりけり、芝の邸へは最上源五郎義俊打向へり、蒲生の士ども正則公命を承りたりと聞て、い

そぎ邸を出らるべしといひ入れければ、正則仰にも及ばずとて信州に赴くべきにて候とて、熊澤半右衛門守久上月新八兩人をよび、奥筋の風俗常にかさつなり、蒲生鳥居の者ども門内へこみ入るに於ては、吾士ども無禮を咎めて事の破も有るべきなり、汝兩人門内に有りて理を盡すべし、それとも聞入れずばかけ來りて告知せよ自害すべしといはれしに、半右衛門これは畏り難き仰をも承りけるといひも果ぬに、正則我今日公儀に脊さ、かく成果し故おのれさへわなぞるやと大に怒られしに半右衛門驚かず、新八に向ひて只今仰のごとく出羽奥州の風俗のがさつなるは勿論なり、立向ひいかに理を云ひたりとも聞入るべからず、其時かけかへりなば追立られ逃入りたると同じ事にて、末の世までも恥辱なるべし、さらばこみ入る奴ばら腕の力のつかんは切あひてそれを注進なし、其後殿はいかにもならせられんやと云けるに、新八ももどより同心に候と答へしに、正則悦で打うなづき、二人がいふ所尤至極なり、幾重にも穩に理を盡し、承引せずば志のごとくにせよといはれしかば、兩人畏り承り候とて座を立て門内に出ひかひけるに、事故なかりしかば正則信州に赴れけるとぞ。

正則茶道坊主が義氣に感ぜられし事

正則常に物あらく人を誅する事を好めると世の人もいひあへり、或時近習の士少の答ありて城

内島の櫓に押こめ、食物をわたへず餓死せしめんといはれしに、其士の恩を受たりし茶道坊主罪なくてかゝる有様をいたみ、潜に夜焼飯を携へ行きたり、彼士われは罪ある故に斯成たり、汝只今のふるまひを殿聞し召されなば、われよりも罪重からん、又飯を喰たりとて命助かるべきにあらざれば、とく歸れといひしに、茶道云けるは同じ罪に行はるゝとも後悔なし、われ先に既に殺さるべき事の有りしに君の救ひにて一度たすかり候ひぬ、恩をうけて報せざるは人にあらず、こなたも又よわげなる心おはして吾志を空しくし給ふ事こそ口惜けれといへば、彼士悦んでさらばとて是を食す、夜ごとにかくの如くしたりけり、程經て死したるならんとて正則矢倉に行れしに顔色少しも衰へず、正則さては飯を送りたる者あらんと怒られしに、茶道來り某こそ送りたれと申す、正則はたとにらみて、おのれ何故にかくしたるや、頭二ツに切りなんと膝立直されし時、茶道少もさわがず、我昔罪を得て既に水せめにあひて殺さるべかりしに、彼人の申ひらきたりし故今日まで思ひがけず命存らへ候ひき、其恩を報せん爲毎夜しのびて飯をはこび候といふ、正則怒れる眼に涙を流し、汝が志感するにあまれり、かくこそ有るべけれ、彼士をもゆるすべしとて其まゝ矢倉の戸をひらきて罪を宥め茶道をも深く賞せられけり、されば暴悪の人と世に稱しけれど、かゝる義に感ずる事の切なる故に士のおもひ慕ひて力を竭し、正則の爲に身をすて、奉公しけるもげに故ある事にこそ。

井伊直孝直諫の事

台徳院殿諸大名をめし、土井大炊頭利勝をもて來年嗣君に世を譲らせ給ふべき旨仰出されしかば皆祝し奉りたる處に、井伊直孝默然として有りしかば利勝かたへに招き、いかなる事ぞと問ふに天下亂の本たりと存ずれば目出度事とは存もよらずと申す、子細はいかにと問ふ、されば其事に候、大阪の亂幾程なく江戸石壁のいとなみ日光の土木天下の諸大名以外の外に困窮せり、又世を譲らせ給ひなば諸大名献上奉る物に費多く、將軍宣下の饗禮を取行ふべし、愈困窮に及び下を剝民を苦むるの外更にせん方なからん、是民のなげき亂のもと、存するなりと申されしかば、利勝尤なり、此旨有のまゝに申べしとて直孝を御次の間にともなひ利勝御前に参りて、しかくのよし申たりければ、即直孝を御前に召れ、汝が申所尤なり、されども既に仰出されたれば易難し、猶是より憚る所なく申せと仰られしかば、直孝臣が申むね然るべからずと思召し候により聞し召し入れられず候か、臣が言尤と思召しなば御用なからん事仰ども覺え候はずと申されけるに、暫く御詞なかりければ、利勝臣既に年老ぬ、壯年の者直言を申候事治世長久のもとに候、明日諸大名を召し掃部頭申旨尤なるにより相とせめらるべきよしを仰せ有りて然るべう候ものぞと申されければ、台徳院殿則諫に従はせ給ひけり、其時直孝臣が申旨用ひさせ

給ひ辱き旨謝し奉りて退出せられけり、台徳院殿の諫に従はせ給ひし事、直孝の直言美を盡せりと人申けり。

又一説に、台徳院殿世上太平といへども嗣君いまだ幼穉におはします、總郭を築るべしと仰出されしに、直孝一人とかくの詞なかりしかば、各退出の後いかなる故ぞと問せ給ふに、仰の旨心得がたく候、嗣君幼穉におはしませども治平の時なれば、郭滅せられ候てこそ人々安堵いたすべけれ、嗣君幼穉により郭を増れなば、人々危ぶむ心を生せん事必然なり、且御上京も候て過分の財用を費し、五三年も儉約ならざれば償ひ難く有るべきに、又費を多くなしたらんには、郭は堅固に成候とも武備有るまじく候と申されければ、翌日諸大名を召し、掃部頭申旨尤なるにより、昨日の仰せ出されは相輒らるゝのよしを仰せ出されたりといへり、孰れか是なる事をしらす。

明の鄭芝龍援兵を乞ふ事

附 稻葉正勝諫言の事

大猷院殿の御時國姓爺日本に援兵を乞ひければ、諸長臣を御前に召出され、是を捨置れなば日本の恥なり、援兵をつかはさるべき旨仰られしに小事たらざる故に各とかくを申かねられし處

に、稻葉丹後守正勝援兵の事然るべからざる旨再三申されければ色を變じ内に入らせ給ひけり、明日又召出され昨日申せし處思召にかなはざりしが、つくづく御思慮有りしに申處理なり援兵に及ぶまじき由仰せ出されたり。

明の末鄭芝龍といふもの萬曆年中日本に來り、肥前松浦の平戸にあり、又長崎にもありて崇禎年中に明帝より召返されけり、平戸に在し時妻とりて子を生む、其子を鄭彩といふ芝龍官を得て長崎の奉行に告て妻子を迎ふ、公に申てゆるされを蒙りたり、明滅し時大祖忠苗裔を福州に建て元を隆武と號す、清と度々戦ひに及で勝難き故に援兵を乞ひたりしなり、明帝朱姓を賜ひければ國姓と稱し、爺は老成を尊むの詞なり、芝龍が事明末の書に詳にしるせり。

大納言頼宣卿援兵の總大將を願ひ給ひし事

正保元年は明の崇禎十七年なり、明朝亂れ陝西の李自成などいふ者盜賊の長となり、一揆を起し北京へ攻入り、明の天子も自ら縊れて崩じ給ひけるに、福建の鄭芝龍書簡をさへげて加勢を乞けるに依て、紀伊大納言頼宣卿異國より加勢を頼み申事日本の武威四海にかゝやくとも申べし、諸浪人を集め候ひなんには數十萬も候べし、それに西國中國の大名小名差加へられ然るべ

からん、拙者に總大將仰付られ候はゞ何事の悦びか是に過ん、異國に攻入りおもふまゝに日本の武勇を見せ候べしと願ひ奉り給ひけれども、御加勢の事やみければ、兼て仕へ申せし武功の物しども、清兵と一軍して老後の思ひ出にせんといさみける、人々殘多き事よといひあひけるとかや。

酒井忠勝直言の事

大猷院殿の御時晴の猿樂有らんとする前夜に、大雨にて御前に見えわたるべき塀の白土壞れしに、

一説に朝鮮來聘使者出べき夜、櫻田の矢倉の窓の白土やぶれたるともいへり。
いかいせんと人々云ける處に、松平伊豆守信綱白き奉書の帑を以てはらせられしかば、皆其捷智のはどを感じあひける處に、酒井讃岐守忠勝一脱土井大炊頭伊豆守に向て、讃岐守が存る處は貴人にはならざる事はならざると知らせ奉るぞよき、仰出されんに何事も仰のまゝならんと思召れんには、驕奢をみちびき奉るにてこそあれ、其時はいかゞし給はんといはれしに、信綱ふかく心服せられけり。

墨田川に橋を掛られし事

江戸の墨田河に橋なかりしを酒井忠勝申て橋を掛られけり、要害の爲あしかりなんと云人あり、忠勝天下を治むるに人を以て要害とすべし、人苦んで何の益か有るべき、人を苦めて要害とせば、江戸は一日ももちこたへ難しと答へられけり。

板倉重宗京都所司代の事附板倉勝重器量の事

板倉周防守重宗卿の所司代たりしが、江戸に下りける時松平信綱對面し、公方にも政事に御心を盡され候、京都の事も委細に聞し召し度候、是より後は同職にさし越れ候書狀京都の事詳に記され候へといひしに、周防守百二十里の行程隔りたる事、何程に聰明におはしますとも及びごしなる事は得知し召れし、其故に周防守を京に指置れ候事なれば申上るに及ばすと答へたるを、さては周防守は致身ものなりと感せさせ給ひけり。

重宗の父を伊賀守勝重といふ、初は四郎右衛門とて祿五百石なりしに、京都の所司代を仰出され二萬石賜はりけり、是は本多正信が薦め申せし故となり、勝重仰を奉りて佐渡守に向ひ、重職の任を身にうけ候事に候程に、歸りて妻なるものに相謀りて、若同心せずば

職を固辭申上べきよし申けるに、正信打うなづく、勝重家に歸りてかゝる仰を奉りしなり、重き任なれば内縁を頼み訴する者あるべし、公私に付て口をそへられずば、仰を畏り奉らん、もし少しにてもいゝはれんとならば、只今其よし申て京には赴き候はじといはれければ、こはいかなる事をのたまふぞ、仰をかしてまらせ給へ、女の身いかで公の御事にたづさはり申べきといはれしかば、さらばとて出る時はかまの腰をねぢらしてさられしを、それはいかにといはれければ、勝重さればよくあるべしと思ひしなりとて重々にいましめて後仰を奉りたりと世にはいひ傳へたり、勝重尾張の惠阿寺といふ曹洞宗の長嚴和尚が弟子にて長祐といひしが還俗して四郎右衛門といひけり、勝重嫡男を重宗次男を重昌といふ、二人とも江戸にあり、或時大猷院殿訴訟をひとつ巧に構へさせ給ひ、二人をめして判断せよと仰せ有りけり、重昌仰を奉り理非分明に決定して退出す、重宗や久しく思慮して後、重ねて決断の旨を申上候はばやとて退出し、二三日過後御前に参り判断の旨を申たるに、弟の重昌が申たるに相同じ、人々兄にまさりたる重昌なりとほめあへり、其後勝重京より江戸に下りし時、大猷院殿かの訴の判断の事詳かに示させ給ひ重昌が才器を御感わり、勝重承り内膳正はわか氣にて思慮なく候、周防守は國家の政事を取候とも其任に叶ふべし、其故は訴を判断する事は政事の、一ツの條目にて候、政事は至て重き事にて一言を以

て天下の利害にかゝり候、苟にきはめ申べき事にはあらず候、政事は大事とくりかへし思慮いたし候へば、重宗は政事をとり候とも仕損すまじく候、只打見たる所を以て己が智慧を人に見せんと存ずる所は重昌がわか氣と申物にて思慮なく候と申ければ、御感淺からざりしとなり、其後伊賀守年老たり、所司代の職に任すべき才をえらび候へ、汝が替りにせばやと仰せ有りしに、勝重子にて候周防守所司代の任にかなひ候よし申たりければ、内々其ごとく思召されしと仰せ有りけり、周防守は斯どもしらすで御小姓にてありしに、父伊賀守がかはりに仰せ出されけり、周防守上京せられしに、伊賀守衣服をあらため、左右の職に居る人を並べ置き、記録をも悉く取出し、周防守を上座にまねき、謹で江戸靜謐の事を窺ひ、今日より所司代なれば萬事引渡し候といふ、周防守只今まで御側に仕へ奉り、世の有様ゆめく存候はず、仰にも父を見ならひ候へとの事なりと申されしに、伊賀守いやく其職に居るべき者なりと擇出されし故、かゝる重任の仰は奉りたりと覺ゆるなり、人の心は面の同じからざるが如し、我に付そひ居たればとて我にはなる、時は自ら決斷するより外の事なし、汝が不才を隠しなば、五畿内はいふにや及ぶ、西國までも禍有るべし、ちつともかざる事有るべからず、只不才とわらはすを第一とすべし、不才をしろしめされなば其任に當るべき人を擇ばれて仰せ付けらるべし、更に恥辱にあらず、今日より所司代の職

に居るべしといはれしかば、周防守其詞に隨はれぬ、勝重は町家をかり置きたるがそこに引移り、碁を打て口ずさみに今度の所司はさびしいものよ、われをあひしらひたるが如くならば、必罪せられなんとて碁を打てありしとぞ。

重宗訴訟を聞かれし心得の事

周防守重宗京都の職に有ること凡三十餘年、人敬ふ事神明の如く、愛する事父母に似たり、父子誠に同じ名臣とぞ聞えし、されば重宗は寵恩も殊に厚く從四位上へのぼり、官左近衛少將にすゝまれけり、重宗職に任じて後毎日決斷所に出る時、西面の廊下にして遙に伏拜む事有りて決斷所に出で、此所に茶磨一ツすゑ置き、わかり障子引たて、其内に座し、手づから茶ひきて訟を聞く、人皆不審しあへりけるに、遙に年経て後問ふ人有りしに重宗答て、先決斷所に出る時、西面の廊下にて遙に拜する事は、愛宕山の神を拜するなり、多くの神の中殊に愛宕は靈驗新なると聞きし程に所願ありてかくは拜しぬ、其所願は今日重宗が訴をことわらん心に心の及ぶほど私の事あらじ、若わやまりて私の事あらば忽ち命をめされ候へ、年頃深く頼み奉るうへは少しも私心有んには世にながらへさせ給ふなど毎日祈誓するにて候、又訴をわかつ事の明かならぬは我心の事にふれて動くが故なりと思ひなしぬ、よき人は自ら動かざらんやうにこそあら

めど、重宗それまでの事は及び難く、唯心の動と静なるとを試るには茶を挽てしる、心定りて
 備なる時は手もそれに應じて磨のめぐる事平かにして、きしられておつる所の茶いかに細や
 かなり、茶のこまやかに落る時にいたりて、我心も動かぬと知り、其後やうやく訴をわかつ、
 又明障子を隔て、訴を聞事は凡人の顔かたち打見よりにくさげなるとわはれましきとあり、
 誠しき有かだましきあり、其品多くしていくらと云敷をしらず、見る所の誠しきと思ふ人のい
 ふ事は眞實ときかれ、かだましきと見ゆる人のなす事は何事もみな偽と見ゆ、わはれましき人
 の訟は狂られたる所有るかと思はれ、にくさげなる人の争ひはひが事ならんと覺ゆ、是等の類
 は目に見る所に心のうつされて彼詞を出さぬうちにはやわが心の中に邪ならん、正しからん、
 よからん、直ならんとおもひ定むる程に、訴の詞に及びては、我おもふ方に聞なす事多し、訴
 のなるに至てはわはれましきに憎むべきあり、にくさげなるに憐なるあり、誠しきに詐有り、
 此たぐひ殊に多し、人の心の測りがたきかたちを以て定ん事叶ふべからず、古の訴訟を聞くに
 は色を以てすといへども、それは重宗が及ぶべきにあらず、又さらぬだに訴の庭に出んはおそ
 ろしかるべきに、まして生殺を司れる人を見てはいふせくて自いふべき事をも得いはで罪にも
 科にもあふ人あらんと思へば所詮互に面を見られもせぬにしかととおもひてかくは座をへたつ
 るにてこそあれと答へられしとぞ。

板倉重矩の事

板倉内膳正重矩のいはく、

重矩は伊賀守勝重の孫にて、島原に於て討死有りし内膳正の子周防守重宗の従子なり、晴
 にて長卑く以の外見ぐるしき人なりしかども、有徳賢才のきこえありて、寛文二年祿二萬
 石増賜はり大阪の御城代たり、寛文五年大雨にて雷天主に落て火出て焼上りしかば、大
 阪のさわぎ大かたならず、萬治三年雷火有りし時、鹽硝の藏に火入て死人多かりし事を聞
 きたりし故なり、内膳正町奉行彦坂壹岐守石丸石見守兩人に鹽硝は皆濠中へ入れたるよし
 ふれさせられしかば騒ぎ静まりけるとぞ、内膳正豫警衛の備かたく下知し置れし故、尼
 ケ崎の青山大膳亮、人數をひきゐる大阪に來り、其備を見て深く感せらる、此旨江戸へ聞え
 しかば、御書を賜はり稱美ありければ、内膳正即ち家士を集め、是皆汝等が功なりと讃
 れしとぞ、同年の冬江戸にめし一倍の祿を増賜はり、執政の職を仰蒙られけり、同八年京
 都所司代牧野佐渡守正親のかはり仰出さる、内、しばし内膳正をもつて京都の事を司ら
 しめ給ふ、上京の後参内の事あり、此禮儀御簾を半卷上らる、例なれども、内膳正恐懼す
 べき事なれど、天顔に咫尺し奉るの名有て其實なし、御簾を高く卷上られ候へと奏聞有

りしに、尤なりとの勅にて御すだれを高く捲上らるゝ事内膳正一人なりしとぞ。其後又一萬石増賜はり、下野の烏山の城主たり、重矩若きより詩歌に心をよせ、學問を嗜み、熊澤伯繼が門人にて嘉言善行多かりき、京都にて加茂川洪水の時、白川より加茂川四條の間へ堤をつかせ、また鞍馬の往來市原といふ所に水流れ、往來の困なりしかば、田地をもどめ川筋を除き、山路を開かれしかば、内膳死後に及て此地の百姓ども仁徳を慕ひ、如意谷に内膳正の位牌を設け跡をとふらひしとなり。

財寶を奪ひとる者をむかしより盗と名づく、我つらくおもふに大名に盗多し、下士民の善あるをあげずしてすつるは是人の善を盗むにあらすや、親族朋友にも善あるを稱せずして過るは是も人の善を盗むなり、中にも善たる人は下の善をわぐべき職に有り是天より命せられたる任なり、人の善を盗みて天命の任をわぐは盗の大なるものなり、われもし人の善を盗んやと是のみ心を盡すよと語られける。又伯父周防守が語りしに、人の生質さまざま有る中に、見たる處のにくき者あり、愛すべき人あり、此にくき人を見ては善言もあしさまに聞きなすぞかし、況や直言をいへばいよく憎むものなり、又愛すべき人のいふことは、よからぬ事もよく聞なすものなり、これ心得べき事なりと、父なりし伊賀守常に戒られしは格言なりと。又語られしに、儉と吝と相似て其本大に異なり、儉は事の費をいとひて奢侈ならず、用ふべき事に財を用ふる

をいふ、吝は是非の論なく一向に物を惜むなり、又戒められしはわが心に叶ひたる者のいふこととは何事もよく聞え、行路のよからぬも心づかず、又我事を憚る所なく直言する人は、道理の至極せるをも外になし、其詞の無禮を罪とす、是皆事を過つのもとなりと、其前一萬石の中甚貧しかりしに、新に儉約の法を定め、先自らの事を第一に守られし時の歌、
もどめなき心もこともおのつから任せて過る身こそ安けれ

毛利勝永大坂に入る事

關ヶ原亂の後、毛利 豊前守勝永は土佐へ流罪せられしに、大坂に事起ると聞き、或る夜妻にいひけるは、我罪在てかゝる所に居住し、汝にも斯うき事を見する事ぞとよ、されども我志あり詞にあらはしがたしと語りければ、妻のいはく、世の變はいかなる人もはかるべからず、かく成はてたりとも更に悲しむべきにあらず、妻は夫に従ふ道とこそ聞て候へ 其御志を承らばやとい、勝永云く我武名を傳へて數世に及びぬるに、かく沈み果なん事口惜き事なり、命を秀頼公に奉りてんと思へども、我愛を忍び出なば愛がうへにも猶うき事や御身の上に加らんと涙を落しけるに、妻つくづくと聞て打笑ひ、弓箭取の妻となりていかでかゝる事をおそれなんや、はや此曉船に乗て武名を深くし給へ、君のため家の悦び何事かこれにしかん

わらはが事な思ひ給ひそ、いかにもなり給ひたらば、此島の波に沈み候べし、運命めでたく頓て逢奉らん、急ぎ給へといひければ、勝永悦んで小舟に取乗り大阪に至り罷城しけり、其後山内對馬守より豊前が妻を固くいましめおき、かくと告られしかば、東照宮聞し召し、勇士たる者の志感賞すべきことなり、豊前が妻罪する事有るべからずと、懇に仰有りければ、豊前が妻大阪の城中に入りけるとぞ。

一説に父壹岐守勝信も土州に流されしが病死しぬ、勝永土州に在りて年月を送りけるが、時々其従士宮田甚三郎を大阪にやりて、其従弟なりし大野修理亮が方まで秀頼の無事を問せけり、かゝる所に大野より秀頼兵を起すの旨告やりしかば、勝永土佐守忠義を欺き、關東へ忠を致すべし、先非を改め舊領に復せん志なりと云て、土州より船に乗んとしけるが、甚三郎を呼て我大阪に着たらば嫡子式部次男藤兵衛ともに山内家より殺害すべし、如何すべさといひしかば、宮田夜に入て陸に上り、式部が乳母の子小原文右衛門と相謀り、難なく式部藤兵衛をつれて舟に乗りければ、勝永悦んで船を出し、ともに打つれて大阪に至れりといへり。

池田忠繼朝臣士を懐けられし事

池田左衛門督忠繼は東照宮の御女北條氏直の北の方にておはしけるが、北條家亡びて後國清公に再嫁ありて生れ給へりしかば、東照宮の御外孫なり、大阪冬陣には十六才なり、一旦和平に成て師を返へされし後軍に従ひし士ども寄集りて物語する時、一人の云ふ若き士の此度の軍に日比と大に違ひて諸事の下知兎角いはん詞もなし、中にも今まで詞に出さぬ事一ツあり、仕寄場にて寒氣はげしさにさぞ苦勞ならんとて、小き手樽に酒を入れて給り、又綿入の肌着を賜り、此事ゆめり、人にな泄しそと仰られし志の忝さ忘れがたけれど、語るなど仰ありし故今までは泄さうりしといへば、一座十四人手を打てわれ、其通なりき、我一人のあひしらひなりと思ひしに、皆斯の如きはためしすくなき事なりと感じあひけるとぞ。

芳賀内藏允武者振の事

大阪冬の城攻に興國公の攻口は天満橋の邊なりしに、先陣の士大將波多野掃部須加左京竹把を付るに兵少くして夜にならではいかにも調ひがたく候、日のうちとならば兵を増給はり候へといひしかば、其様を見て來れとて芳賀内藏允先陣に行き芳賀は齒染の羽折着たり、先陣の兵ども家屋の焼後土藏の蔭に控居て、橋より上にするしの株の候見られよといへば、芳賀すゝみ行き、芳賀近頃籠せらるゝ者ぞ武者ふり見よといひあへり、芳賀馬よりおりて徐に川岸を歩むを

城中より打出す鐵砲川水にひびきわたれり、芳賀ちのともさわがす足の敵をかぞへて歸り、いかに兵少くはかなひ候まじといふて旗本に歸る、この芳賀はもと祐筆なりしが、岐阜落城の日國清公勝軍の書を芳賀に書せられし時、麓に將机に倚ておはす、芳賀其前に跪て在しに、城中の燒たつる火鹽硝の庫に入りて其音山嶽の崩るゝがごとく、敵押寄るかど騒ぎしに、芳賀が筆把て書し様少しも駭く体なかりしかば、事によせて試らるゝに器量大なりければ、頻に用ひられて祿二千石玉はり後國政を執しに、度々直言を申諫め争ひてことよく治りけり。

佐竹勢今福口を攻る事附杉原常陸武功の事

大阪冬陣に佐竹義宣今福口を攻る、士大將澁井内膳先陣して柵の木を打破る、佐竹に付られし軍の目付安藤治右衛門屋代越中守先がけして、安藤さはやかに物具せしを柵の中より鐵炮にて肩の上を打かする、安藤折しきたれば頻に打かけて立上り得ず、屋代父子伊藤右馬允駈來り、いかに安藤日比は年若しとて自慢せしにはたがへりといひて柵を打破る、木村長門守重成城より助け來り、柵を隔てにらみ合たり、木村は黒き平袖の羽織を着し、柵に取付てあはれ鎧にてたゞさ崩さばやといへども、鐵炮の足輕ちり亂れて來らざりしに、井上忠兵衛といふ者、鐵炮持せ馳來りければ、あの鳥毛の羽織着たる敵は物々しよ、打落し候へと下知して柵の木に鐵炮を

もたせて澁井が胸板を打通す、木村おめいてかゝり寄手を追崩す、平塚五郎兵衛澁井が屍をよみてえしを、木村従者首を取らんとすれば、平塚其のひえたる首何にせんといふて敵を追たつる、義宣使者を上杉景勝に遣はして加勢を乞はれしかば、杉原常陸廣合に兵を出す、杉原は大坂に師を出す時、吾物具以外の外ふるくて、日本國の弓取に笑はるべしとて猿樂の半臂を用意せしが、其日物具の上に着て腰の緒を腰に結びてさげ七百計をひきゐて川の中の洲に進みしかども、水深かりしかば玉薬を惜まずこみかへく城兵を打しらす、軍兵を下知するに進退思ひのまゝなり、杉原が士卒を下知する有様を、諸將の陣なりを静めて見物す、譬へば馴たる雀の子を呼に似たりといひあへり、東照宮遙に杉原が出立を御覽じ、上杉が家は古風なるゆゑ鐵直垂を着たるなるべしと仰せ有りしは半臂を遠く御覽有りての事なり、其後上杉家の士大將に御威狀を賜はる、杉原御前にて謹で上を包みたるをとき讀終り始の如く包み、本多正信のたを見やりて感じ仰候詞殊更に忝く覺え候、景勝武功を賞せさせ給ふゆゑに陪臣までかゝる仰を承る事謙信弓箭の遺風を天下にあぐる所に候といひて退出したりけり。

上杉景勝志貴野口合戦の事

志貴野にて上杉景勝先陣柵をやぶり、井上五郎左衛門を始として敵百計打取大和川まで攻入る

時、景勝直江を呼で城兵援來るべし、先陣はいかにと問ふ、直江先陣は士卒少く候へども安田上總介二陣は隅田大炊介長則に定め候と申す、いや〜隅田を先陣にして二陣を安田に繰かへよと下知せらる、是激の道なるべしかくて安田は先陣を二陣にくりかへられ口惜き事なりと齒がみをなし、隅田が軍兵は安田に踰て功名せんと勇み兩陣とも勇氣倍しけり、廿六日曙に隅田押寄多切豊後守真先かけて首を得、北條清右衛門等も討死し、遂に打勝て井上五郎左衛門を討取り、柵二重破りたりけるを城中より大軍我先にとはせ向ひ、大野修理治長木村主計頭宗重渡邊内藏助糺竹田永翁等競ひかゝる、隅田は百挺の鐵砲を一の木戸口に立固め打たてさせければ、城中よりの加勢真黒に成て切てかゝるを半時計さへて戦ひ、鐵砲の物主石坂新左衛門一足も引ず討れ、終におし立られぬ、二陣の安田は兼てよりかたへに陣をおし出せし故、隅田が士卒景勝の旗本前へ崩れかゝる、景勝三陣の士大將杉原常陸親憲金の輪拔の立物打たる首を着、金の鎧の馬印を取て、大將の仰を隅田人數兩方へわかれ候へと呼はりて馬じるしを打ふりて下知しければ、隅田が兵忽ち兩方へわかれて引取りけり、杉原敵をおもふ様に近々と引受て前に立ならべたる鐵砲を雨の降ごとく打かけしかば、安田二町あまり脇にひかへたるが横あひに鎗を入る、隅田も忽ちもり返し、城兵を追崩す、隅田は初に討負たるを口惜くおもひて、從者五人にて敵の中に紛れ入り、首二ツ取て歸る、景勝進んで押詰んと見えしかば久世三四郎乘

來り、俄に城を攻ば死傷多からん、後陣の堀尾山城守忠晴と入かはられよと仰ぞ候といふ、景勝聞もあへず弓取の先をあらそふ時一寸ましといふ事あり、今朝よりはげしく軍して取敷たる所を、人に譲りて退く事や候とて少しも動かす、丹羽長重景勝の陣に行て見れば、景勝將机に倚て城中をはたと睨み、物具もせずして青竹を杖につき左右に軍兵三百計鎗を横たへ、跪きて紺色に日の丸の旗毗を文字の旗二本に淺黄の扇の馬じるし押立、しづまりかへりて長重を見ひきもせず、長重も勇將なるが後に人に語りて景勝を譽られたり。

上杉家の士大將に御感狀を賜ふ事

東照宮志貴野にて功名せし景勝の士大將に御感狀を賜はりしに、安田上總介は横鎗を入れて城兵を打破りし功大なりといへども、直江と不和なりし故に其功上に達せず、御感狀賜らざりしかば其後人に向て此度御感狀を拜受し給ひて目出度候、上總一人は申立る人なくてさばかりの武功ひなしくなりて候、されどもおどりし事は候はず、是ほどの事武功は申達するまでもなし、且殿の御爲に命を捨て軍仕候露ちりばかりも公方のためにする事に候はず候へば、是より後も殿をこそ大事におもひ候へ、公方の御感狀何條面目に存べきやとり語しとぞ。

井伊直孝陣代の事

大阪の事起りし時井伊掃部頭直孝を召て、兄右近太夫直勝の勝陣代を乞仰出されける。直孝は直政の二男にて、母は松平周防守康親の從者の女なり、直孝六ツに成し時母の方より直政に送りけるを百姓の許に置れけるが、十三の時民家に盗の入てさむを聞き、かけ出て、暗夜の事なるに盗山へ登りけるを追かけて高股を切て落されけり、かくて人あまた來りて、盗をば打殺しぬ、直政に申せばよび寄て冬の事なるに北に向たる座敷の雪の入る處に跪かせて置れたり、雪ひさを降うづめどもちつとも動かす、直政悦んで呼入れ、犬の子をあたへられけり、十四の時直政病重くて死に及ぶ時、其の生さきやしるかりけん、應に甲を添てかたみにあたへらる、直孝は上州にて一萬石を賜はり、六番頭を命せらる、直政の長子父の跡を嗣ぐといへども多病にて公事勤勞しがたしといへり。直孝しばらく仰に任せず、まづ宿所に歸り、彦根の長臣を集め、仰はしかくなれども各我下知に従ふべくは陣代を勤むべし、しからずば仰を固辭し申すべしといへば、皆いかでか下知に背くべきといふを聞て後、仰に任せて陣代仕候べしとぞ申されける、井伊の家に兵庫といへる物しの年老たる有しを直孝呼出し、汝日比軍術に長せりと聞く、相傳ふべき事やあると問る

に、兵庫年老候て今日をしらざる体戰場に打出ざる事遺恨に候とて、懷より一卷の書を取出し、大將たる人志を決断して狐疑なく下知あるべきかと問ふ、直孝聞て效はいかにも我思ふ處に他岐なく決断すべしと答へられければ、兵庫臣が年比思慮せし處只是のみにて候、兩端を保持して兵の道行はるべからず、外に申べき言なしとて其書を焚けるとぞ。元和元年の春直政の領國直孝相嗣るべき旨仰出さる、安藤帶刀をもて再三辭し申せども許されず、十八萬石を分ちて直勝に三萬石直孝に十五萬石賜はりぬ、其後五萬石増與へられ、台徳院殿、大猷院殿五萬石づゝまし賜はり、中將に任せられけり。

本多伊豆守出陣聯句の事

越前忠直大阪に師を出す時、士大將本多伊豆守僧を集めて聯句しけり、將机によりて閑居しが勇將麾下無弱卒といひしに、かたへより高祖帳中有張良といふを聞て、門出の目出度さよとて打出けり。

東照宮御父子御陣替の事

大阪冬の軍に、東照宮は茶臼山、台徳院殿は岡山に陣所をうつし替らるゝ事あり、諸將も城近

陣を寄る時、若騒ぐならば城より撃て出る事あらん、陣を整へしづまり候へと五の字の御使番乗めぐりて仰を傳へし處に、井伊直孝陣所を替ると鐵炮を押ならべ城中に打かけ、関の聲をあげ只今城に攻入らん体なりしかば、台徳院殿直孝兄が陣代となり人そばへしけるよと怒らせ給ひ、本多正信を東照宮の陣に使を命せられけり、御前に参り未詞に出さる處に、直孝は父の子なり、けふ陣所を換る時味方を競はせんとて鐵炮をうたせしよと仰られければ、正信承りかくまで思召の同じきと申もあやしきはどに候、直孝がふるまひ感じ思し召し参りて其由を申せと仰候ひきと申て出にけり。

後藤又兵衛花房助兵衛見切暗合の事

大阪にて城兵船塲を焼ける時、後藤又兵衛備前勢必つくべし、若き人々待伏して功名あれといひければ、後藤が詞たがはじとて待伏しける所に、敵つけ來らず、後藤が功名だてと嘲りけり、後藤積りも時々はたがふ事あるものなり、備前勢付ざるは花房助兵衛まだながらへて居るならんといふ。

按るに此時備前は池田左衛門督領せさせ給ひたれば、花房が事を司るべきにあらず、若や花房をもて付給ひしかそのいはれをしらす。

此時戸川肥後守達安を始として烟まざれにつけんといひしに、花房聞て城中に後藤といふ功者あり、必兵を伏置たるべしと止めて付ざりけり、烟消て見れば花房が云しごとく果して敵待かけ居たり、其後和平に及で肥後守が弟彌左衛門後藤に對面し、様々の物語する時、船塲の事を云出し、備前勢の付ざるは如何にと問ふに兩人のはかりし事更にたがはざりければ、人々聞傳へて稱しけり、花房助兵衛職之は秀吉の心に忤ふ事ありて、佐竹が許に流され居けるに、東照宮御心を付られ、花房が子を武州長榮山本門寺の上人に預け置きしを、後に榊原康政養ひて飛彈守といふ、助兵衛老衰席上にも人に扶けらるゝほどなりしに、東照宮の仰にて大阪の軍にも従ひたり、乗物にて攻口に向ひ、急ならば吾乗物を敵に向てすてよ、爰を墓と思ひて出たりとぞ云ける、東照宮御打廻りの時、道のかたへに乗物を置き其中に蹲居したりしを、戸川肥後守かくと申しかば、花房大事の時とおもひ、武を好む事老ぬれども志はおどろへず、誠に大丈夫なりと仰せられけり。

大阪にて台徳院殿諸將の攻口御巡見の事

大阪にて台徳院殿諸將の攻口を御打巡はりありて、有馬豊氏が陣所にて井樓に上らせ給ふ時、御馬印を城中より見て火矢大銃を打かゝる、井樓を下させ給へと申せども聞かぬ体にてましま

す所に、水野日向守参りて物見と巡見とは別に仔細の候、陣々悉く御覽あるべければ一所にのみましますべき様なし、志貴野を御巡り然るべしと申せば則ち井樓をおりさせ給ひけり。

東照宮志貴野御巡見の事

大阪にて東照宮志貴野を御打巡りあり、上杉の攻口にかゝらせ給ふ時、鐵炮をならべ立てたるが一同に城に向て打かけたり、大將巡見の時の故實なりといへり、景勝攻口の陣所道筋に砂を盛り水を洒ぎ、さらびやかに掃除して、景勝直江只一人打具して平伏して御目見申たりければ、東照宮いかにみな骨折たるぞと御詞をかけられしに、童部いさかひにて骨折候事もなき旨答へ申されけるとぞ。

小田切所左衛門平野彌次右衛門武者振の事

眞田が本丸を攻る時小田切所左衛門、

一説に嘉兵衛といふ、後齋伊豆といひ、又道仁といふ、武者修行して名高し長久手にて南はだのはたらきあり、松川の軍にも武功あり、加賀利常に仕へて大阪の軍にも従へり。城きはに近く寄たるが鐵炮にあたり、其玉をとり出し脇に並びたる平野彌次右衛門に見せて打

笑ひ、物語する体平生の如し、又玉一ツ額に中るを取出したれば、血流るゝに肯は大事の物よ、此肯は信玄公の許に有りしなりといひて、少しもひるみたる色なかりしとなり、平野も小田切と相ならびたる武者ぶりを敵味方ともに譽めへり、平野が従者五右衛門といふ者矢面にたち、鐵炮頻に打かけしかば、かすり手十八まで負たる大剛のふるまひを城中より高聲に稱美して、姓名を承らんといふ、平野則ち五右衛門に吾氏を譲わたへしかば、五右衛門大音あげて平野彌次右衛門が下人、五右衛門といふ者は是まで付たる褒美に只今氏を譲られて平野五右衛門と申なりと名乗けるとぞ。

眞田が丸を攻たる時の事

十二月四日雪深く眞田が丸へ加賀の陣も井伊直孝も攻寄ける事、軍令を背きたれば如何すべきと、台徳院殿仰せ有りしかば、先伺奉り然るべからんとて本多正信東照宮の御陣に参りけり、東照宮いかに今朝は將軍にも悦びに有るべきよ、掃部頭堀原へ押詰め敵に威を示して味方を勇め立てたるよと仰せ有りしかば、急ぎかへりてかくと申す、頓て御本陣に御出あり、其道筋掃部頭陣を打過させ給へば、直孝出向ひたるにらみて通らせ給ひぬ、孕石備前にかくと告れば孕石聞もあへず、其ごとく物に心得ざる大將は此方よりもきつとにらみかへすが然る

べく候といふ、程なくかへらせ給ふ時直孝出向ひければ、今朝の軍賞譽の御詞有りて打過させ給ふを孕石聞て合點ゆきたらんには其等の事なりといひけり。
はじめ陣を移しかふる時井伊家鐵砲をうたせし事ありし時、本多正信申せし事と相同じ、一事を二事に云傳へたるなるべし。

塙團右衛門阿波の陣へ夜討の事

大阪冬の陣に塙團右衛門重之阿波蜂須賀の陣所に夜討せんとばかり、
團右衛門は遠江横須賀の人なり、加藤嘉明に奉公して祿千石足輕を預りしに、關ヶ原の時嘉明塙に下知してそびき來れといはれしに塙行て見るに諸將みな陣々を整へてひかへ居たり、君命とはいへども敵に後を見せん事口惜く思ひ、種ヶ島の鐵砲をならべ散々に打立て歸りければ、嘉明汝は勇のみ有りて進退の理を辨へず、大將と成りて士卒を下知する事は思ひもよらず、汝を遣したるは我過なりといはれければ、塙敵弱ければ詮方なく、無理なる咎を蒙り候とて、夫より怨をふくみ伊豫を奔しける、其家の中に
遂不_レ留_二江南野水_一。高飛天地一閑鷗。といふ二句を大文字に書きたり、嘉明怒て塙が行先の奉公をかまはれしかば、塙所々にて落ぶれ、後には京の妙心寺大龍和尚の許に

居てとなり、僧名を鐵牛といふ、けさの上に刀を横たへ鉢を招く、人或はにくみ或はり誅けるが、遂に秀頼にまねかれたり。

年十六歳已上五十已下の士八十人をすぐり出す、從者各一人と定めたり塙と御宿越前と門口に鎧を入まじとて一人づゝしづかに出しけるが、鎧を取とて從者をよびさわがしければ塙怒りて刀にてせよ、何鎧とる事やある首な取そ、敵の旗を取として武具を奪ひとれと下知し、とつと押寄たり、蜂須賀至鎮の士大將中村右近白小袖を着、冑ばかり着て馳合せけるを、木村喜右衛門突伏しに稻田修理透間なく走り來り、木村と突合寄手駈集り防ぎ戦ふ、米田監物は池田左衛門督の陣所を押へ居しが、これもかけ來りおめいて攻入しかと寄手おひく_一にかけ集りしかば引返す、生駒又右衛門首とりて大野主馬が許に持せやり、猶進んで中村が倒れたるを見て首をとらんとする所を、修理が子九郎兵衛十五才なりしが生駒を討取りたり。

此夜討の前蜂須賀の士大將樋口内藏助今夜々討に入るべしといふ、若士どもいかゞして見定めたるやとさゝやく所に、中村右近もちをやきて振廻んとて内藏助をかたへに呼入れ、何とて夜討有べきやと問ふ、内藏助さればとよ、城の橋残らず焼落したるに本町口の橋ばかり焼ざるは夜討すべき爲なり、今日狭間より外をのぞき見る体見ゆるゆゑ、夜討入るべしと答ふ、皆さあらんとといふ、隣の陣の小屋稻田修理に餅をふるまはんと云遣す、修

理其まゝ来る、道はまはるなれば七八十間もあるべきに、とく来られ候といへば、修理間のしきりの板ある所にわらをこみおきぬ、それをはづして来りたりと答ふ、果して其夜半夜討入りたり、右近真先に出る、修理おしつゝき出たり、右近は背ばかり着たるに従者物具を持来りて着せたりともいへり、右近刀をより廻し敵の鎧を切拂ふ、修理大音あげて右近と、もにはたらき、右近は鎧七八本にて突伏たりといふ説もあり、右近が子若狹は阿波の留守に残し置れしに、其背に右近修理に向ひて若狹此度戰場に出ざる事を口惜くおもひ、度々来るべき旨いひおこせしを、軍法を破る罪をおそれ呼よせずと語る、修理尤にこそあれ、いひやりてとく来られよと告ぐべしといふ、そこにてとく若狹は陣屋近きあたりに来りてかくれ居しかば、よび入れて其討手に逢たり、右近父は次郎左衛門とて信長の扈從阿波守につけられて、縁千石士七十人添られけるとぞ。

塙はかねて支度して夜討の大將塙團右衛門と書たる木札を道々に撒せけり、和平の後今福口の南に長二尺あまりの木に塙團右衛門と書て建たりしを人々あやしみ問ふに、塙加藤嘉明我をにくみさがし出して誅せんといはれしと聞くゆゑ討手を待といへり、塙が好ある面々あまた訪来りけるに、水野勝成の士黒川三郎右衛門尋来りしかば、過し昔の交りをおもひ出して来られしこそ悦びなれ、林半右衛門は日比親しみ深かりき、いかにして一度の音づれもせぬにやいふか

しきといひければ、黒川聞て林は池田の家に奉公して今天満橋の陣所に有り、かくと尋て見んとて歸りしが、林にしかくといへば、林さればよ我塙と相約せしはたとへ大國を領すとも手づから鎧を提げ、おもふまゝに軍せずば男子にあらじといひつるに、塙夜討せし時橋上に將机に腰かけ馬じるし押立廳を取たりと聞く、年四十八老たりといふべきにもあらず、むかし相約せし詞にたがひたれば使をも遣さうりきといふ、黒川又塙が方に行きかくと語りければ、塙林がいふこそ理なれ、されども我嘉明に士卒を下知せんことおもひもよらずと罵られし事口惜く、一度廳をとり軍を下知して嘉明に知らせばやと思ひて、其夜も手づから鎧を横たへ突てかゝり度おもひしかどもさはせざりき、既に志を遂たれば重ねて軍のあらん時には鎧刀の折るはど戦はんといひしとかや。

木村畑田屋牧野四士武功の事

塙が夜討の時木村喜左衛門畑角太夫田屋右馬助牧野湖太四人鎧を合せしに、田屋は薙刀なり田屋をば鎧といふべからずといひしに、御宿越前聞て鎧も薙刀も柄は櫛の木にて及も同じ事の形の少したがひたる故に名は同じからねども、薙刀は短ければ敵に近き事鎧より一等近し、鎧といはんは何の仔細の有べきと秀頼に申て、四人とも鎧を合せたる感状を與へられたり。

木村重成感狀を辭せし事

大野主馬が組の士此夜討に功名有り、木村長門守を頼て感狀を賜はらん事を申す、木村聞て上にもよし聞し召したれば感狀においては定めて下し賜はるべし、但し感狀拜領して誰に披露せられんや、一本槍の士ならば又他國の主君に奉公せん時の眉目にすべし、大野兄弟は大阪の長臣たる身、君と存亡を共にすべき人の何のための感狀ぞやといひしに、主馬恥て詞なかりけり。

稻田九郎兵衛武功を語らざりし事

東照宮後稻田に御感狀を賜ふ、太平の後御旗本の人々稻田に逢て大阪夜討の時の事語られよといひしに、九郎兵衛聞て十五の年の事隔りてみな忘れたりとて強て問へども一言もいはず、公方より賜りたる感狀の詞をとへども存寄ざる賞を得て深くをさめ置き、再び見たる事なければども忘れたりとて語らざりしとなり。

細川三齋夜討評論の事

細川三齋病を養ふとて吉田に寓居せられける時、渡邊睡庵が事訪て物がたりする時、大阪に

て塙が夜討せし時、蜂須賀の士に感狀を賜はりたるは如何なるゆゑにや、夜討は虚を見て討つ事古今同じ、虚有りて討れしに賞有りしはいふかしくこそといふ、三齋聞て夏又事有るべきに遠く慮らせ給ひて、諸將の軍兵をすゝめはげまされんどの故なるべきにやといはれけり。

大阪城中軍評定の事

大阪和平破れて後秀頼軍評定の時、第一坐に長會我部、次に真田、其次に毛利豊前守列坐せり、秀頼大野修理を以て今度の合戦各所存を問はれけり、真田先長會我部に申され候へど辭し申ければ、長會我部聞て真田殿ならでかゝる圖を申出さるべき人有りともおもはれず、まづ申され候へど答へけり、真田さらば申て見ん、去年の軍は城固く兵糧も又多かりき、日數を過ば必西國の内を心をする人もあるべきか、寄手の中に心替も有るべしと何れも存寄たる處に、おもひの外に和平に及で惣堀はうめられぬ、今度は守り遂べき道有るべしとも存せず、只打出て軍する程ならば、君御出馬候ひて伏見の城を攻落し、即御上洛候て洛外をば焼はらひ、宇治勢田の橋を引落し、所々の要害をかたく守り、まづ洛中の政を御沙汰有るべし、其後勢ひによりて合戦の謀候べし、祝は申納めぬ若御運盡させおはしまし候とも、御上洛にて一度天下の主と號し奉り、洛中の御政務を執行はれんにおいては、後代の名聞是には過候まじといひし

に、長曾我部を始としてみな然るべしと同心しけるに、修理秀頼公の御旗を出されん事、かるくしきに似たりとて、背ぬ色を見て、修理が母を人質に出し置きぬ、いかなる所存にやと人々疑ひて議決せずしてやみけり、かゝる所に修理が母の人質に出し置たるも返し賜はりぬ、すでに關東の人數伏見に着くと聞えしかば、秀頼又諸大將を集めて再び軍の評定に及びけるに、長曾我部また最前の如く真田にゆづりければ、真田駿河大御所の軍だて常にはやりたると承り候に少しも違はず覺え候、其故に昨今伏見へ着陣して軍兵の疲をも休めずはや、茶臼山におし寄べきと申沙汰ははやり過たるに候はずや、伏見より大和路をおさば行程十三里なり、彌渡れ候べし、明夜は軍兵いかに存するとも胃を枕として一ねふりせぬ事や候べき、一夜討すべき圖に當りたると存候、左衛門佐龍向て一舉に勝負を決すべしと申ければ、後藤又兵衛いかに此謀然るべう存候、されども真田殿をもて夜討の大將とせんに萬にひとつも討死あらん時、人々力を失ひ候はん、今度國々の諸浪人馳集る事偏に真田殿一人を目わてに仕候、夜討をばかく申す又兵衛罷向ひ候なんといへば、真田とかくわれ罷向ふべしといふ、後藤は有無に後日の合戦大事なれば真田殿残りともまられよと爭論して、終に一決せでやみけるとなり。

堀直寄見切の事

大阪夏の軍に水野日向守勝成に大和口先陣の大將を命せらる、堀丹後守直寄松倉豊後守重政大和口に向ふ、五月五日夜ふけて勝成敵よせ來ると見えて松明多く見ゆ、懈るべからざるよしを諸將にいひ遣はす、丹後守聞て日向守は物になれたると聞きしに功者どもおもはれず、寄來る敵何ぞ松明を多くともさんや、敵にはあらじといふ處に、日向守又使を以て松明みな消たり、敵にはあらじと告知せられたれば、丹後守さては敵なり、何ごゝろもなくて火をともしつれたるが功者ありて消させたるならんといはれしが、果して後藤又兵衛なりけり。

山本權兵衛功名の事

松倉豊後守重政後藤又兵衛が陣を切崩す、松倉が士山本權兵衛義安十八歳にて鎧を合せ首をとりけるひまに鎧を敵にとられたり、其鎧じるし敵の中に見えしかば、今は是までなり討死せんと云すて、敵の中へ入りて鎧を取返し、其鎧にて又敵を突伏せ首を取りて歸りけり。

毛利孫左衛門野村越中を詰る事

大阪冬の軍に池田左衛門督の使番毛利孫左衛門先陣に行きしに村山越中毛利に向ひ、我今朝より敵近く居てつかれたる、指物を敵々鐵炮に打破られぬといふ、毛利我五百人の士の中より撰

ではろを許されたり、汝に誑かされんや、汝竹把の外に出すと覺ゆ、指物の先のみさけたるは其證なりといへば、村山答ふる詞なかりけり。

井伊木村桃戰重成討死井伊家諸士高名の事

附横田甚右衛門藤堂高虎を激ます事

菴原助右衛門は井伊家の士大將にて軍奉行なり、大坂夏の軍に五月六日に道明寺に向て先陣たり、井伊家の士大將川手主水成次は去年の冬より直孝をうらむる故有て討死せんと思ひ定めたり、出たちける日、父子最期の盃したりとかや、金の鷲口の指物にて眞先にかけて出る、山口伊豆守重信

山口修理亮重政嫡子伊豆守重信二男長次郎弘澄は御勘氣を蒙り、蟄居の身ながら井伊が陣をかりて忍びて出たり。

遠山甚次郎鷲阪彌五郎滿座七郎右衛門もおどらじとささげけす。

一説に内藤新十郎佐久間藏人山口左馬介三百計面もふらず切かゝり、井伊が先陣を押し崩す、此時井伊家の剛の者ははれなる鎧を合する士ありといへり、山口伊豆守は川崎和泉守を討取りたり、木村重成は田の中なる小高き處にひかへて下知しけるを、山口目にかけて睥をつた

いよりて沼の有りけるにふみ入て、畑の上なる重成と鎧を合せ、山口爰にて討死しけるといへり。

木村長門守重成が一陣鎧の鎧を揃へて待かけたれば川手を突伏せたり、菴原は提の上に折しきて居たるが、川手が倒る、時腰にさしたる金の磨のひらめくを見、つと立あがりかゝり候へと下知する詞の下より八田金十郎走り出で、眞先かけたる味方の斬伏られたる屍をふみ越て大音あげ、一番鎧と名乗り鎧を入れけるを敵三十人餘り取巻きたるに、えい〜と呼はり面もふらずたゝきわひたるが取巻れ、廿一ヶ所甲冑を突さかれ、既に討死すべき所に、戸塚左太夫を始として冑のしころをかたむけ、黒けむりを踏たて、井伊が軍兵一同にせつと押かゝり、木村が陣を切崩す、菴原は十文字の鎧をよこたへ、進んで木村を目にかけて立向へり、木村菴原を二鎧まで突たりしに、菴原鎧のしは首を握り、珠數を手に懸たるが念佛をとなへて野猪のあれたるが如く木村が鎧の下に走り入て突伏たり、安藤長三郎かけ來りて其首給はらんやといふ、菴原聞て大坂落城日あらじ敵の大將の首とる事易からむとゆるぞといへば、安藤木村が首を取り菴原はろかけたる武者を討取て其首に母衣絹添て奉る事軍法なり、大御所の實験に備へんに母衣絹につゝまれ候へどて母衣絹を安藤に與へしかば、菴原が從者母衣の出しにしたる白熊金のねち竹は菴原が許にとりめけり。

一説に陣所に馬盜あるべしとかねて、警しに、安藤長三郎不敵者にて用心もせず馬を盗まれ、翌日の軍に井伊家の軍兵木村と戦ひける時おくれたり、敵敗北に及びて長三郎走り付たるを、助右衛門見ておれに腰かけたるは能敵なり、討取といへば、長三郎動かずして死人の如くなる者討て功名にあらずと答ふ、菴原しゆれば長三郎あゆみより、詞をかくれども只首どれとのみいひて立あがらず、長三郎則ち突伏て首を取る、是木村重成なり、長三郎を賞して五百石あたへらる、此軍に千石の賞をあたへらる、者ありければ、長三郎憤りて立法けり、將の首を取たれども其法をしらざる故賞少しと直孝語られしとかや、長三郎は安藤帶刀の従子なり、又後井伊の家に歸り仕へて千石の祿をあたへられけり。川手満座山口は軍の塙に死し、遠山は敵の首を取て菴原に見するると立ながら死す、豊阪は小溝の中に倒れしが口の中に暖りありて、百姓の家にかき入れたりしが息出たすかりぬ、みな敵に逢ふ所早かりしかども、軍奉行の菴原が下知なき以前ゆゑにぬけがけとし、八田を一番鎧に定められ、東照宮御感狀を賜はりけり。

金十郎は一番鎧を合するのみならず、山口左馬介山口が弓頭飯塚太郎左衛門二人をも討取たりといへり、御感狀に黄金御馬を添て下さるともいへり。

木村が首を御前に出すに髪にたきしめし奇南香の薫せしかば御感あり、木村が首は四方白にて

鐵形の立物打ちたり。

安藤を伏見に召し青江の御脇差を賜はる、又一説に台徳院殿長三郎に黄金二十枚時服三ツ賜はるといへり。

菴原が子の主税助北の敵を追かけて組討しけるに助右衛門はせよりて、いかに主税こゝろしづかにせよ、爰にて見物するといひけり、主税是に力を得、脇差を抜て刺通し、よわる處に従者はしも來り、遂に其首を取り横地修理西郷伊豫是を見て東照宮に主税が幼年の武功を稱し申けり、後に入々子の敵にくみたるに援けざりしは如何にと問ひけるに、菴原たれも子はかはゆさものに候とのみ答へけり。

直孝木村と軍する時中に堤あり、又藤堂高虎も同じく敵に向ふ處に、久貝因幡守高安筑後使をもて敵と味方の中に堤の候、是をどらば味方勝申べしと御旗本を進め給ふべしと申す、東照宮怒らせ給ひ、これはどの事思慮なくて我先陣の大將つとまるべきや、敵堤をどらばすて、敵にわたへてこそ勝つべけれ、高虎ども覺えぬもの哉と仰せ有りし處に、小栗又市はせ來り、直孝只今敵にかゝり堤の候に此堤をどらば勝んといさみ候と申、東照宮とぞおらん必定勝なりと仰せられけり。又矢尾にて藤堂が先陣敵に向ふ、渡邊勘兵衛敵とせり合ひし時、高虎馬を御旗本に乗來り、御旗を寄られよと申もあへぬに、横田甚右衛門馬